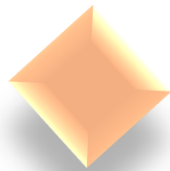


大学教育 — 2010 年台の変化

大学生・教員調査の 2 時点間比較



金子元久

2020 年 10 月 13 日

本研究は、下記の二つの科学研究費補助金の成果の一部である。

学術創成研究『高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析』、2005-2009 年度、研究代表者
金子元久、課題番号 17GS010

基盤研究（A）『大学教育改革の動態とその規定』、2018-2020 年度、研究代表者 金子元久、課題番号
18H03655

序

本書は 2007-10 年にかけておこなった大学生調査および大学教員調査（第 1 回調査）、および 2018 年―2019 年にかけておこなった第 2 回調査の結果をもとにして、ほぼ 2010 年から 2020 年にわたる 10 年間に日本の大学における教育がどのように変化してきたかを分析しようとするものである。

1. 目的

戦後日本の大学教育は、戦前からのエリート型の教育から、アメリカ型の民主的な大学教育へと、制度的な転換を行った。さらに 1960 年台はおりからの高度経済成長を反映して就学需要が急速に拡大し、いわゆるエリート段階から大衆化段階への劇的な飛躍が生じた。さらに 1990 年台からは 18 歳人口の減少を背景として、いわゆるユニバーサル段階に達している。しかしそれは量的な観点からの変化であって、ひとたび質的な内容に目を向ければ、むしろ従来の問題が変形して根強く残っているというべきであろう。

それは一言でいえば、大学における学生の学修の質的な密度が低い、という点にある。それは様々な形で戦後一貫して指摘されてきた点である。それは大衆化が進んだ一方で、教員一人あたりの学生数が多い、という経済的な貧困と同時に、大学の中での学生の学修経験の密度も低い。しかも学生・教員比率は 1990 年台以降は徐々に改善されてきているものの、学生の学修時間はまだアメリカのそれと比べても、圧倒的に短いことは、第一回調査の結果によって具体的に示された。

他方で、1990 年代からの社会経済変化は国際的に大学教育改革を重要な社会的課題とさせた。具体的には、高付加価値型の産業による発展が課題となり、大学卒業生の知識・技能の妥当性・有効性が求められるようになる一方で、経済成長率の鈍化によって公財政がひっ迫し、高等教育のコスト負担に困難が生じ、高等教育ユニバーサル化によって大学入学者の資質に大きな変化が生じてきた。

ここから生じる改革への要求は先進諸国に共通してみられる。さらに日本では 18 歳人口の減少が独自の要因となった。こうした背景から大学【改革】が課題となり、国立大学法人化（2004）、私学高度化推進特別補助（2004）、各種 G P（2005）、そしてその後の一連の競争資金の導入、各種補助金の選定における大学教育関連の項目の条件化、などの政策が進められてきた。その中軸となる論理は中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』（2008）、『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』（2012）などに述べられている。

こうした政策は恣意的に形成されたのではない。その背景にあったのは高等教育の現状に対して社会に共有される強い不満であった。また 18 歳人口の減少の中で大学の経営層も様々な改革を推進せざるを得なかった。しかしこのような情勢は前述の日本の特質との間に大きな軋轢を生じさせる。その中で【改革疲れ】も生じているといわれた。その中で日本の大学教育の実態はどのようなものであり、それはどのように変化しているのか。これが本調査の基本的な問題関心である。

2. 研究組織と調査

こうした観点から我々は、2008 年から 2011 年にかけて科研費【学術創成研究】をうけて一連の調査を行った。その一部が『全国学生調査』（2008）、および『全国教員調査』（2009）である。それから約 10 年たってその後の変化を知るために、第二回の学生、教員調査（2018、2019）を行った。¹

¹ 第 1 回調査の理論的背景は、体系的な分析は次にまとめられている。金子元久『大学教育の再構築』玉川大学出版部、2013 年。

実施

調査の実施にあたっては以下の二つの科学研究費補助金を得た。学術創成研究『高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析』、2005-2009 年度、研究代表者 金子元久、課題番号 17GS010、および基盤研究(A)『大学教育改革の動態とその規定』、2018-2020 年度、研究代表者 金子元久、課題番号 18H03655。また実施主体は東京大学大学院教育観研究科の経営政策研究センター（CRUMP）とした。調査の概要は以下のとおりである。

第 1 回	大学生調査	2007-8 年	123 大学、288 学部、48,233 人
	教員調査	2010 年	5,311 人 全国の大学からサンプリング
第 2 回	大学生調査	2018 年	77 大学 154 学部、32,913 人 第 1 回調査の協力校からサンプルを選出
	教員調査	2019 年	77 大学 154 学部、2829 人 大学生調査の協力校に依頼

学生調査

第 1 回 CRUMP の学生調査は 2007 年に、127 大学 288 学部の協力を得て実施し、回答者は 48、233 人だった。第 2 回 CRUMP の学生調査は、2018 年に第 1 回調査に協力いただいた大学に再び協力をお願いし、結果として、77 大学 154 学部の協力を得て、32,913 人から回答を得ることができた。

教員調査

第 1 回 CRUMP の『全国大学教員調査』は国公立大学の大学教員を対象として、2010 年 2 月に実施した。回答者数は 2、965 人、送出した調査票数に対して 30.6%となる。第 2 回の CRUMP 大学教員調査は、2019 年夏に行った。全国大学生調査に協力していただいた 77 大学、154 学部に所属する専任教員の方々に協力をお願いし、2,829 人の方から回答をいただいた。

参加者

調査票の設計、調査実施、分析には金子のほか、以下のメンバーが当たった（50 音順、所属は略）。阿曾沼明裕、王帥、小方直幸、谷村英洋、島一則、濱中義隆、林未央、朴澤泰男、両角亜希子、福留東土、吉川裕美子、山岸直司。

これまでの報告書

これらの調査の調査票、回答総平均、および各調査からの報告書については、<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>を参照されたい。主な報告書には以下のものがある。

- 『全国大学生調査―第 1 次報告書』（2008 年 5 月）<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/ccs%20report1.pdf>

- 『全国大学生調査 追跡調査報告書』（2009 年 12 月）<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/21%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%EF%BC%88Web%E7%94%A8%EF%BC%89.pdf>
- 『大学教育の現状と将来 ―全国大学教員調査― 報告書』（2010 年 6 月）<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kyoin-chosa.pdf>
- 『第 2 回全国大学生調査（2018）第 1 次報告書』、2019 年 8 月。http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/%E3%80%8E%E7%AC%AC2%E5%9B%9E%E5%85%A8%E5%9B%BD%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E8%AA%BF%E6%9F%BB%EF%BC%882018%EF%BC%89_%E7%AC%AC%E7%BC%91%E6%AC%A1%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E3%80%8F%20ver.4.pdf

3. 本書における分析

本書はこれまでの 2 回にわたる大学生調査、大学教員のデータをまとめることによって観察し得ることを目的としている。

分析の内容

第1章では学生調査を中心として、学生の受けた授業、学生が考える授業の効果、満足度、生活様態、そして大学入学以前の学習行動などの主要項目について、2007年と2018年の調査結果を比較し、大きな変化が見られた点、あるいは見られなかった点についてまとめた。

第2章は、教員調査の結果から、大学教員の授業の実践、授業への考え方、授業の効果について考えかた、大学の教育方針、授業に対する接し方の変化、そして高等教育の政策などについて、2010年の2019年との相違をまとめた。また必要におうじて、専門分野、年齢などのとの関連を分析した。

第3章では、学生調査の結果と教員調査の結果を対比した。とくに第2回調査では、同じ大学・学部にある教員、学生の双方に調査を行っていることから、教員の認知・行動と、学生のそれとの関連を分析することが可能となった。このために、(第1回、第2回の学生データの平均・分布、第2回の教員回答の平均・分布を内容とする、学部を単位とするデータセットを作成して分析した。これらを用いて、具体的に教員と学生の相互作用がどのような意味を、大学授業のあり方とその効果に与えるかを分析した。

統計的観点と二時点間比較分析のためのデータ補正

本書の分析の多くは、データの二時点間の比較に焦点をおいている。このため二時点間の差異の統計的な有意性が重要な視点となるが、2回の調査ともサンプル数がかなり多いために、グラフなどを目視して一定の差がみられる場合はほとんど統計的な有意性がある。分析中においても、差があることを指摘している場合には、有意水準を99パーセントとして有意であることを基準とし、煩雑をさけるために、一部を除いて、とくに差の有意水準を明記していない。

なお学生、教員調査のいずれにおいても、調査実施上の制約から、厳密なサンプリングを行っていない。また行っていたとしても、結果としてのサンプルに何等かの偏りが生じることは避けがたい。これは2時点間の比較に特に重要な障害となる。またこの調査の回答への協力をいただいた大学は国立大学が多かったために、サンプルには国立大学が多く含まれている。このため、サンプルを、設置者別の分布によって補正することとした。母集団については学校基本調査における、大学生および大学教員の分布を用いた。サンプルおよび母集団の分布、およびそこから算出した補正係数については、附Aおよび附Bに示した。

以下の本書での統計数値はすべて、この補正を行ったものを用いる。またしたがって、各図表にはサンプル数を表示しない。

内容

序.....	3
1. 目的	3
2. 研究組織と調査	3
3. 本書における分析	5
第1章. 学生調査.....	9
1.0 概観	9
1.1 授業の経験.....	10
授業形態	10
学習時間	13
1.2 授業と能力形成	14
1.3 知識・能力の自己評価	17
1.4 補助的教育	19
1.5 大学に対する満足度	21
1.6 学習動機	23
1.7 高校時代の学習時間	26
1.8 読書	27
1.9 分析のまとめ	28
変化した点	28
解釈のための仮説	29
検討すべき課題	30
第2章. 教員調査.....	31
2.0 概観	31
2.1 授業の方法、期待される効果、理念.....	32
授業方法	32
授業方法の有効性の評価	34
2.2 教育の組織的志向.....	35
組織としての志向	35
組織としての教育 — 将来の方向	38
2.3 教育理念、変化の方向	40
教育理念	40
大学教育の現状、方向についての意見	42
2.4 大学組織についての意見.....	44
FD の有効性	44
所属大学の課題	45
学長の選任.....	47
2.5 分析のまとめ	49

変化した点.....	49
何を示しているか.....	50
第3章 学部単位でみた変化.....	52
3.1 教室外の学習時間.....	52
3.2 授業の有効感.....	54
3.3 学生の学習実態の教員に対する影響.....	57
3.4 学部単位 of 分析のまとめ.....	58
結論	59
附 A 学生調査	62
サンプルの設置者別の構成とそれによる補正.....	62
1) 第1回調査サンプル.....	62
2) 第2回調査サンプル.....	62
第1回大学生調査 質問票.....	63
第2回大学生調査 質問票.....	67
第1回と第2回結果の比較 — 総括表	70
附 B 教員調査の概要	72
第1回教員調査質問票.....	73
第2回教員調査質問票	77
第1調査と第2回調査の結果の比較 - 総括表.....	80

第 1 章．学生調査

1.0 概観

第 1 回の大学生調査と第 2 回のそれとには、回答の選択をする質問としては、10 問の質問があり、総数で 68 の項目がある。その回答を比較して、少なくとも一つの選択肢（＜強くそう思う＞、＜そう思う＞、等）の選択率が 2 時点間で 5%ポイント以上あった項目を算出した。また同様に少なくとも 10%ポイント以上あった項目も算出した（図表 1.0.1）。これを見ると、5%ポイント以上の変化があった項目は全体の約半数にあたり、10%ポイント以上の変化があった項目は全体の約 7 分の 1 の 16 パーセントだった。

変化があった点は次のようにまとめることができる。第一は大学の教育プログラム、授業方法に関する質問（第 2 回調査の問 2、問 4）、第二は授業に対する学生の評価および大学に対する満足度（問 8）で、おおむねプラスの方向への変化がみられる。第三に、高校での学習時間、読んだ本の数で、ここでは顕著なマイナスの方向への変化がみられた。他方で変化のなかった項目も、変化のあった項目との関連を考えると、重要な示唆を与えるものと考えられる。

図表 1.0.1 変化があった項目数のカウント

第 1 回	第 2 回		比較可能な質問数	変化があった項目数		割合 (%)	
				5%以上	10%以上	5%以上	10%以上
問 1	問 2	入学後の経験・あったか	7	7	4	100.0	57.1
問 1	問 2	入学後の経験・有用か	6	1	0	16.7	0.0
問 3	問 3	受けた授業の形態・規模	5	0	0	0.0	0.0
問 4	問 4	授業方法・あったか	8	8	3	100.0	37.5
		授業方法・必要か	8	0	0	0.0	0.0
問 11	問 7	自分の将来・大学との関係	3	0	0	0.0	0.0
問 8	問 8	授業は役立っているか	9	6	1	66.7	11.1
		自分の実力	9	4	1	44.4	11.1
問 9	問 9	満足度	7	6	1	85.7	14.3
問 23	問 10	高校での学習時間	1	1	0	100.0	0.0
問 18	問 11	本を読む冊数	1	1	1	100.0	100.0
問 29	問 15	悩み	4	2	0	50.0	0.0
		計	68	36	11	52.9	16.2

注： 網掛けは、5%以上の変化があった項目が半数を超える場合

以下では特に変化のあった項目を中心として分析を行い、さらにそれとの関連で変化のなかった項目が意味するものを考える。

1.1 授業の経験

授業形態

まず注目されるのは学生の経験した授業についての変化である。授業方法についていくつかの点から聞いている。授業方法の普及度のパターンをみると、第2回調査の結果は、第1回とほぼ同様であった（図表1.1.1 および図表1.1.2）。すなわち【e. 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される】、および【d. 出席が重視される】が最も高く、＜よくあった＞と＜ある程度あった＞を加えると8割から9割に達する。他方で【f.適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される】については3割程度にすぎない

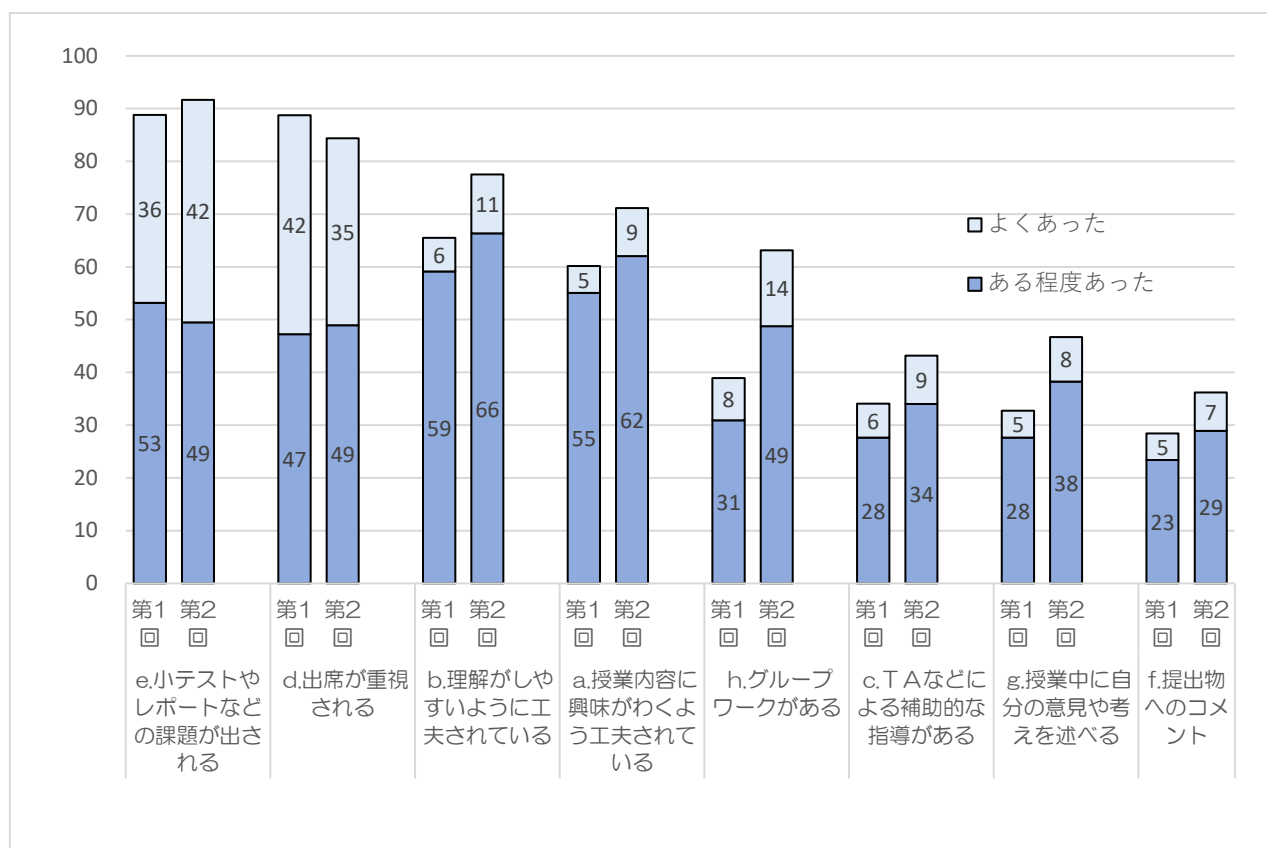
図表 1.1.1 体験した授業方法 ー項目ごとの変化

	第2回調査(%)				第1回からの増減(%ポイント)				肯定の増減(%ポイント)
	なかつた	ほとんど	あまりなかった	ある程度あった	なかつた	ほとんど	あまりなかった	ある程度あった	
e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される	1.2	7.1	49.5	42.2	-0.5	-2.3	-3.7	6.6	2.9
d.出席が重視される	2.8	12.9	49.0	35.4	0.8	3.6	1.8	-6.1	-4.3
b.理解がしやすいように工夫されている	2.6	19.9	66.3	11.1	-2.0	-10.0	7.2	4.8	12.0
a.授業内容に興味がわくよう工夫されている	4.0	24.8	62.0	9.1	-2.8	-8.2	7.0	4.0	12.0
h.グループワークなど、学生が参加する機会がある	7.5	29.3	48.8	14.4	-17.0	-7.2	17.8	6.4	24.2
c.TAなどによる補助的な指導がある	23.3	33.6	34.0	9.1	-9.5	0.4	6.3	2.7	9.0
g.授業中に自分の意見や考えを述べる	14.2	39.1	38.3	8.4	-11.5	-2.5	10.6	3.3	13.9
f.適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される	25.6	38.2	28.9	7.3	-7.9	0.2	5.5	2.2	7.7

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問4、第2回の問4から算出

図表 1.1.2 体験した授業方法 — 第 1 回と第 2 回の対比



出所： 第1回の問4、第2回の問4。

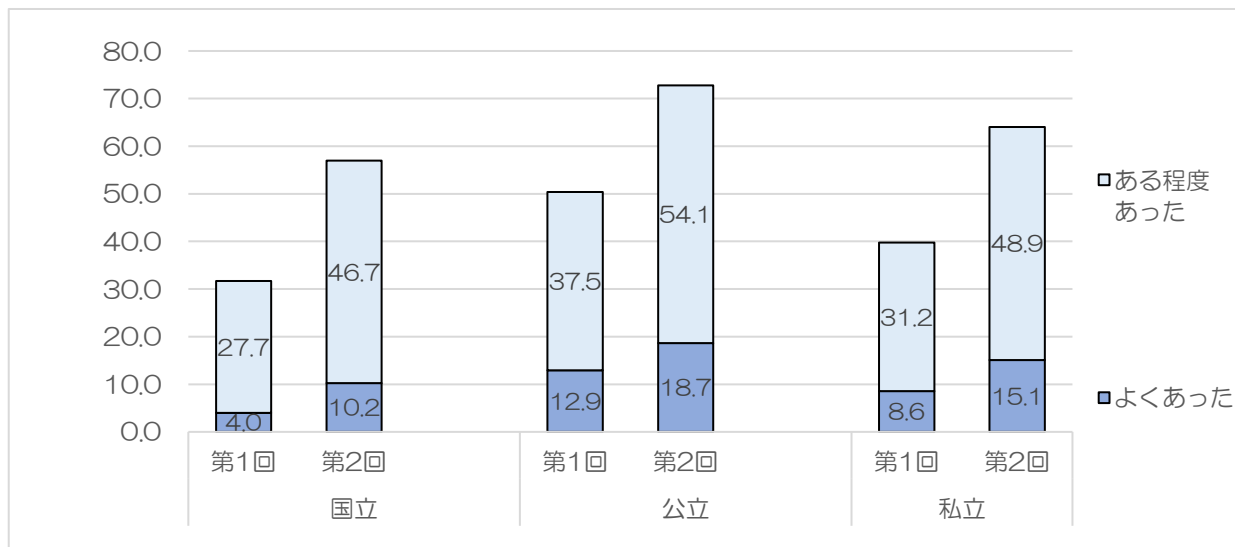
ただし授業方法の頻度は全般に増加している。すでにほぼ飽和に達している【e. 小テスト、レポート】および【d. 出席】をのぞけば、他の授業方法があったとする回答は、第1回から第2回の間にかなり拡大している。とくに【h. グループワークなど、学生が参加する機会がある】については肯定（＜よくあった＞と＜ある程度あった＞の計）が 24%ポイントも上昇している。また【g. 授業中に自分の意見や考えを述べる】についても肯定が 14%ポイントの上昇を見せている。要するに学生の参加を促すタイプの授業が大幅に普及した。

その次に拡大したのが【b. 理解がしやすいように工夫されている】および【a. 授業内容に興味がわくよう工夫されている】で、それぞれ 12%ポイントの幅で上昇した。さらに【c. TAなどによる補助的な指導がある】および【f. 適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される】もそれぞれ 9～8%ポイント上昇した。授業で教える対象を中軸とした授業改善はある程度、進んでいるものの、また絶対水準自体が高いとはいえない。

このような変化は、大学の設置者別にみても、相違は少ない。特に、学生参加志向の授業の拡大は、国公立の大学設置者により差が少なく、ほぼ一般に進んでいる（図表 1.1.3）。これは後述の教員調査の結果とも符合している。この十年間における、もっとも注目すべき変化といえよう。

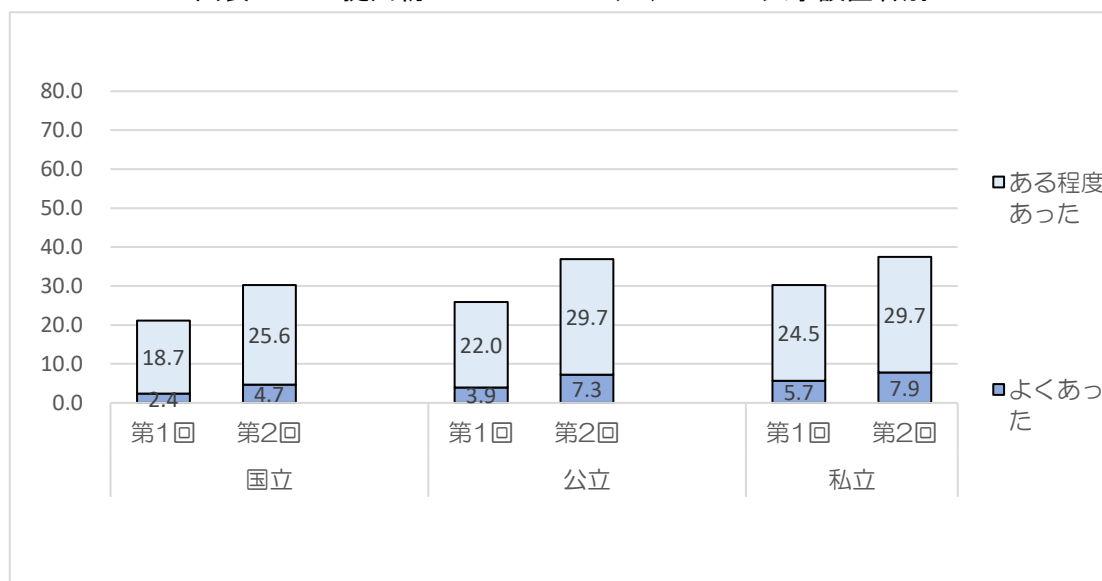
なお設置者別の差が少ないのは他の項目についてもほぼ同様であることは、たとえば【f. 提出物へのコメント】についてもみられる（図表 1.1.4）。

図表 1.1.3 グループワークの変化（％）－ 大学設置者別



出所： 前図表に同じ。

図表 1.1.4 提出物へのコメント（％）－ 大学設置者別



出所： 前図表に同じ。

学習時間

第 1 回 CRUMP の結果は 2007 年の時点で、日本の大学生が授業外での学習に使っている時間がきわめて少ないことを示した。学期中の生活時間の中で（一週間）、【授業・実験の課題の準備・復習】に使っている時間としては、＜0 時間＞が約 1 割、＜1－5＞時間が約 6 割で、授業外での学習時間が 5 時間に満たない学生があわせて 7 割におよぶことが明らかになった。これは大学設置基準が要求する授業外学習時間の約半分にすぎず、アメリカと比べても、きわめて低水準にある。

第 2 回 CRUMP 調査でも学習時間についての質問を設定した。ただし、以前の調査では＜1-5 時間＞としていた選択肢を、＜1-2 時間＞と＜3-5 時間＞の二つに分割した。しかしこの結果は予想外の結果をもたらしたと考えられる。

学生の学習時間については、第 1 回 CRUMP 調査（2007 年）のあとに、国立教育政策研究所が、同様の質問票をもちいて、2014 年からほぼ 2 年ごとに調査を行っている。²第 1 回 CRUMP 調査の結果と、その後の国立教育政策研究所の 2 回の調査、そして今回の第 2 回 CRUMP 調査の結果をまとめて図表 1.1.5 に示した。

・図表 1.1.5 教室外学習時間の分布 -1, 2 回学生調査と国立政策研究所調査

	6 時間未満				6－10 時間	11－15 時間	16 時間以上
	計	0 時間	1-2 時間	3-5 時間			
第 1 回 CRUMP (2007)	66	10	56		19	8	8
国研 2014	69	12	57		19	7	5
国研 2016	69	11	58		20	7	4
国研 2019	67	9	58		18	7	6
第 2 回 CRUMP (2018)	74	9	36	30	15	5	5

CRUMP2007,2018 は 1~3 学年生のみ、国公私立の構成比による補正済み。

国研調査は 1, 2 学年生のみ

これをみると、国研調査では学習時間 6 時間未満が、2010 年台に入ってもほとんど停滞しているという結果が出ており、しかもそれが安定している。これに比べると、第 2 回 CRUMP 調査では 6 時間未満が大きい。他方で＜6-10 時間＞が小さい。これは、これまでであれば＜6-10 時間＞を選択していた回答者の一定の部分が、＜3-5 時間＞を選択したと結果でると考えられる。したがって、第 1 回調査と第 2 回調査の間で、6 時間未満の学生の割合を直接には比較することができないことになる。

² 濱中義隆「大学の授業はどう変化したのか」、『IDE 現代の高等教育』、624（2020 年 11 月）

1.2 授業と能力形成

調査票は大学の授業が自分の知識・能力、コンピテンシーにどの程度、役に立っていると思うかを聞いている。結果をみると（図表 1.2.1 および図表 1.2.2）、第 1 回、第 2 回ともに、【b. 専門分野の知識・理解】において肯定的な答えが多く、より一般的なコンピテンシーにかかわる項目（ a. 【将来の職業に関連する知識や技能】、【f. 幅広い知識、もののみかた】、【e. ものごとを分析的・批判的に考える力】）について評価が低い、というパターンは変わっていない。

しかし第 1 回と第 2 回とを比べれば、五つの項目すべてにおいて、肯定的な評価に大きくシフトしている。とくに比較的に評価が低かった【c. 論理的に文章を書く力】については、第 1 回では肯定の答え（＜役立っている＞と＜ある程度役にたっている＞の計）が 5 割弱にすぎず、否定的な答えよりもむしろ少なかったが、今回では肯定的な評価が 16%ポイント上昇し、肯定的な評価が 6 割に達した。また外国語についてもある程度、評価があがっている。

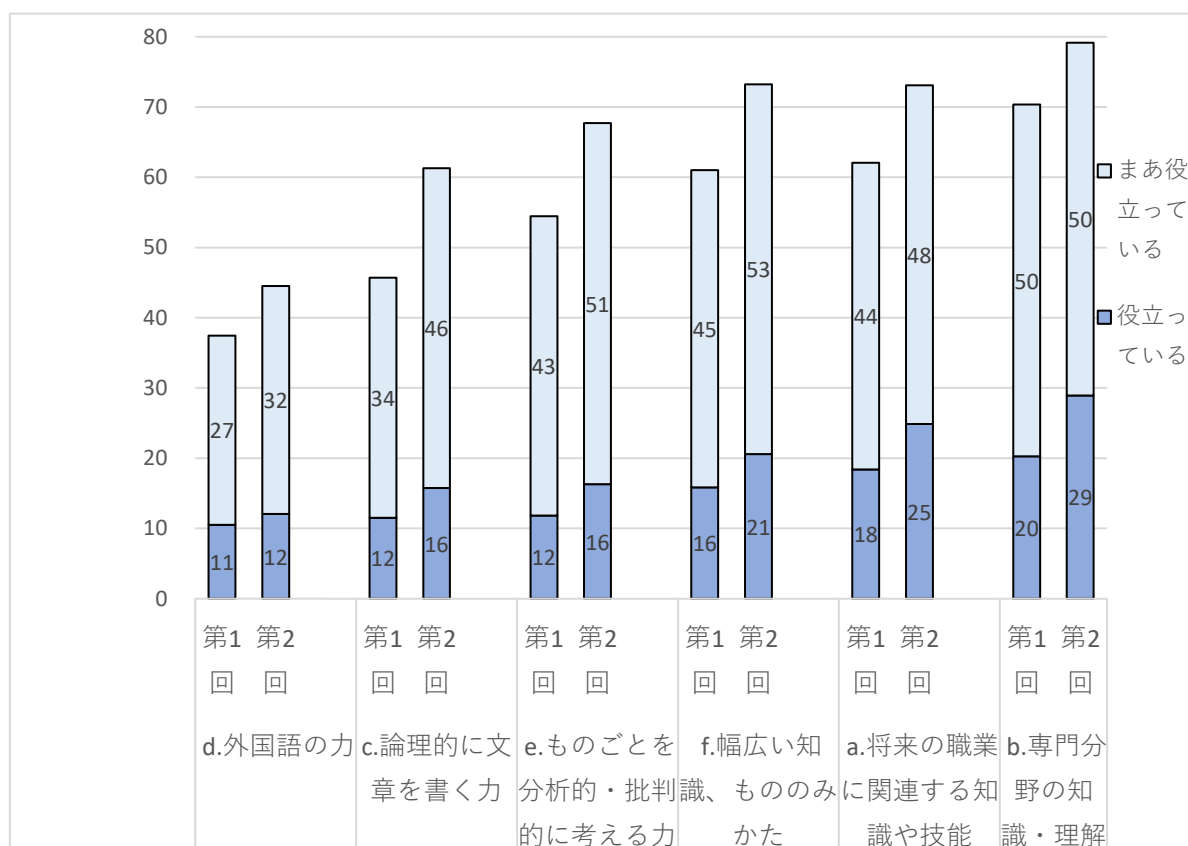
図表 1.2.1 授業と能力形成 ー変化幅

	第2回調査（％）					第1回からの増減(％ポイント)					肯定の増減(％ポイント)
	役に立っていない	あまり役に立っていない	まあ役に立っている	役に立っている	計	役に立っていない	あまり役に立っていない	ある程度役に立っている	役に立っている		
b.専門分野の知識・理解	3.4	17.5	50.2	28.9	100.0	-1.4	-7.4	0.1	8.7	8.8	
a.将来の職業に関連する知識や技能	5.4	21.5	48.2	24.9	100.0	-3.3	-7.8	4.6	6.5	11.1	
f.幅広い知識、もののみかた	4.1	22.6	52.7	20.6	100.0	-3.6	-8.6	7.5	4.7	12.2	
e.ものごとを分析的・批判的に考える力	4.7	27.6	51.4	16.3	100.0	-4.5	-8.8	8.8	4.5	13.3	
c.論理的に文章を書く力	7.1	31.5	45.6	15.7	100.0	-7.8	-7.8	11.4	4.2	15.7	
d.外国語の力	19.1	36.4	32.4	12.1	100.0	-7.0	-0.1	5.5	1.5	7.0	

注： 網掛けは【第 1 回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定的増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第 1 回の問 8、第 2 回の問 8.

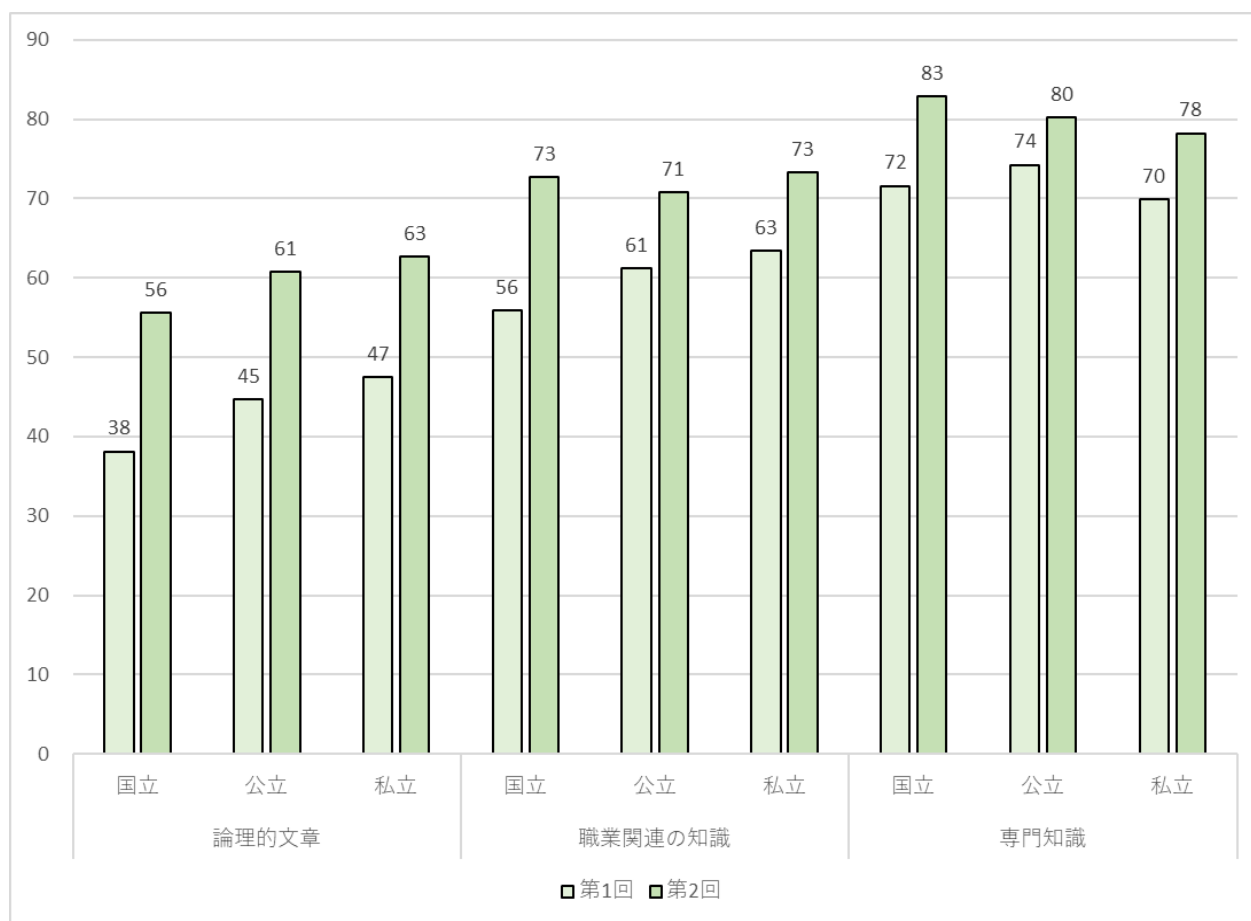
図表 1.2.2 授業の効果



出所： 前図表に同じ。

また設置者別にみても（図表 1.2.3）、第 1 回と第 2 回のいずれにおいても、汎用的なコンピテンスについて国公立より私立大学のほうが評価が高い。ただし経時的にみれば、いずれの項目においても、設置形態にかかわらず、評価が肯定のほうに大きく転換している。

図表 1.2.3 授業の効果 ―大学の設置者別



出所： 前図表に同じ。

これらの結果の解釈は必ずしも自明ではない。以下の三つの説明が考えられる。

- ① 実際に授業が改善され、それぞれの効果があがるようになっている。
- ② 大学、教員が授業がどのような知識・能力を形成するかを説明している。カリキュラム・ポリシー、あるいは「カリキュラム・マップ」などによって授業が何を目的にしているかを明文化し、教員がそれを意識するとともに、学生もある程度、そうした狙いを理解するようになっている。
- ③ 学生が心理的に大学教育を肯定的に評価する傾向が強くなっている。社会的な大学教育への疑念が広がっている状況の中で、学生は教育を受けている立場を正当化する傾向が強くなっている。

上のいずれの仮設が正しいのか、あるいはより強い影響を与えているかは、このデータのみでは判断できない。しかし後述のように、学生の教室外での学習時間がほとんど停滞していることを考えれば、①のみでは説明がつかないことは認めなければならない。

1.3 知識・能力の自己評価

では学生は自分自身の能力をどのように評価しているのか。知識・能力についての五つの項目への回答でみると（図表 1.3.1、図表 1.3.2）、半数程度の学生が＜やや不十分＞と答えており、自己評価はあまり高くない。項目別にみると、汎用的な知識・技能（【 f. 幅広い知識、もののみかた】、【 e. ものごとを分析的・批判的に考える力】）で高く、より具体的なし学術的な知識・能力（【 b. 専門分野の知識・理解】、【 a. 将来の職業に関連する知識や技能】）ほど低くなる傾向がみられる。さらに【 c. 論理的に文章を書く力】では肯定（＜十分＞ないし＜まあ十分＞）は 3 割程度にすぎない。さらに【 d. 外国語の力】では肯定は 2 割程度となる。

ただし、第 1 回と第 2 回を比較すると、いずれの項目でも肯定的な評価が増加している。とくに第 1 回で低かった、【職業知識】および【専門分野での知識】については、8~9 パーセントポイントの幅で上昇している。

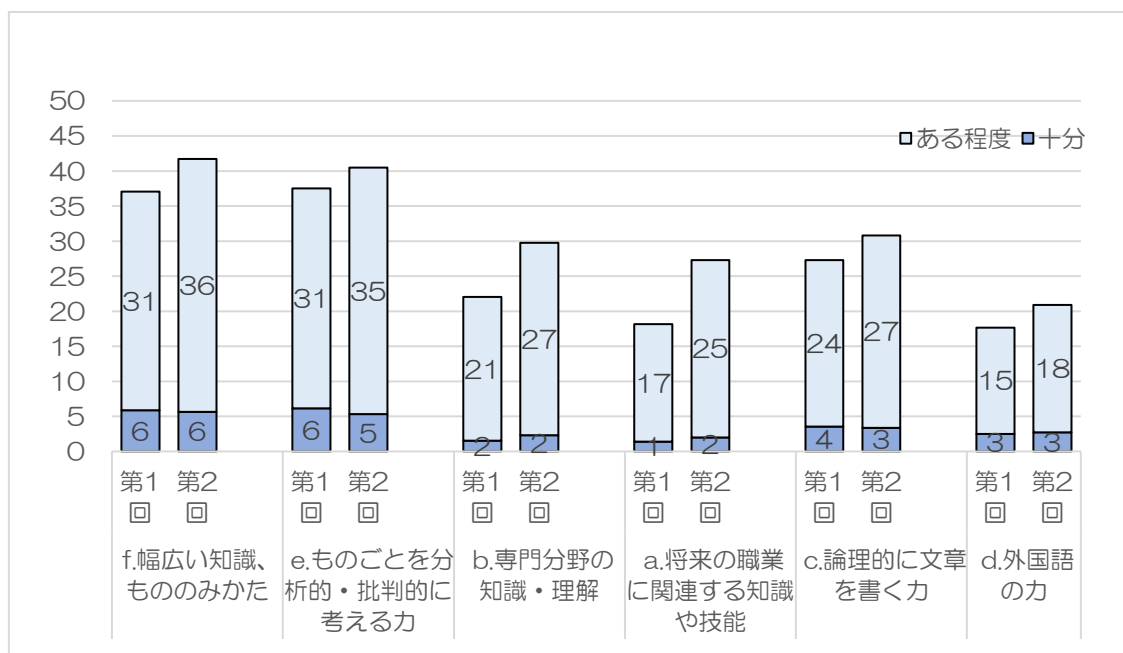
・図表 1.3.1 知識・能力の自己評価

	第2回				第1回からの増減				減 肯定的な回答の増
	不十分	やや不十分	まあ十分	十分	不十分	あまり十分でない	ある程度十分	十分	
f.幅広い知識、もののみかた	12.2	46.1	36.0	5.7	-4.7	0.0	4.9	-0.2	4.7
e.ものごとを分析的・批判的に考える力	12.9	46.6	35.2	5.3	-4.3	1.3	3.8	-0.8	3.0
b.専門分野の知識・理解	17.0	53.2	27.5	2.3	-7.3	-0.3	6.9	0.8	7.7
a.将来の職業に関連する知識や技能	18.4	54.3	25.3	2.0	-10.3	1.1	8.6	0.6	9.2
c.論理的に文章を書く力	20.0	49.2	27.5	3.3	-9.1	5.6	3.7	-0.2	3.5
d.外国語の力	36.6	42.5	18.2	2.7	-9.2	6.0	3.0	0.2	3.2

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

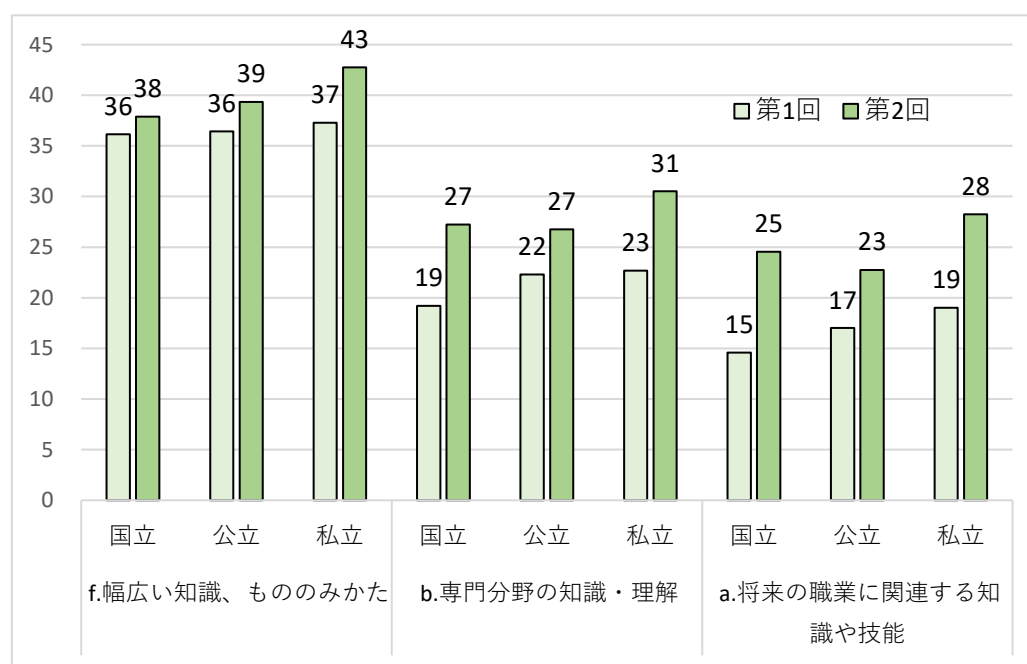
出所： 第1回の問8、第2回の問8。

・図表 1.3.2 知識・能力の自己評価



出所： 前図表に同じ。

・図表 1.3.3 知識・能力の自己評価 ー設置者別



また設置者別にみると（図表 1.3.3）,国公立のいずれにおいても肯定的な評価の上昇がみられた。

知識・能力の自己評価についての解釈には注意が必要である。一般に心理学では、知識・能力の自己評価と、客観的な方法で計測したそれとの間には、U字型の関係があることが知られている（Dunning–Kruger effect）。

すなわち、客観的な水準が最も低い段階ではむしろ主観的な自己評価は高く、客観的な水準が高くなるにしたがって、自己評価は低下し、さらに客観的な水準が高くなれば自己評価も高い。したがってこの推移の左側をみれば、むしろ自己評価は客観的な水準とは逆の関係をもつ。客観的な水準が低い場合には自分を評価する基準自体が限られており、その視点からみれば自己評価が高くなる、と解される。実際、第 1 回のデータにおいては、所属大学の入学選抜性と、知識・能力の自己評価とは優位なマイナスの関係があった。

また大学設置差別にみても（図表 1.3.3）、選抜性が平均して低い私立大学における自己評価が、一貫して国公立よりも高い傾向がみられる。ただし上記の効果は時系列的な変化にあてはまるとは考えにくい。国公立のいずれについても、2 時点間では増加がみられる点からすると、この効果が大きな影響を与えているわけではないと考えられる。

むしろここでみられる自己評価は授業の効果への評価と同様に、①.客観的な水準の増加、②.大学教育の理念・目的のアナウンスメント効果、あるいは③.若者の自己評価の判断基準の変化、の効果を反映しているものとみられる。①、②は上述の授業の効果、大学への満足度と同様である。③については、アメリカにおいては若者のナルシズム化が指摘されていることを想起させる。また第 1 回の調査はいわゆる就職氷河期であったのに対し、第 2 回調査は就職市場が好転していたこととも関係があるかもしれない。

1.4 補助的教育

2000 年代には大学における正規の専門、教養教育のほかに、学生の学修の補助、キャリアへの誘導など、補助的な教育手段の重要性が指摘された。そうした教育を受けた経験の有無について第 1 回調査と第 2 回調査を比較した（図表 1.4.1 および図表 1.4.2）。

その結果をみると、2010 年代に学生の学修を補助する教育が大きく普及してきたことがわかる。最も増加の幅が大きかったのは【b.高校での未修科目を学ぶための補修的な科目】で、第 1 回では 33 パーセントの学生が経験していたが、第 2 回ではそれが 51 パーセント、18%ポイントも上昇した。この背景には入試の要求科目の変化があると考えられる。

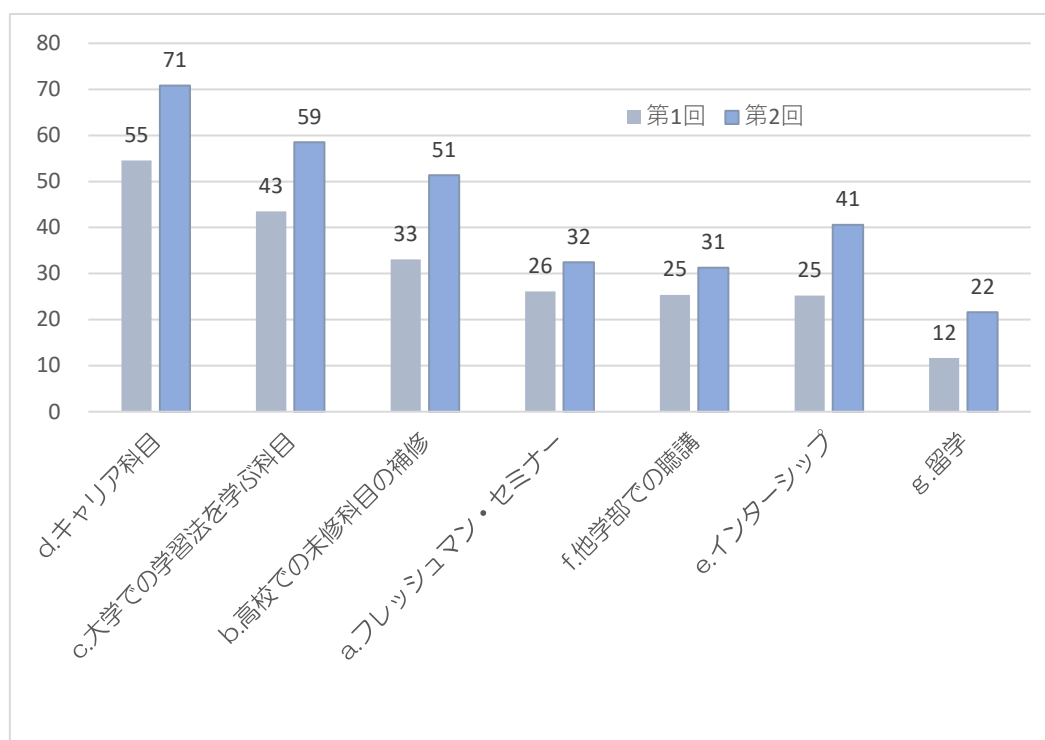
図表 1.4.1 補助的教育の経験

	第 1 回 (%)	第 2 回 (%)	変化 (%ポイント)
d. 就職や将来のキャリアをテーマとした科目	54.5	70.8	16.3
c. 大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目	43.5	58.5	15.1
b. 高校での未修科目を学ぶための補修的な科目	33.1	51.4	18.3
a. フレッシュマン・セミナー	26.1	32.4	6.3
f. 他学部での聴講	25.4	31.3	5.9
e. インターシップ（教育実習や工場実習を含む）	25.3	40.6	15.4
g. 留学	11.7	21.6	9.9

注： 網掛けは【第 1 回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第 1 回の問 1、第 2 回の問 2。

•図表 1.4.2 補助的教育の経験（％）

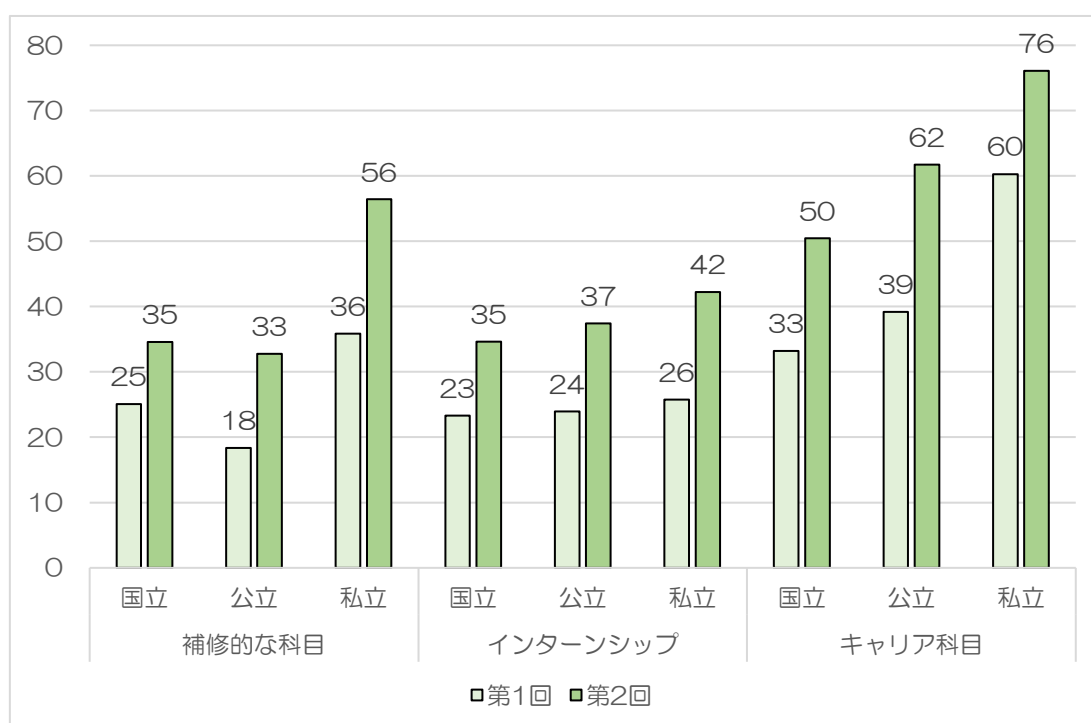


出所： 前図表に同じ。

これに次いで学生の卒業後のキャリアに関連した教育も普及している。【d.就職や将来のキャリアをテーマとした科目】を経験した学生は第1回調査時点から16%ポイント増えて、71パーセントとなっている。また【e.インターシップ（教育実習や工場実習を含む）】については第1回調査の時点では耳新しいものであって、経験した学生は第1回の時点では25パーセントにすぎなかったが、今回では41パーセントと大幅に拡大した。

こうした教育は、学生のニーズに敏感な私立大学においてより普及しやすいと考えられる。たしかに今回の結果をみると（図表1.4.3）、2時点のいずれについても、国公立より私立大学においてはるかに普及の程度が高いことは事実である。また2時点間を比較すると、とくに【補修的な科目】について私立大学の普及が著しい（20%ポイント）。しかし国公立大学においてもこの十年間の間に、こうした教育は着実に普及してきたといえる。

•図表 1.4.3 補助的な教育の経験(%) -設置形態別



出所： 前図表に同じ。

1.5 大学に対する満足度

質問票は学生の大学に対する満足度をいくつかの項目について聞いている。回答を見ると(図表 1.5.1 および図表 1.5.2)、第1回、第2回のいずれについても、【c. 図書館などの学習施設】については比較的満足度が高いものの、【d. PCなどの情報環境、サポート】については満足度が下がり、【b. 授業外での教員との接触】、【e. 就職指導】、【f. 学習・その他のサポート】については満足度が下がる。物理的な施設よりも、より人的なサービスについて満足度が低い傾向は変わらないといえよう。

ただしいずれの項目についても、第1回から第2回にかけて満足度が上がっている。とくに【f. 学習・その他のサポート】については、肯定的な回答(<満足>と<ある程度満足>)が第一回調査では半数で、肯定、否定がほぼ同数であったのが、第2回調査では肯定が13%ポイント上昇し、6割を超えた。同様に【情報環境】、【教員との接触】、【就職指導】についても満足度は1割程度上昇している。

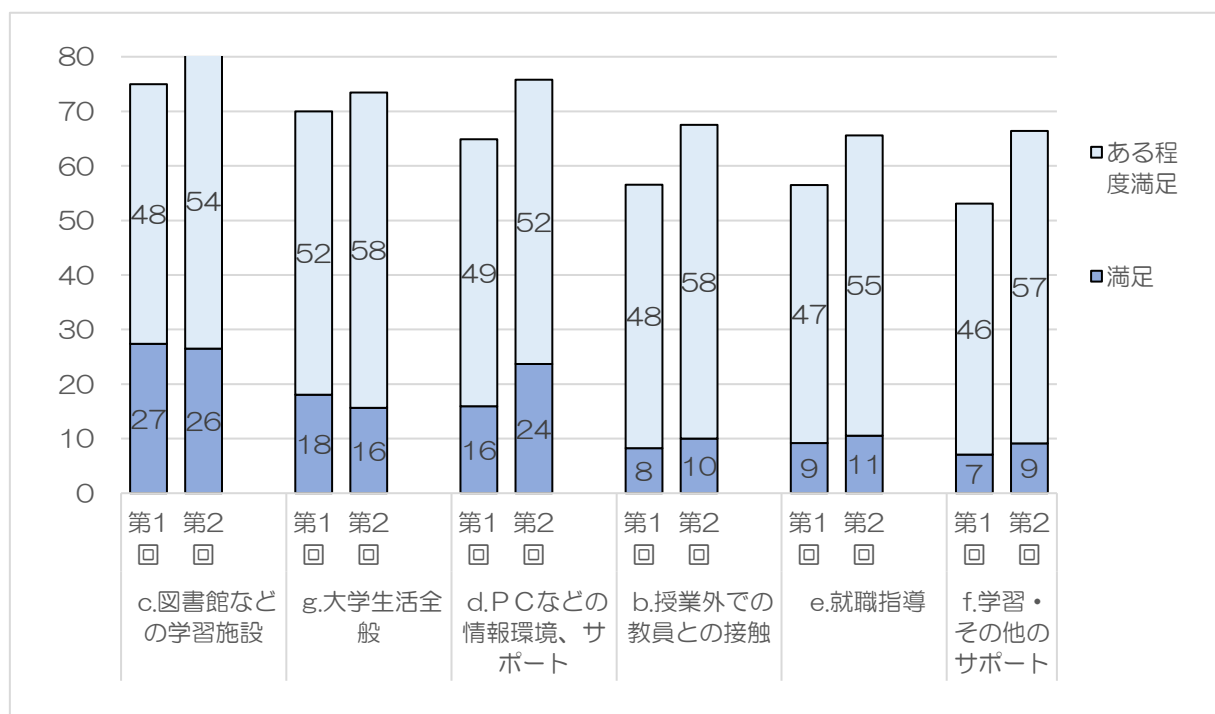
図表 1.5.1 大学への満足度

	第2回調査					第1回からの増減				肯定的な答えの変化
	不満	ある程度不満	ある程度満足	満足	計	不満	ある程度不満	ある程度満足	満足	
c.図書館などの学習施設	4.8	14.8	54.0	26.5	100.0	-3.6	-1.8	6.3	-0.9	5.5
g.大学生活全般	6.1	20.4	57.8	15.6	100.0	-2.6	-0.9	5.9	-2.4	3.5
d.PCなどの情報環境、サポート	6.3	17.9	52.1	23.7	100.0	-4.2	-6.7	3.2	7.7	10.9
b.授業外での教員との接触	6.0	26.5	57.5	10.0	100.0	-5.6	-5.4	9.2	1.8	11.0
e.就職指導	7.1	27.4	55.0	10.6	100.0	-5.0	-4.1	7.7	1.4	9.1
f.学習・その他のサポート	6.0	27.7	57.3	9.1	100.0	-6.1	-7.2	11.2	2.1	13.3

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定的増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問9、第2回の問9。

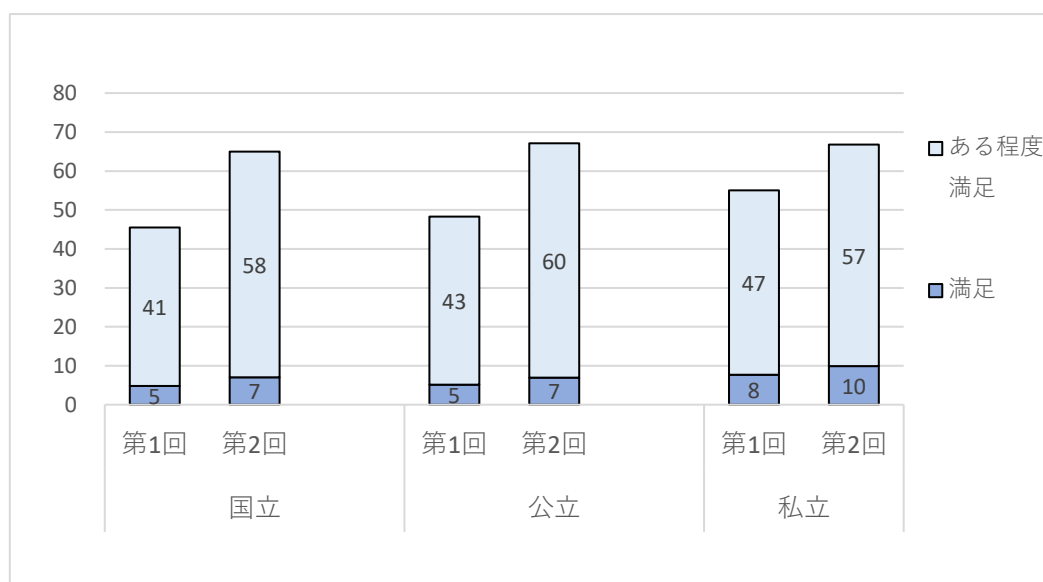
表 1.5.2 大学への満足度



出所： 前図表に同じ。

満足度を大学の設置者別にみると、国公立のいずれでも大幅に満足度が上昇していることが明らかである。目立つのはとくに国立大学で満足度が上昇している点である。たとえば【f. 学習そのほかの点でのサポート】を例にとると（図表 1.5.3）、満足度は第 1 回では国立で少し低い傾向があったが、その差は少なくなっている。むしろこれは国立大学において、実際に学生サービス、サポートが強化されてきたことを反映するものであろう。

図表 1.5.3 学習そのほかの点でのサポート — 設置者別



出所： 前図表に同じ

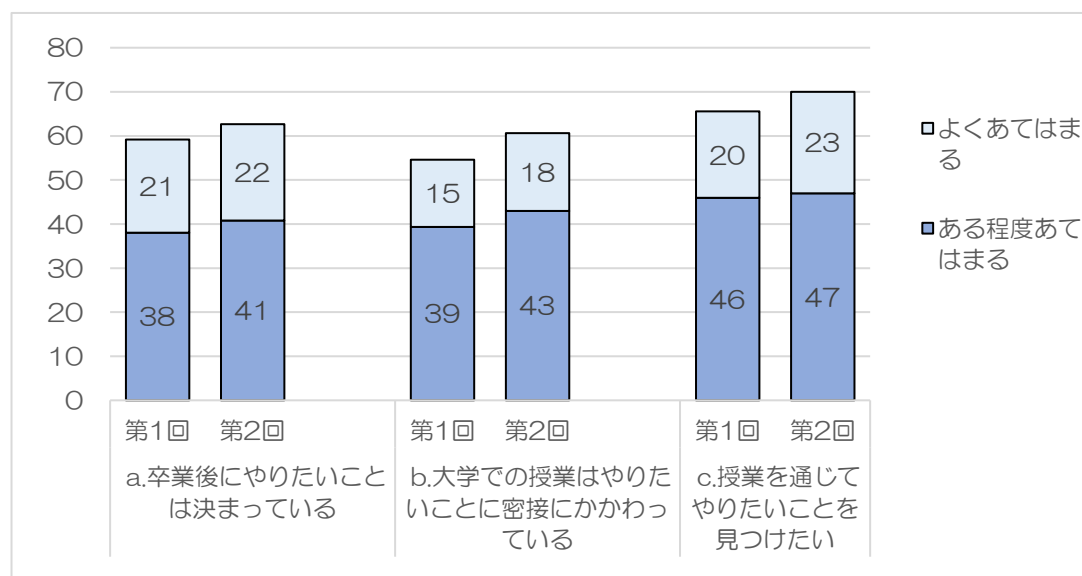
このように大学についての満足度が上昇していることは、一部の大学がおこなっている学生調査の結果でも見られる。ただしその解釈は、上述の授業の効果の上昇と同様の分析的問題を含んでいる。すなわち。①. 実際に大学の教育環境や学生サービスが向上している、②. 大学側のアナウンスメント効果があり、それに学生が影響を受けている、③. 学生が肯定的な評価をする傾向が強くなっている、の三つの要因が輻輳しているものと考えられる。

1.6 学習動機

学生が将来への展望をどのように持ち、それと自分の受けている大学教育とはどのような関係にあるのか。質問票はこれについて【a. 卒業後にやりたいことは決まっている】、【b. 大学での授業はやりたいことに密接にかかわっている】、【c. 授業を通じてやりたいことを見つけたい】の三つの項目について、自分があてはまるかを聞いている。

これに基づいて＜よくあてはまる＞、＜ある程度あてはまる＞と、肯定的に答えた学生の割合を算出した（図表 1.6.1）。結果をみると、このいずれの項目についても、肯定的に答えた学生の比率が少しずつ上昇している。とくに【大学での授業はやりたいことに密接にかかわっている】は 54 パーセントから 61 パーセントへと、7 パーセント・ポイントの幅で上昇した。他方で、【卒業後にやりたいことは決まっている】も 4 パーセントポイント上昇しており、変化は大学入学以前に生じているとも考えられる。

図表 1.6.1 学習動機



出所：第1回問11、第2回問7。

では三つの項目の間にはどのような関係があるのか。質問項目を組み合わせると、学生の学修動機パターンについて、四つのタイプを想定することができる。³

卒業後にやりたいことは決まっている	+	大学の授業はやりたいことに関連	+	I 高同調
	+	大学の授業はやりたいことに関連	—	II 独立
	—	授業でやりたいことを見つける	+	III 受容
	—	授業でやりたいことを見つける	—	IV 疎外

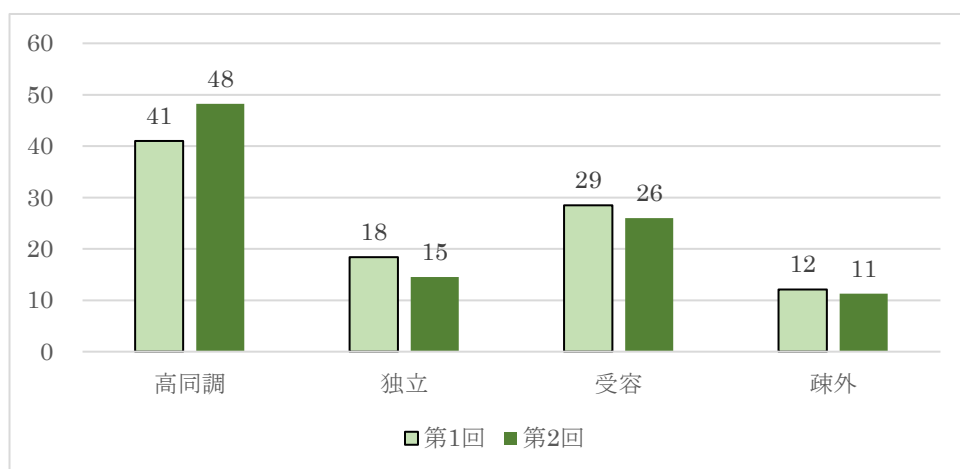
「I. 高同調」型は、将来のキャリアが明確で、それに大学における学習が関連している、というもっとも適合性の高いものである。実際、学習時間などにもプラスの相関をもっている。「II. 独立」型は、卒業後の志望は明確ではないものの、大学で受けている教育とはそれとは関係がない、と感じているタイプで、いわば日本型フンボルト理念を反映する大学生像に対応する。「III. 受容」型は、将来のキャリアはまだ明確でないものの、それを大学教育を通じて明らかにしていこうとする学生である。こうした学生が増加してきたのではないかと一般に言われてきた。「IV. 疎外」型は、卒業後の展望が明確でないばかりか、現在受けている大学教育にもあまり期待していない。大学教育にもっとも適合性が低いタイプといつてよい。

この定義にもとづいて、キャリア志向タイプ別の変化を算出した（図 1.6.2）。結果をみると、高同調が顕著に増加し、41 パーセントから 48 パーセントとなった。他方で独立型および受容型が、それぞれ 3 パーセントポイント減少した。疎外型はほとんど変わっていない。

高同調型の増加は、大学生の学習動機に、プラスの方向での変化が起こっていると解釈できる。しかし他方で受容型が減少していることを考え合わせると、むしろ卒業後の進路について、確信をもっていなければならない、という思い込みが大学入学の時点で大きくなっているともみることができる。高校段階からのキャリア教育がそうした環境を作っているとも解される。大学教育がそうした思い込みを問い直す役割をも果たしていることを考えれば、それは必ずしもプラスとばかりは言えない。

³ 金子元久『大学教育の再構築』、玉川大学出版会、2016、p. 83

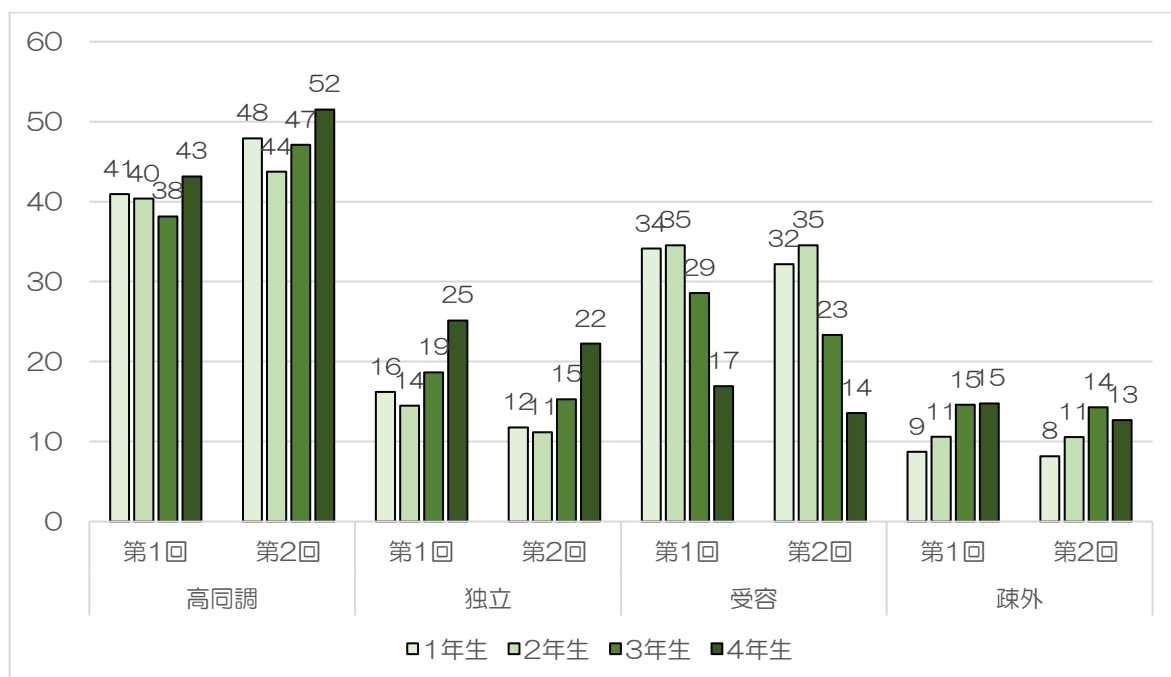
図表 1.6.2 動機パターンの変化



出所：前図表に同じ

そうした観点から学習動機パターンの、学年ごとの変化を算出した（図表 1.6.3）。これをみると、学年を通じた変化のパターンは変わっていない。すなわち高同調は 1 年生で高いが、2 年生、3 年生と低くなり、卒業を控えた 4 年生で再び高くなる。ここでは示さないが、このパターンは特に人文社会系の学生に著しい。第 1 回から第 2 回への変化はこのパターンが全体として上に上がっている点にある。言い換えれば、大学教育の過程で高同調型が増加したとは言えない。他方で、受容型は 3 年生、4 年生で、第 2 回のほうが少なくなっており、在学中に大学教育への期待が減少したともみることができる。

図表 1.6.3 動機パターンの学年別比較



サンプル 第 1 回 N=47364 第 2 回 第 2 回 N=31568、設置形態による補正なし

1.7 高校時代の学習時間

高校時代の課程での学習時間は、大学入学後の学習時間（教室外での自律的学習時間）と強い相関をもつことが、第1回調査の結果から示されている。高校3年生での学習時間について第1回調査と第2回調査の結果を比べると（図表1.7.1および図表1.7.1）、いずれにおいても国公立大学の学生の値が高く、私立において低いという傾向は同様である。国公立大学の学生の高3の時の学習時間が1時間以下の学生は1割程度にすぎないのに、私立大学については4割程度に達する。

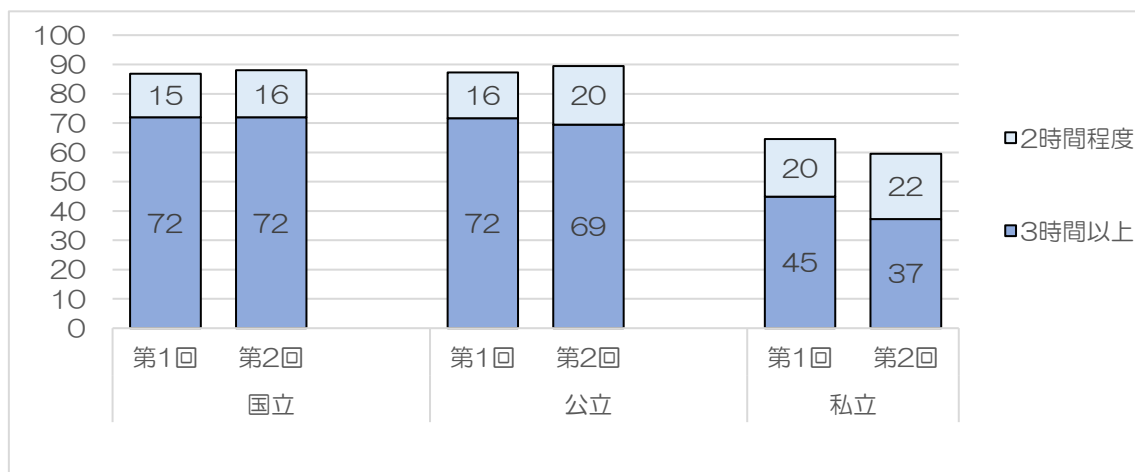
図表 1.7.1 高校3年生の時の学習時間

	第2回				第1回からの増減				2時間以上の増減
	していない	1時間程度	2時間程度	3時間以上	していない	1時間程度	2時間程度	3時間以上	
国立	4.5	7.5	16.0	71.9	-0.9	-0.2	1.2	-0.1	1.1
公立	3.5	7.1	20.0	69.4	-1.3	-0.8	4.3	-2.2	2.1
私立	19.7	20.8	22.2	37.3	0.7	4.3	2.6	-7.6	-5.1

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回問23、第2回問10。

図表 1.7.2 高校3年生の学習時間 2時間以上のみ



出所： 前図表に同じ。

しかもこの十年間で私立大学の入学者の学習時間は減少した。とくに3時間以上の学習をしていた学生の割合は8%ポイントと明確に減少した。逆に1時間以内の学生は5%ポイント増加した。これはいわゆる【全入】状態、そして推薦入試などによって学力試験を受けずに入学した学生がさらに増大していることを反映している。

1.8 読書

読書量は広い意味での学生の学習量を示すものと解される。最近 1 か月に読んだ本の数についての回答をみると（図表 1.8.1 および図表 1.8.2）、読書量には顕著な減少の傾向がみられる。

第 1 回の調査においても全く本を【読まない】と答えた学生は 3 割程度あったが、第 2 回ではそれが 18%ポイント増大し、学生のほぼ半数に及んでいる。また設置者別にみると、国公立の学生の読書量が、私立大学の学生の読書量より多い。【読まない】学生の割合は約 1 割程度、私立大学において高い。

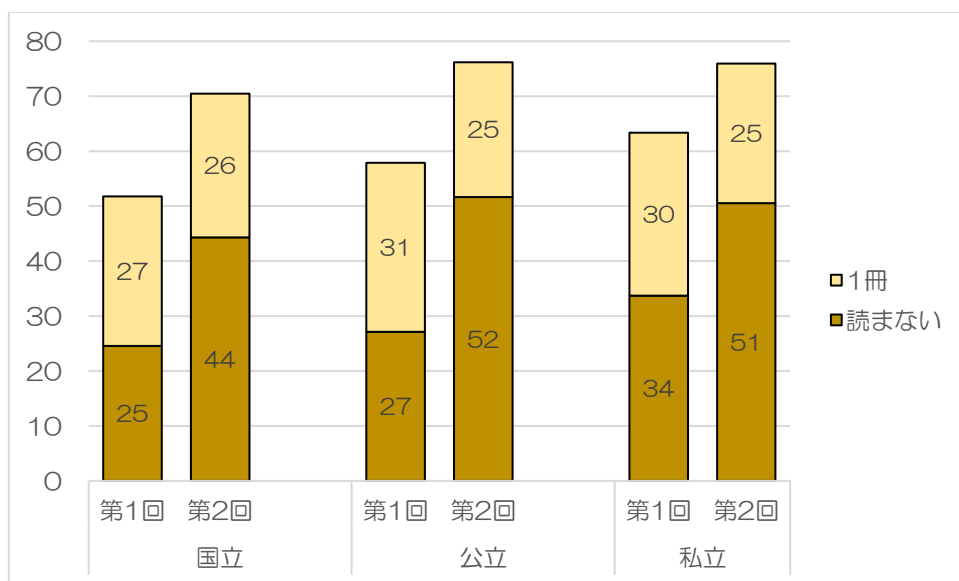
図表 1.8.1 一か月に読む本

第2回				第1回からの増減				1冊以上
読まない	1冊	2冊	3冊	読まない	1冊	2冊	3冊	
49.5	25.5	11.7	5.3	17.7	-3.8	-5.0	-2.6	-17.7

注： 網掛けは【第 1 回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第 1 回の問 18、第 2 回の問 12。

図表 1.8.2 一か月に読む本 一大学設置者別



出所： 前図表に同じ。

ただし、国公立大学の学生もこの十年間の読書量を大きく減らした。と国立大学の学生で【全く読まない】学生は第 1 回では 25 パーセントであったのが、第 2 回では 44 パーセントと、2 割程度の幅で増加している。同時に私立大学の学生についても減少は明確である。このような読書量の顕著な減少は、全国大学生協連の行った調査とも符合する。この調査によれば、大学生の読書量は 2000 年代後半から顕著な減少傾向がみられるようになった。

この時期はちょうどスマートホンの急速な普及と一致する。両者の因果関係を明確に示すことはできないが、何等かの関係があることは疑い得ない。これが広い意味での学生の学修にどのような意味をもつかについてはさらに検討が必要である。

1.9 分析のまとめ

変化した点

以上の結果をまとめると、第1回調査から第2回調査への変化を以下のようにまとめることができる。

授業経験

- 学生が経験した授業形態は、調査項目のほとんどで顕著に変化した。とくに学生参加型の授業が増加し、【グループワーク】については、＜ほとんどなかった＞が17パーセントポイント減少し、それにかわって＜ある程度あった＞が18パーセント上昇した。【授業中に学生に発言させる】ことも大きく増加した。また【理解しやすい工夫】、【授業に興味を持たせる工夫】など誘導型の授業も肯定的評価が12パーセントポイント増加している。
- これは国公立のいずれについても一般的にみられる。この結果は後述の教員調査の結果とも符合する。他方で、【提出物へのコメント】などは、増加はしたもののまだ実施率は低い。
- 授業が学生の知識・技能の形成に対して貢献している、という評価も大幅に増加した。たとえば【論理的に文章を書く力】が授業によって形成されたという設問に関しては、肯定的な答えが16パーセントポイントも増加した。他の設問についてもかなり高い増加がみられる。
- 学生自身の知識・能力に関する自己評価が上昇した。とくに、将来の職業に関連する知識や技能、専門分野の知識・理解、については「不十分」という自己評価が、1割程度も減少した。論理的な文章力、外国語の力も「不十分」が減少した。
- なお教室外の学習時間については、第2回調査では第1回調査の時間のカテゴリーを変えたために、第1回と第2回のデータとを直接に行うことができない。しかし国立教育政策研究所の大規模調査をみるかぎり、教室外での学習時間は第1回からほとんど変わっていないものと考えられる。

学習環境

- 未修科目を学ぶための補修的な科目、インターンシップ、就職や将来のキャリアをテーマとした科目、スタディ・スキルなど、補助的な学習機会が全般的に大きく整備されてきている。
- 学習サポートなど、学生のための学習環境に対する満足度も上昇している。これは国公立にかかわらずに見られる。他方でここでも学生のそうした改善に対する必要度の評価には大きな変化は見られず、こうした改善傾向も学生にとっては、当然のことととらえられるようになっている。

学生の背景

- 動機パターンの点では、将来への展望が明確で、それと大学での学習が一致している、という「高同調型」の学生が増加
- 高校時代の学習時間が低い学生が、とくに私立大学で増加した。
- 読書量は顕著に減少。一か月に全く本を読まなかった学生は32パーセントから50パーセントに拡大した。しかもこの減少は国公立大学全体について起こっている。二極化したというよりは、全体として読書量が明確に減少している。これは全国大学生協連の調査結果などとも一致する。

以上の点を、一般に学習に促進的な要因（プラス）と、制約的な要因（マイナス）に分けて示した（図表 1.91.）

図用 1.9.1 変化した点

		プラス	マイナス
授業経験	授業体験	・授業方法の改善 ・グループワークなど参加型学習が増加	
	授業の評価	・授業が知識・能力の形成に役立ったという評価が増加	
	能力自己評価	・自分の能力に対する自己評価が上昇	
学習環境	科目外の授業	・未修科目の補修、インターンシップなどが増加	
	大学に対する満足度	・学習・その他の学生サポートなどへの満足度が上昇	
学生の背景	動機パターン	・高同調型が増加	
	学習レディネス		・高3時代の学習（私立大学）が減少
	教室外学習		・読書量が減少

解釈のための仮説

上記のデータ分析結果をそのままみれば、大学教育が「改善」の方向に向かってきたことを示すもののように見える。しかし調査自体は、学生による主観的な判断を聞いているのであって、その解釈には考えるべき点が少ない。上記の結果には下の三つの要因が反映しているものと考えられる。

① 授業・教育環境の改善

この時期の大学改革の動きのなかで、大学が組織的な教育環境の改善・整備、学生サポートを強化した。従来はそうした点に不備があった国立大学でも改善があった。また個々の教員も授業の改善に積極的であり、とくに学生参加型授業の普及、学生の理解に配慮した授業が増えた。

② フレーミングの形成

他方で、上記の客観的な変化のみが調査結果を説明できるものではない。中教審による望ましい教育改革の具体的な示唆、大学教育政策による圧力を受けて、大学が組織的に大学教育への姿勢を示した。それは上述の具体的な授業方法、教育改善の変化に結びついただけではなく、一つのメッセージ効果をもった。また大学は学生にどのような学習を求めるかを明示する「ディプロマポリシー」などの3ポリシー、個々の授業がどのような形で知識・能力の形成に寄与するかを、授業とコンピテンスを結びつける図式としての「カリキュラム・マップ」を形成したが、それは大学の教育方針を示すだけでなく、大学としての教育への意図を学生に示す効果をもった。学生はそれを受容して、大学の教育への意図を認知・解釈する枠組み（フレーミング）を形成し、それをもとにして大学教育の価値を評価するようになった。

これは見方を変えれば、大学の意図的に設計された環境、授業によって学生が学習する、という図式を学生が受け入れてはじめる一方で、旧来の日本的フンボルト理念に対応する「学習の自由」という理念が力を失っていることを意味する。

③ 学生のアイデンティティの変化

今一つの要因は、学生の自己肯定感の上昇である。日本人は一般に自己肯定感が低いといわれてきた。しかし調査結果をみると、学生の間ではそうした自身のありかたや行動についての評価が肯定的に変化しつつあるように見える。それは自分の知識・能力の評価に典型的にあらわれている。上述するように授業外学習時間はほとんど変わっていないにもかかわらず、専門分野での知識・理解についての自己評価は上がっている。また「卒業後にやりたいことは決まっている」とする学生は、大学入学時から大きく上昇している。これらは、21 世紀にはいって、学校教育あるいは日本社会全体で、自身のあり方を肯定的にとらえさせようとする空気が強くなってきたことを反映しているのかもしれない。⁴ また就職運動などで、「自己分析シート」などが要求されることが、自分の能力を高く評価する傾向を作っているのかもしれない。

検討すべき課題

以上の三つの仮説的な要因のそれぞれがどの程度の影響を与えているかについては、計量的な分析は容易ではない。また調査結果からは一般に大学教育に対してプラスの変化が起こっているように見えるが、その背後には矛盾がみえる点も少なくない。前述のように授業方法は大きく改善しているのに、教室外の学習時間はほとんど停滞している。また学習時間は停滞し、同時に読書量が大きく減少しているにもかかわらず、授業の効果に対する評価や、自身の知識・能力への評価が顕著に拡大している。これらの点については、さらに分析が必要である。

⁴ アメリカにおいても 20 世紀末までに生まれた世代について「ナルシズム世代」(Generation of Narcisism) として特徴づける議論があるが、これに類似した点があるかもしれない。、

第 2 章．教員調査

2.0 概観

教員についても、学生調査の場合と同じように設問ごとの、意見分布の変化を数えてみた（図表 2.1.1）。これによると回答に 5%ポイント以上の変動があった質問項目が約半数あった。最も変動が大きかったのは、FD に対する意見（第 2 回調査 問 8）で、その次は教育体制の改善の方向（第 2 回調査、問 9）であった。さらに授業方法についても、かなりの変化が目立った。他方で学生に対する評価（問 4）および大学教育に関する意見（問 13）についてはあまり大きな変化はなかった。ただし授業方法についても、個々の質問項目において、大きな変動があったものがある。

図表 2.0.1 教員調査 ―変化があった項目数のカウント

第 1 回	第 2 回		比 較 可 能 な 質 問 数	変化があった項目数		割合（％）	
				5% 以上	10% 以上	5% 以上	10% 以上
問 6	問 4	学生への評価	3	0	0	0.0	0.0
問 4	問 5	授業の理念	5	2	0	40.0	0.0
問 5	問 6	授業方法・やっているか	8	3	1	37.5	12.5
問 5	問 6	授業方法・効果あるか	8	3	0	37.5	0.0
問 10	問 8	FD・有効か	2	2	0	100.0	0.0
問 17	問 9	改善の方向・実践しているか	5	4	2	80.0	20.0
		改善の方向・将来	5	3	1	60.0	20.0
問 28	問 13	大学教育についての意見	4	1	0	25.0	0.0
問 24	問 14	管理運営	1	1	0	100.0	0.0
問 22	問 15	所属大学の課題	3	1	0	33.3	0.0
		計	44	20	4	45.5	20.0

網掛けは、5%ポイント以上の変化があった項目が半数を超える場合

以下では、授業方法、期待する効果、理念（第 1 節）、組織としての教育の理念（第 2、3 節）、大学改革の現状および組織ガバナンスと所属大学の現状についての意見（第 4 節）について述べる。

2.1 授業の方法、期待される効果、理念

授業方法

授業の方法についての回答の分布をみると（図表 2.1.1 および図表 2.1.2）、第 1 回調査からの変化は全体としては少ない。一般的に行われているのは【 b. 授業内容に興味がわくような工夫 】、【 a. 達成目標を明確にする 】で＜力を入れている＞および＜ある程度行っている＞を合計すると、ほぼ 100 パーセントになる。第 2 のグループは【 d. 出席をとる 】、【 e. 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す】、【 g. 授業中に学生の意見や考えを述べさせる 】でほぼ 7~8 割の教員が実践している。これに【 f. コメントをつけて課題などの提出物を返却する】【 h. グループワークなど、学生が参加する機会をつくる 】が 4~6 割で続き、【 c. TA などによる補助的な指導 】は 3 割未満であった。

図表 2.1.1 実践している授業方法

	第 2 回			第 1 回からの変化			肯定の増減
	力を入れている	ある程度	行っていない	力を入れている	ある程度	行っていない	
b. 授業内容に興味がわくような工夫	58.6	40.3	1.0	-6.4	5.9	0.5	-0.5
a. 達成目標を明確にする	39.7	56.3	4.0	-1.9	1.4	0.5	-0.5
d. 出席をとる	49.7	37.3	12.9	-1.7	5.4	-3.7	3.7
e. 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す	46.5	38.0	15.5	-0.9	-0.3	1.2	-1.2
g. 授業中に学生の意見や考えを述べさせる	24.9	46.9	28.2	0.8	-3.4	2.6	-2.6
f. コメントをつけて課題などの提出物を返却する	21.2	39.3	39.5	-0.9	2.1	-1.2	1.2
h. グループワークなど、学生が参加する機会をつくる	24.8	34.7	40.5	6.7	7.5	-14.3	14.3
c. TA などによる補助的な指導	6.8	23.0	70.2	1.3	3.0	-4.3	4.3

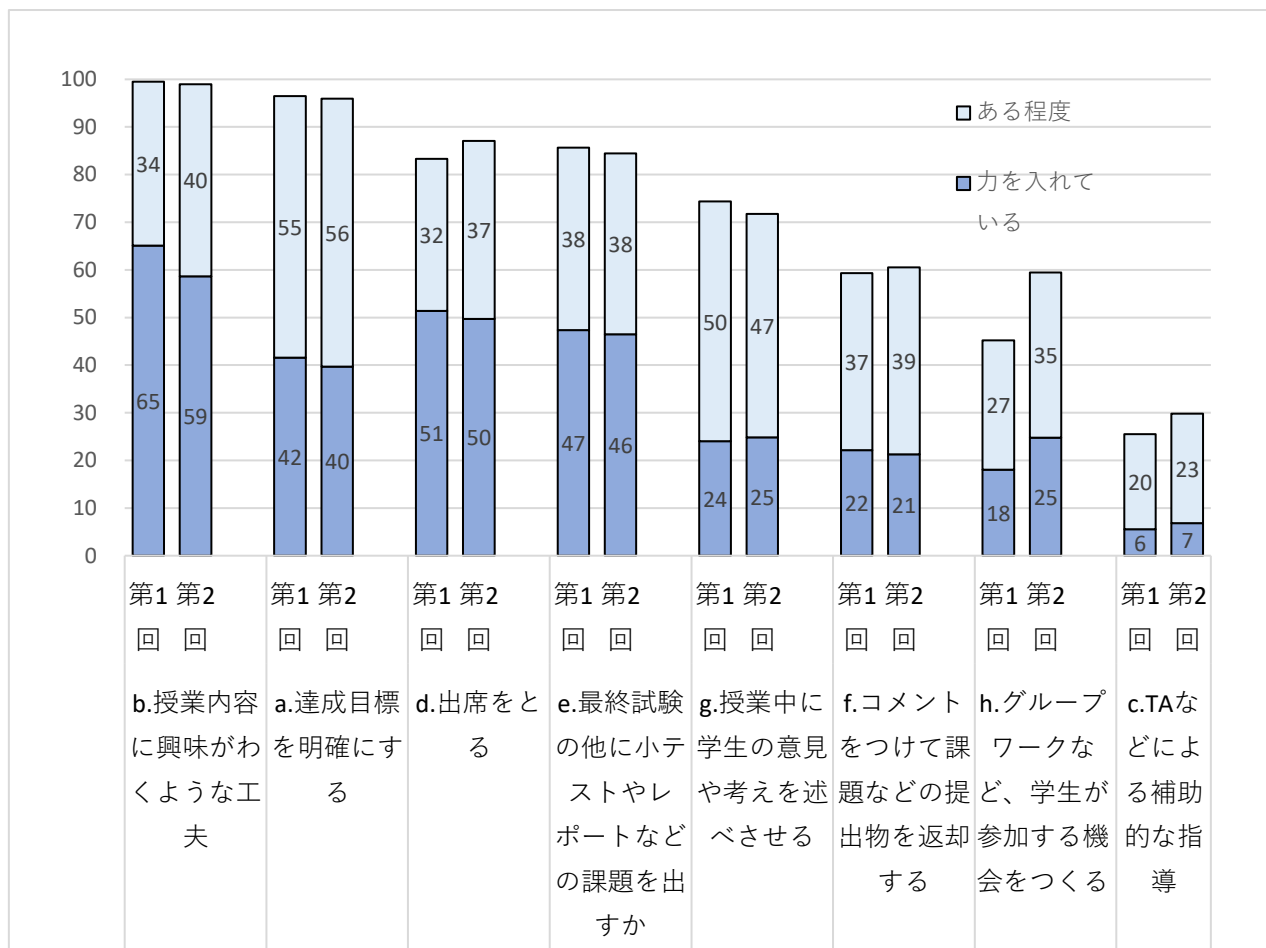
注： 網掛けは【第 1 回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第 1 回の問 6、第 2 回の問 5。

第 1 回と第 2 回を対比すると、変化はあまりない。いいかえれば、後退している点はほとんどない。ただ一つだけ大きく変化しているのが【 h. グループワーク】であって、＜力を入れている＞が 7 %ポイント増加し、＜ある程度行っている＞を加えると 14 %ポイント増加している。これについて【 c. TA による補助的指導】、【出席をとる】もわずかならが増加している。

他方で【興味がわく工夫】については＜力を入れている＞が減少している点にも留意しておきたい。これは後述の授業方法の有効性についての評価にもかかわる。

図表 2.2.2 実践している授業方法

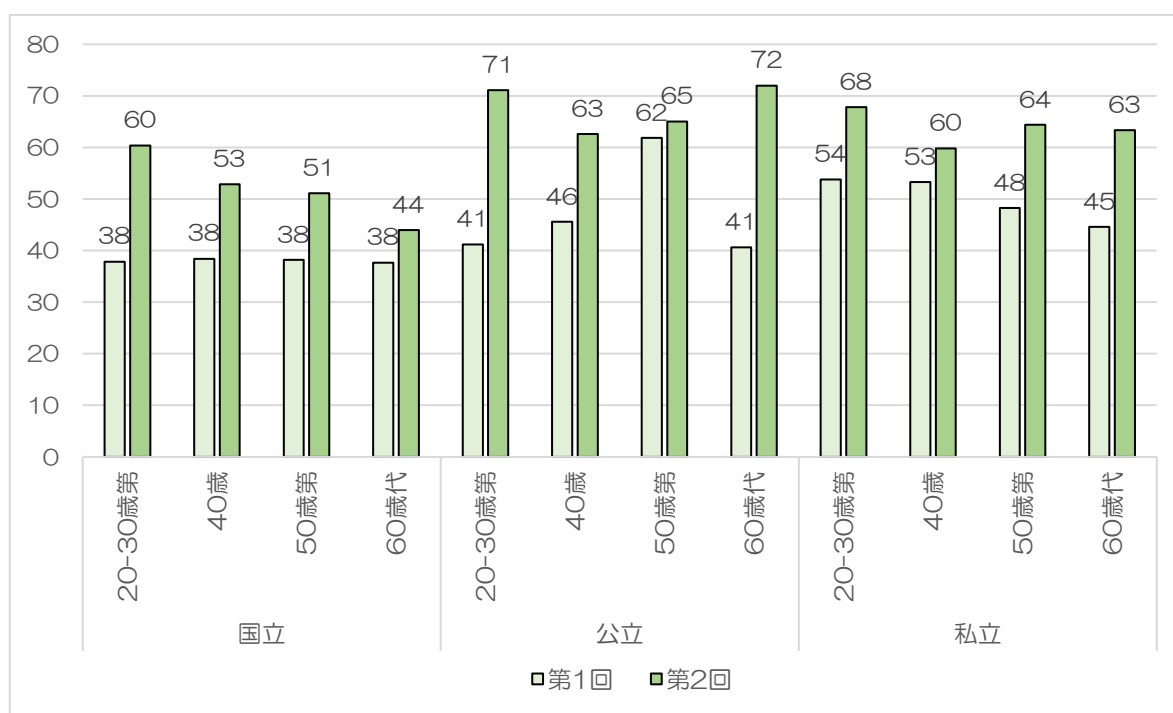


出所: 第1回問5、第2回問6

いずれにせよ、この間に大きく増加しているのは【グループワーク】であり、これは学生調査における、学生が経験した授業の変化と対応している。2010年代の大学の授業の最も大きな変化はグループワークの普及であった。

これを教員の所属大学の設置者別、年齢別にみると（図表 2.1.3）、国立大学よりも一般に公立、私立大学より普及率が高い。またより若い年齢層で普及率が高い。しかし2時点間の中で大きな増加がみられたのは、設置者、年齢を通じてであった。また国立大学では特に若い層の教員がグループワークをよく取り入れる傾向があった。他方で私立大学については50歳台、60歳台の教育方法も顕著に増加してきたことがわかる。

図表 2.1.3 【グループワーク】を実践している教員（％） — 設置者・年齢別



注：＜力を入れている＞と＜ある程度行っている＞の計

出所： 前図表に同じ。

授業方法の有効性の評価

これらの授業方法の変化は、どのような背景から起こっているのか。調査票は上述の授業方法のそれぞれについて、どの程度、有効と考えるか、を聞いている。そこへの回答をみると（図表 2.1.4）、有効度の評価は、上述の授業方法の普及度とほぼ対応している。

とくに【グループワーク】は第 1 回調査と比べて、＜非常に有効＞が 6%ポイント上昇して 35 パーセントに達した。これに＜ある程度有効＞を加えると、8%ポイント上昇し、8 割を超える教員が有効と評価している。これを上述の普及率と比較すると、＜力を入れている＞と＜ある程度行っている＞を足して 6 割であったから、有効と考えながらも、実践していない教員も 2 割程度あることになる。有効性の評価と、実践とのギャップがなぜ生じているのかも検討すべき問題である。

今一つ着目されるのは、【b. 授業内容に興味をわくような工夫】で、ほとんどの教員が有効と考えているのは事実であるが、＜非常に有効＞という評価は 10%ポイント減少し、その分が＜ある程度有効＞の増加に結びついている、という点である。これは上述の＜力を入れている＞の減少にも対応している。これが何を意味するのかは自明ではない。上述のように、ほとんどの教員がこうした努力を行っていることを考えると、こうした努力はすでに当然のこととなりつつある一方で、それが当初に期待されていたような結果をもたらすものではない、という認識が広がっているのかもしれない。同様のことは【e. 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す】についてもいえる。

図表 2.1.4 授業方法の有効性の評価

	第 2 回			増減			肯定回答の増減
	非常に有効	ある程度有効	有効ではない	非常に有効	ある程度有効	有効ではない	
b.授業内容に興味がわくような工夫	38.9	59.0	2.1	-9.6	9.0	0.5	-0.5
e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す	35.3	58.8	5.9	-5.4	5.9	-0.5	0.5
h.グループワークなど、学生が参加する機会をつくる	31.6	52.9	15.5	5.7	2.6	-8.4	8.4
g.授業中に学生の意見や考えを述べさせる	28.9	59.1	12.0	-2.1	1.5	0.5	-0.5
d.出席をとる	25.9	55.1	18.9	-1.2	0.2	0.9	-0.9
f.コメントをつけて課題などの提出物を返却する	25.9	60.3	13.8	-3.1	3.4	-0.3	0.3
a.達成目標を明確にする	24.5	68.9	6.7	-1.6	0.6	1.0	-1.0
c. TA などによる補助的な指導	13.2	53.0	33.8	1.4	2.2	-3.5	3.5

注： 網掛けは【第 1 回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

2.2 教育の組織的志向

組織としての志向

授業の組織的な志向について質問票（第 1 回 9、第 2 回問 17）は 5 つの項目を設定し、それぞれについて、現在実施しているか、また将来の改革の方向としてのどう考えるかを聞いている。質問項目は、教育体制の志向性として大きく三つの方向があることを想定している。

（ア）小集団志向。

【 e. 研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する】

（イ）体系化志向。

【 a. 習得するべき知識を標準化し、それに応じてカリキュラムを体系化する】 【 d. コミュニケーション能力など、授業で獲得するべき基礎能力を明確にする】 【 c. 授業内容、教材などを標準化し、TA などを組織的に用いる】。

（ウ）集中志向。

【 b. 週 2 回の授業等を通じて個々の授業科目に集中できるようにする】

まずどのような志向が強いかをみると（図表 2.2.1 および図表 2.2.2）、【 e. 研究室・ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する】が強い支持をあつめ、4 割が＜力を入れている＞と答えている。日本の大学における小集団による教育機能の重視が大きいことが知られる。しかしむしろ注目すべきなのは、この志

向は第1回調査では5割以上が「力を入れている」と答えていたのと比べれば、そのウェイトが顕著に減少している点である。

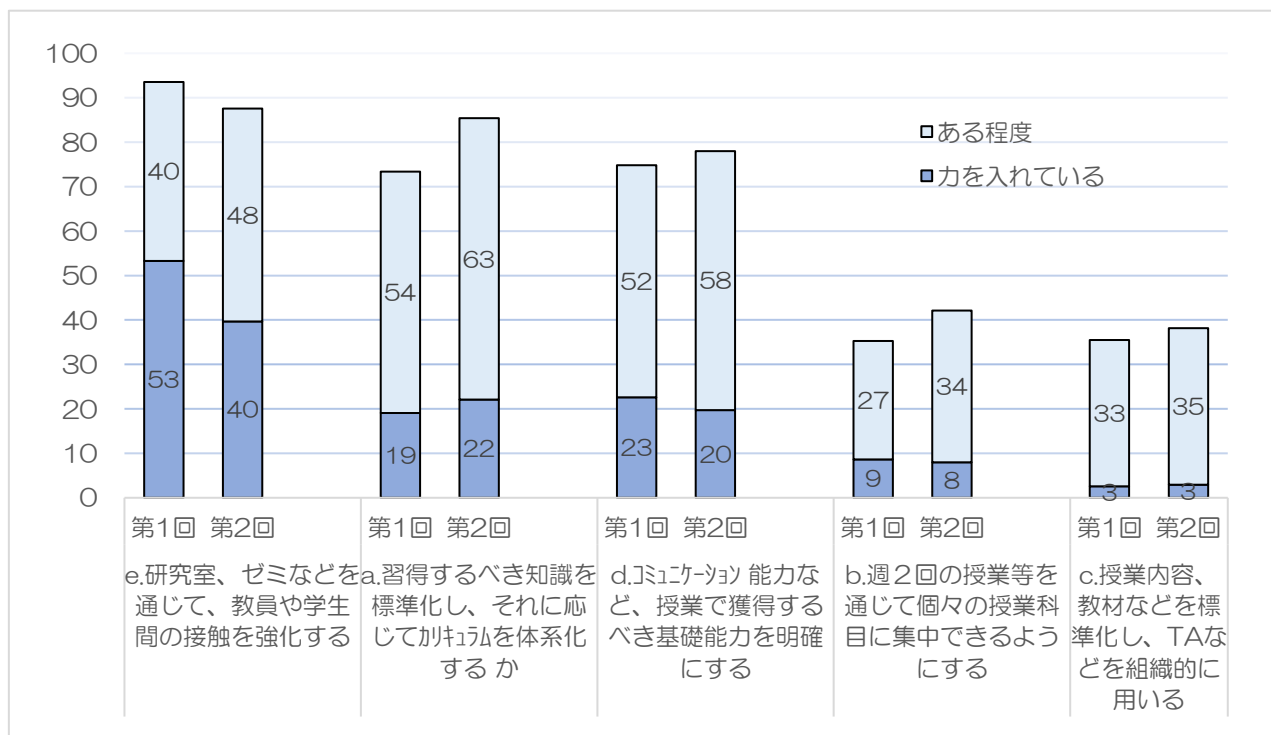
図表 2.2.1 教育体制— 実施しているか

	第2回			増減			肯定 変化
	力を入 れている	ある程 度	行ってい ない	力を入 れている	ある程 度	行ってい ない	
e.研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する	39.6	47.9	12.4	-13.6	7.7	5.9	-5.9
a.習得すべき知識を標準化し、それに応じてカリキュラムを体系化する	22.1	63.3	14.6	3.0	9.0	-12.0	12.0
d.コミュニケーション能力など、授業で獲得すべき基礎能力を明確にする	19.7	58.3	22.0	-2.9	6.1	-3.2	3.2
b.週2回の授業等を通じて個々の授業科目に集中できるようにする	8.0	34.1	57.9	-0.7	7.5	-6.8	6.8
c.授業内容、教材などを標準化し、TAなどを組織的に用いる	3.0	35.2	61.9	0.4	2.3	-2.6	2.6

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の間9、第2回の間17

図表 2.2.2 教育体制 — 実施しているか、 第1回と第2回



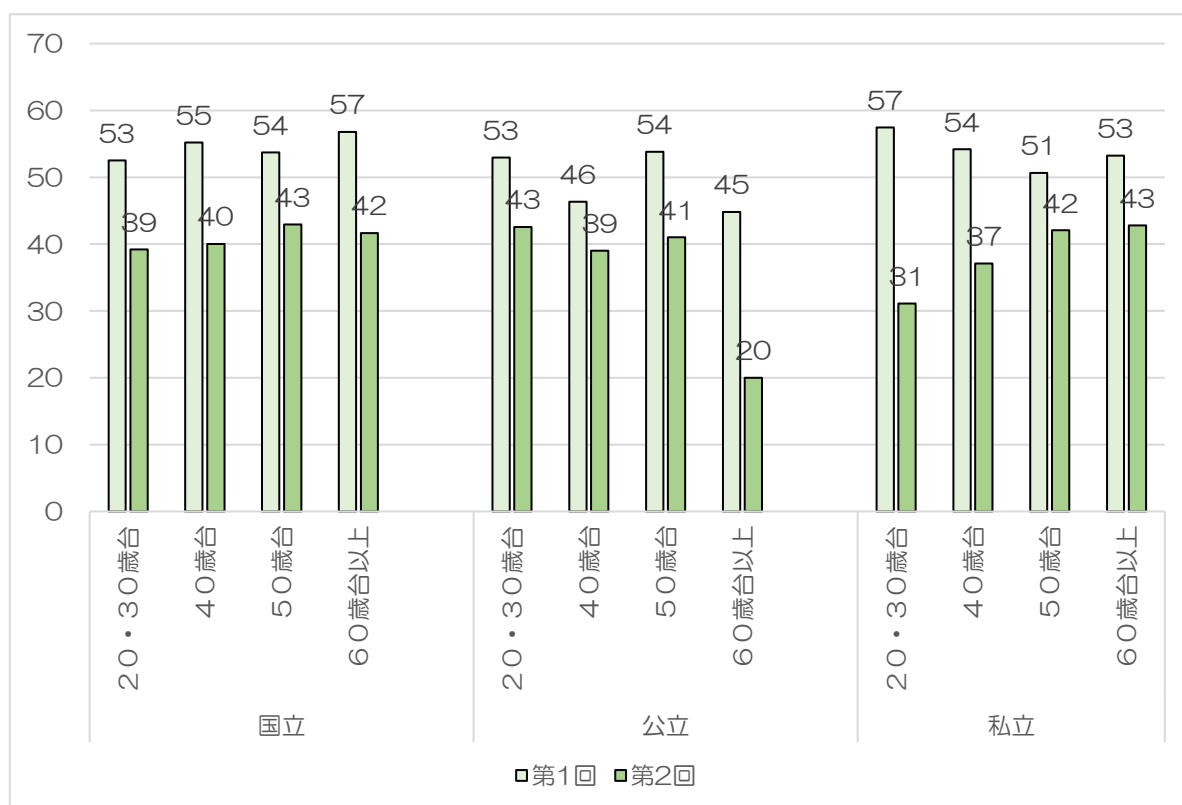
出所： 前図表に同じ

ただし第 1 回と第 2 回の結果を比較すると、注目すべき変化が起こっている。すなわち小集団志向の【研究室・ゼミ】による教育は第 2 回でも広く受け入れられているが、＜力を入れている＞だけに着目すると 14%ポイントと、きわめて大きな減少がみられた。他方で体系志向の【カリキュラム体系化】は＜ある程度起行っている＞が 9%ポイント上昇し、＜行っていない＞は 12%ポイント上昇した。また【週 2 回授業】についても、＜ある程度行っている＞が 7%ポイント上昇した。

これらを要するに、【研究室・ゼミ】については一般に行われているものの、とくに力を入れる割合が顕著に少なくなっている、という意味で後退している。他方でそのほかの志向は、これまで全く行っていなかったものが、ある程度、行うようになった、という意味で前進しているといけよう。

ところで上述のように【研究室・ゼミ】志向の実践については、とくに＜力を入れている＞教員が減少しているが、これが大学設置者・教員年齢どのように異なるかをみると（図表 2.2.3）、全体に設置者による相違は大きくない。しかも第 1 回から、第 2 回にかけて、いずれの年齢層でも顕著な減少がみられた。国立大学においては、年齢層にかかわらずほぼ同じ幅の減少があった。私立大学においては、若年層、中堅層でとくにめだった減少があったが、中高年層でも明確な減少があった。

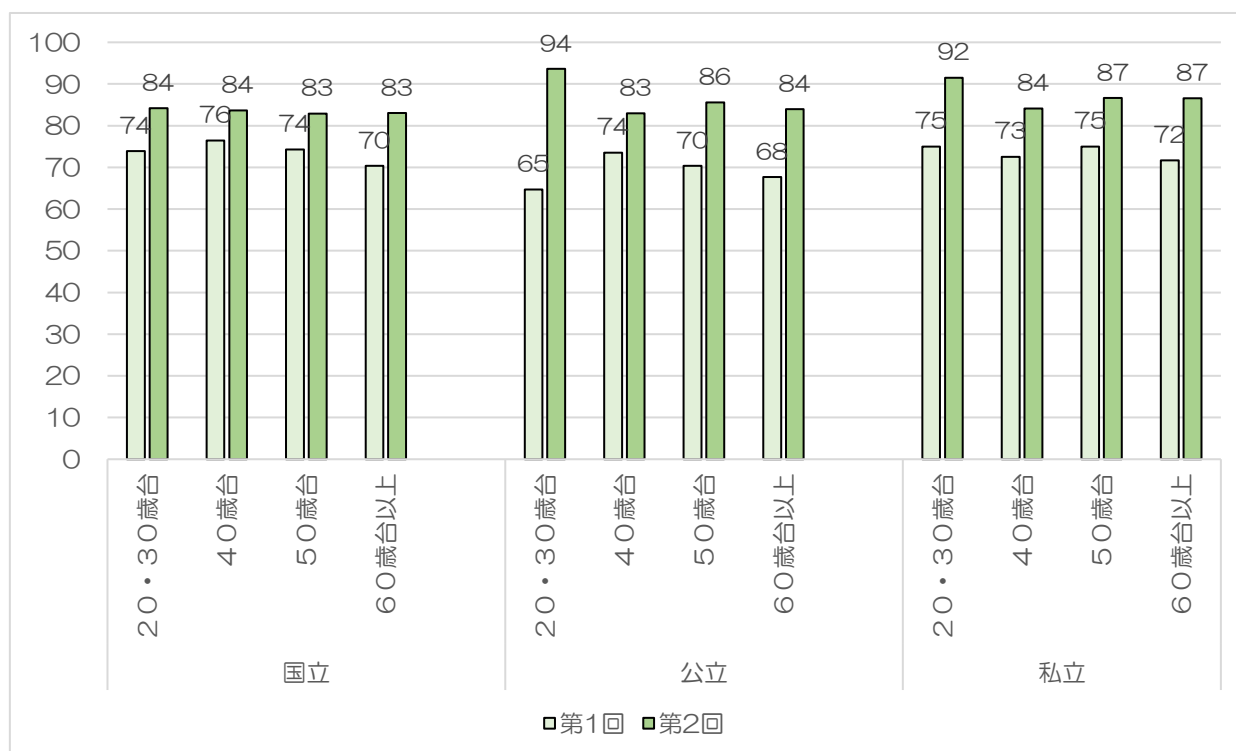
図表 2.2.3 研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する
＜力を入れている＞（％） — 設置者、年齢層別



出所：問17から算出

他方で【カリキュラムの体系化】について肯定（＜力を入れている＞と＜ある程度行っている＞の計）をみると（図表 2.2.4）、設置形態、年齢による相違がほとんどない。しかも 2 時点間を比較すると、ほぼ同様の変化をしめしている。

図表 2.3.4 修得すべき知識を標準化し、それに応じてカリキュラムを体系化する
 <力を入れている>+<行っている> % —設置者、年齢層別



出所：問17から算出

組織としての教育 — 将来の方向

で教育体制は将来、どのような方向にかわっていくべきなのか。上述の設問と同じ項目について、<非常に重要>、<重要>、<重要ではない>の三択でたずねた。

その結果をみると（図表 2.2.5 および図表 2.2.6）、価格項目の従業度の評価は、前述の実際の実践の程度にほぼ対応している。すなわち肯定的な回答（<非常に重要>と<ある程度重要>の計）をみると【e.研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する】を重要とする教員がほとんど全員に達し、<きわめて重要>もほぼ半数に達する。【獲得目標の明確化】、【カリキュラムの体系化】についても肯定的評価は高いが、<非常に重要>は少ない。また【週2回授業】、【TAの導入】は、<重要ではない>が3割に達する。

しかし2時点間の変化をみるとかなり違った印象を得る。【研究室・ゼミ】重視の志向は、とくに<非常に重要>と考える教員が14%ポイントも減少した。<重要ではない>についてはほとんど変化はないものの、きわめて強かった【研究室・ゼミ志向】に修正が加えられつつあることが明らかである。

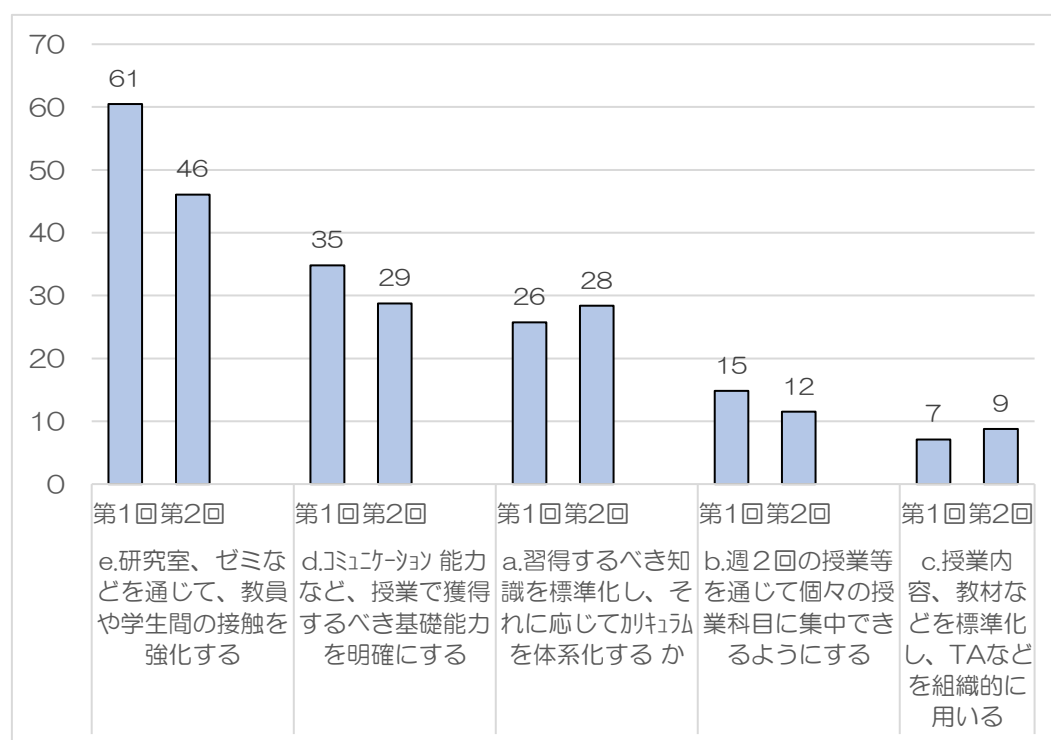
図表 2.2.5 教育体制— 重要か

	第 2 回			増減			肯定 変化
	非常に重 要	ある程度 重要	重要では ない	非常に重 要	ある程 度重要	重要で はない	
e.研究室、ゼミなどを通じて、教員や 学生間の接触を強化する	46.1	50.1	3.8	-14.4	13.0	1.4	-1.4
d.コミュニケーション能力など、授業で獲得 すべき基礎能力を明確にする	28.8	61.3	9.9	-6.1	4.4	1.7	-1.7
a.習得すべき知識を標準化し、そ れに応じてカリキュラムを体系化する か	28.4	62.5	9.1	2.7	-0.6	-2.0	2.0
b.週2回の授業等を通じて個々の授 業科目に集中できるようにする	11.5	57.1	31.4	-3.3	-0.4	3.7	-3.7
c.授業内容、教材などを標準化し、 TAなどを組織的に用いる	8.8	58.3	32.9	1.7	4.4	-6.1	6.1

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問9、第2回の問17。

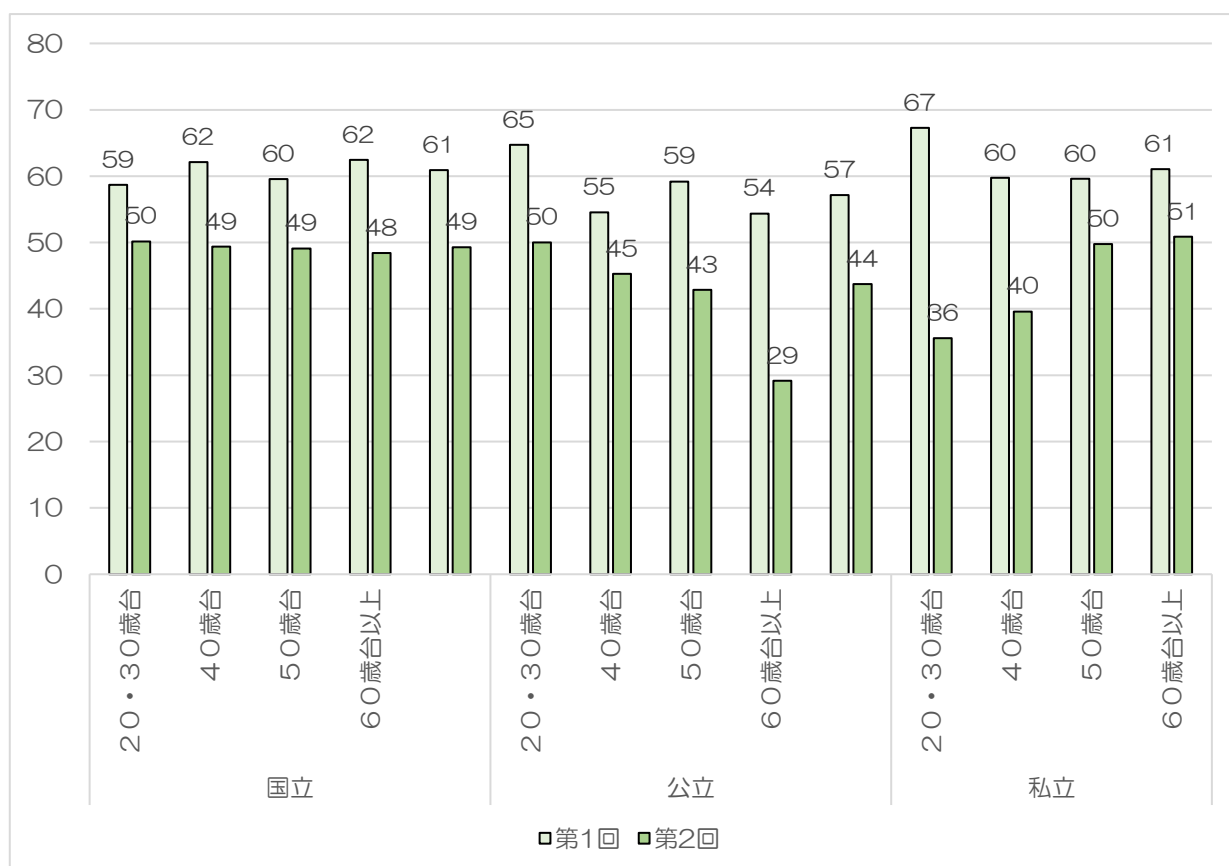
図表 2.2.6 教育体制 — <非常に重要>、第1回と第2回



出所： 前図表に同じ

以上の変化は設置者、教員年齢層によってどう異なるのか。【研究室、ゼミ】重視についてみると（図表 2.2.7）、これが＜非常に重要＞と考える割合は第 1 回調査では、設置者、教員年齢層によってほとんど変わりがなかった。しかし第 2 回にかけて、一般に明確な減少がみられる。とくに私立大学においては、若年層および中年層での減少が著しかった。20・30 歳代の教員については、67 パーセントから 36 パーセントへと、ほぼ半減している。

図表 2.2.7 【研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する】 ＜非常に有効＞%



出所： 前図表に同じ

2.3 教育理念、変化の方向

教育理念

以上のような見方を支えている大学教育についての理念をどのようにとらえているのか。

教育理念にいて 5 つの質問項目について聞いた結果をみると（図表 2.3.1 および図表 2.3.2.）、もっとも支持率が高かったのは【 b. 確実に学問の基礎を教える】で、＜非常に重要＞が 7 割、＜ある程度重要＞を加えるとほぼ全員が重要としている。

これに次いで【 e. 学生の成長にきっかけを与える】、【 c. 特定の知識・技能を習得させる】、【 d. 自然、社会との関わりから学問の意義を教える】がほぼ 8 割に支持されている。これに対して【 a. 最先端の研究成果にふれさせる】は相対的に支持が少なく、＜非常に重要＞は 1 割程度にすぎない。

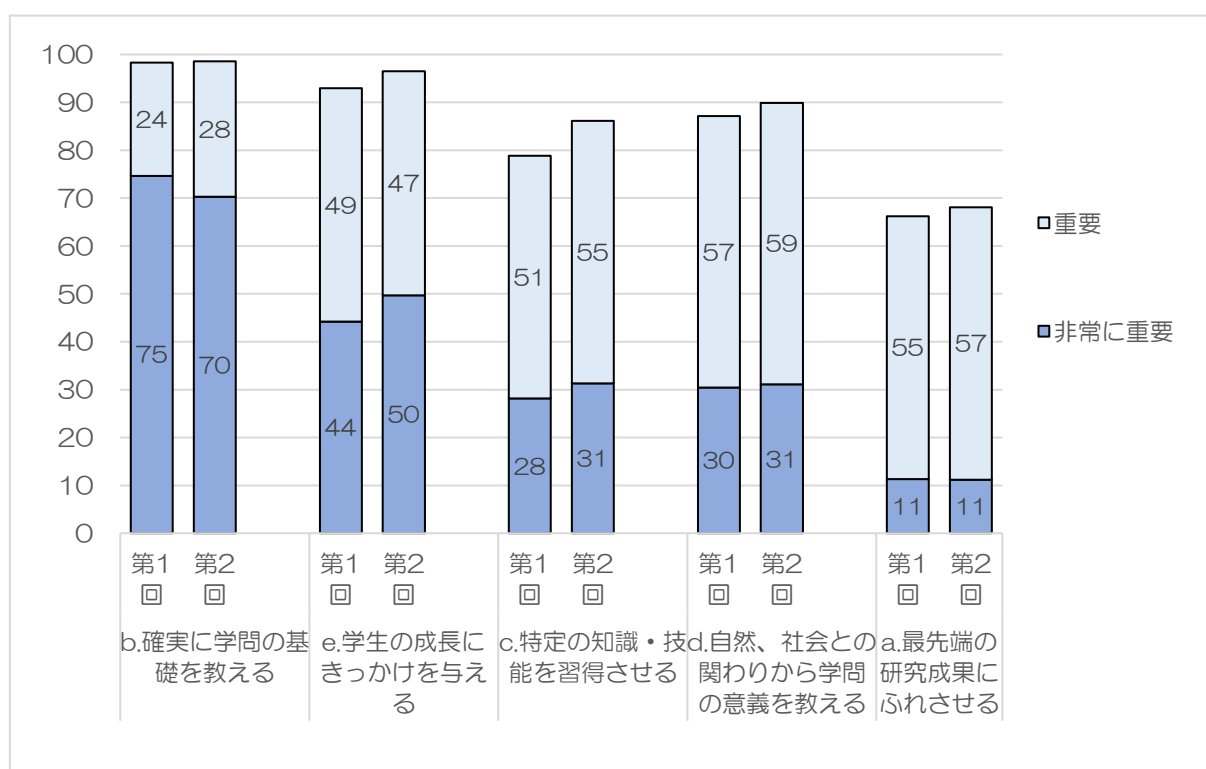
図表 2.3.1 教育の理念

	第2回			増減			肯定 変化
	非常に重 要	ある程度 重要	重要では ない	非常に重 要	ある程 度重要	重要で はない	
b.確実に学問の基礎を教える	70.3	28.3	1.4	-4.3	4.6	-0.2	0.2
e.学生の成長にきっかけを与える	49.7	46.8	3.5	5.5	-1.9	-3.6	3.6
c.特定の知識・技能を習得させる	31.3	54.9	13.9	3.1	4.1	-7.3	7.3
d.自然、社会との関わりから学問の 意義を教える	31.1	58.8	10.1	0.7	2.1	-2.8	2.8
a.最先端の研究成果にふれさせる	11.2	56.9	31.9	-0.1	2.0	-1.9	1.9

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の間6、第2回の間4.

図表 2.3.2 教育の理念



第1回から第2回の変化は、全体としては少ない。ただ注意すべき点もある。一つは【特定の知識・技能の習得】については<重要でない>が7%ポイント減少した点だ。大学教育を具体的な知識・技能を教えるところだとする考え方への反発が少なくなる傾向があるともみえる。この間の【専門職業大学】をめぐる議論、前述のインターンシップの急速な普及などが、こうした変化の背景をなしているのかもしれない。

また【学生の成長にきっかけを与える】で、<非常に重要>が5%ポイント増えた。これは学生の資質がこの期間に変化してきたことを反映しているのかもしれない。

大学教育の現状、方向についての意見

質問票は大学教育についての教員の味方をいくつか聞いている。その結果をみると(図表2.3.3)、まず【a.自分の経験した学部教育より、現在の方が良くなっている】という設問にたいしてはほぼ6割が<強くそう思う>ないし<そう思う>と答え、しかもこの2時点間で、わずかに上昇している。【c.授業料が高くなっても、高質の教育を行うべきだ】という設問に対して、賛成と反対がほぼ半々であるが、多少、賛成が増大してきた。

これに対して【b.誰にとっても意味がある教育として大学教育の理念を考え直すべきだ】という項目については、第1回ではほぼ6対4で賛成(<強くそう思う>ないし<そう思う>)が反対を上回っていたが、この10年間で賛成の意見が12%ポイント減少し、ほぼ半々となった。

図表 2.3.3 大学教育についての意見

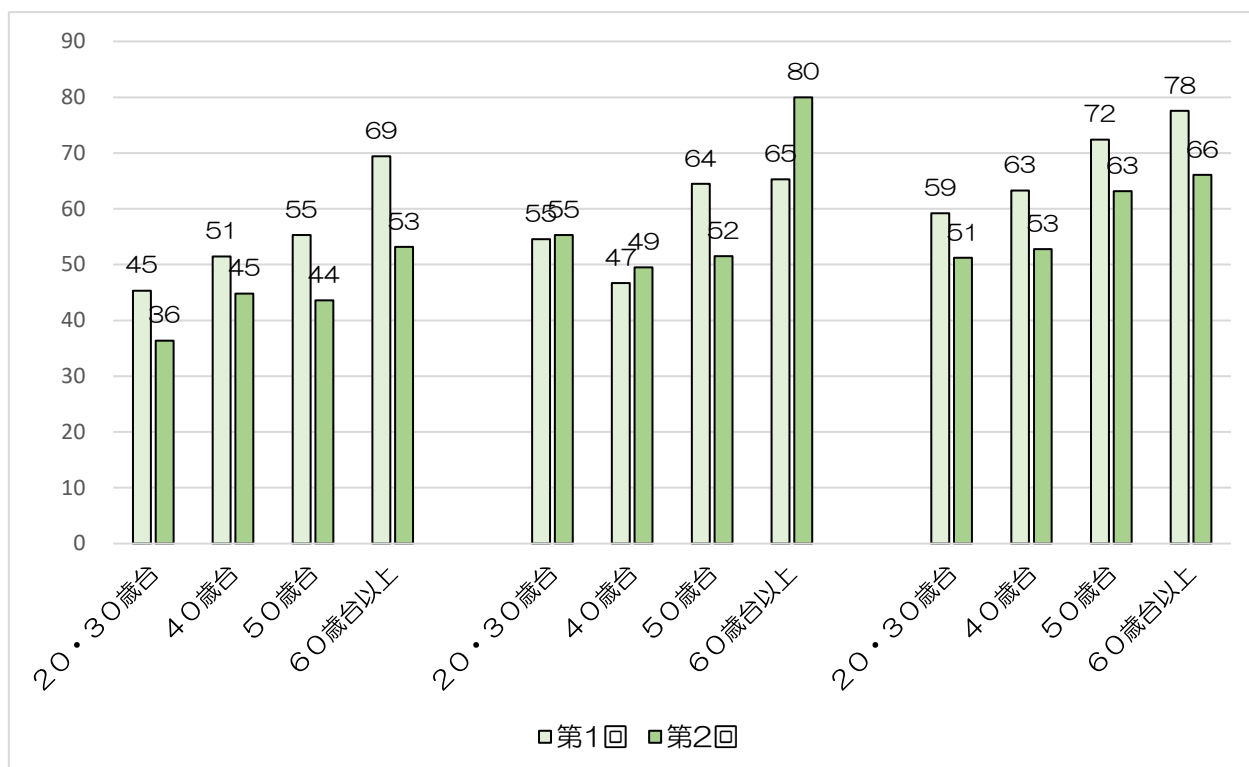
	第2回				第1回からの増減				肯定的な回答 の増減
	強く そう 思う	そう 思う	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない	強く そう 思う	そう 思う	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない	
a.自分の経験した学部教育より、現在の方が良くなっている	14.2	41.3	33.0	11.4	2.1	1.4	-3.4	-0.1	3.5
c.授業料が高くなっても、高質の教育を行うべきだ	12.0	40.3	40.9	6.8	1.3	2.2	-3.7	0.1	3.5
b.誰にとっても意味がある教育として大学教育の理念を考え直すべきだ	9.1	44.1	39.2	7.6	-5.2	-6.6	8.5	3.3	-11.8

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定的増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問28、第2回の問13。

また肯定の答え（＜強くそう思う＞と＜そう思う＞の計）の所属大学の設置者、年齢階層による相違をみると（図表 2.3.4）、設置者別には私立大学において賛成が少し多く、また高い年齢層で支持が多い。しかし第 1 回調査と第 2 回調査を比べると、いずれの階層でも支持を落としている。これは偶然というよりは明確な趨勢があるとみるべきであり、何がこうした変化を起こしているのかについては、さらに検討が必要であらう。

図表 2.3.4 誰にとっても意味がある教育として大学教育の理念を考え直すべきだ
＜強くそう思う＞と＜そう思う＞の計 一年齢・設置形態別



2.4 大学組織についての意見

では教員は大学全体にかかわる活動、組織、ガバナンスについてはどう考えているのか。

FDの有効性

2000年代から教育改革への動きと対応して、大学教育に関する教員研修（Faculty Development – FD）の実施が2007年大学設置基準改正によって2007年から各大学に求められることになった。したがって、調査対象の教員はすべて何等かの形でのFDを受けていることになる。

その効果を具体的な形態別について聞いた結果をみると、【c. 授業の相互参観】、【d. 大学教育や授業についての教員間の討論】のいずれでも肯定的な答えがおおくて、8割程度に達する（図表2.4.1および図表2.4.2）。しかし注意すべきなのは、固定の水準が下がっていることである。とくに「非常に有効」という答えは、いずれの項目についても6%ポイント程度さがっている。これは、大学改革の政策に対する一種の反動が生じている一つの証左ともいえよう。いずれにしてもさらに検討することが必要である。

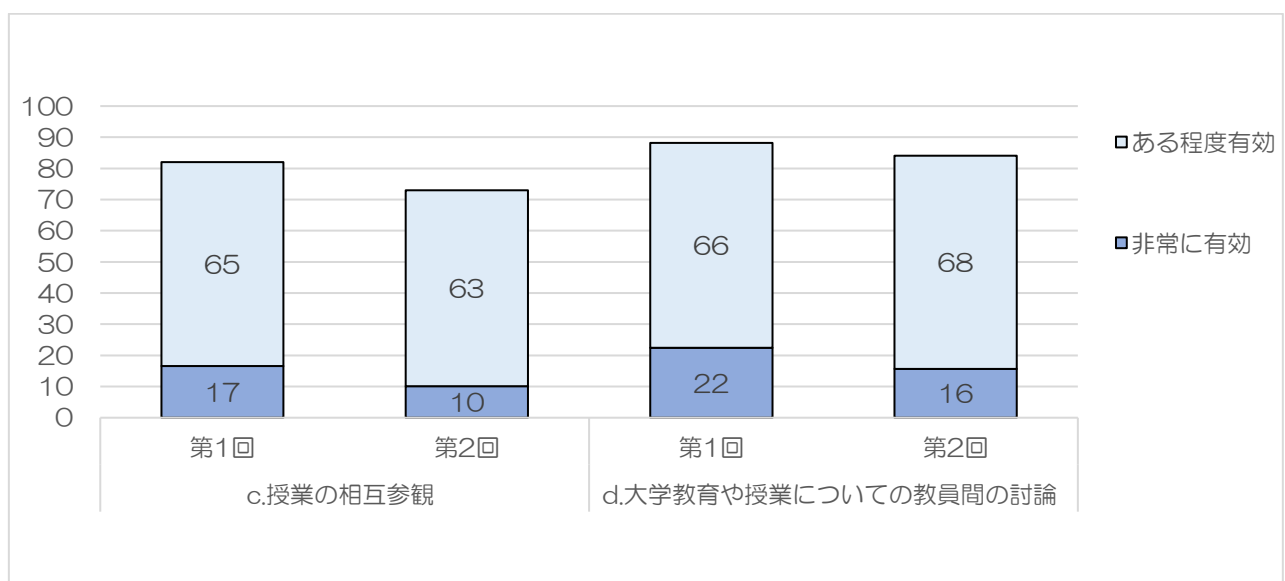
図表 2.4.1 FDの有効性

	第2回			第1回からの増減			肯定変化
	非常に有効	ある程度有効	有効ではない	非常に有効	ある程度有効	有効ではない	
c.授業の相互参観	10.1	62.9	27.0	-6.5	-2.5	9.1	-9.1
d.大学教育や授業についての教員間の討論	15.7	68.4	15.9	-6.8	2.7	4.1	-4.1

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問19、第2回の問8

図表 2.4.2 FDの有効性



出所：前図表と同じ

所属大学の課題

個々の教員が所属して大学についてどのような問題意識をもっているかを三点にわたって聞いた。その結果をみると【b.教育改善】、【c.研究水準の高度化】については＜特に問題ではない＞と意識している教員は1割にすぎず、いずれも大きな問題ととらえられている（図表 2.4.3）。両者の中では、研究のほうに対する危機意識が高く、38 パーセントが＜きわめて重要な課題＞と答えている。他方で【入学者の確保】については、＜問題ない＞と＜極めて重要＞に両極化している。

図表 2.4.3 所属大学の課題

	第2回			増減			肯定変化
	現状で特に問題ない	ある程度重要な課題	きわめて重要な課題	現状で特に問題ない	ある程度重要な課題	きわめて重要な課題	
a.入学者の確保	22.9	38.8	38.3	-4.8	2.9	1.9	4.8
b.教育改善	13.1	59.9	27.0	3.7	2.7	-6.4	-3.7
c.研究水準の高度化	12.3	49.6	38.0	1.6	-1.1	-0.5	-1.6

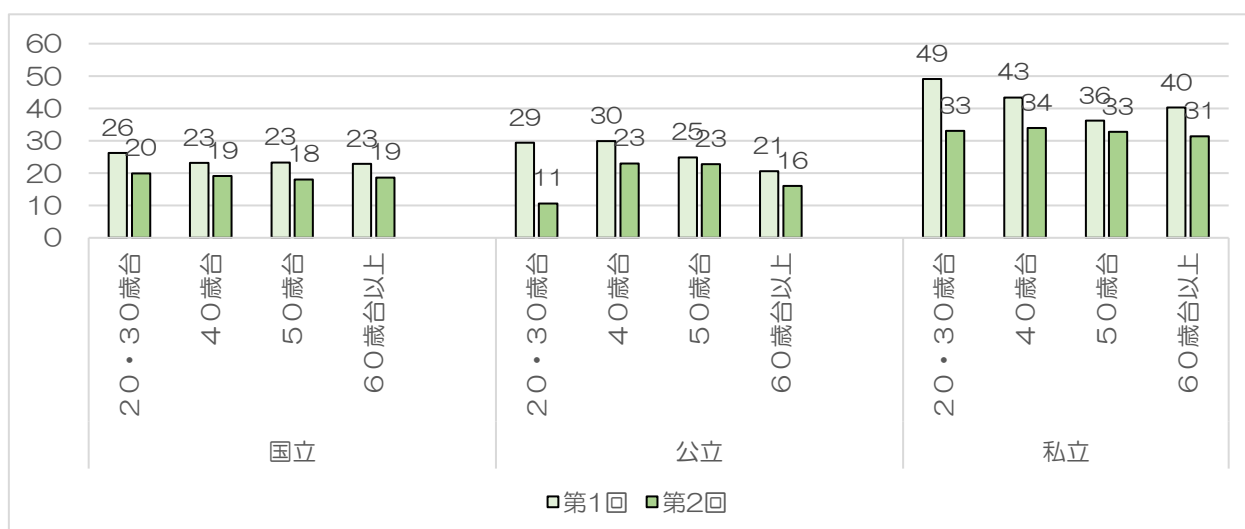
注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定の増減】は±10%ポイント以上の変化

出所： 第1回の問22、第2回の問15。

注目すべきなのは第1回と第2回調査を比べると【教育改善】を、＜きわめて重要＞と位置付ける教員が顕著に減少している点である。回答を設置者別、年齢階層別にみると（図表 2.4.4）、設置者別には国立公立より私立大学でその割合が高い。第1回調査では4~5割が＜きわめて重要＞と答えていた。これに対して国公立では2割程度に過ぎなかった。また年齢階層別でみれば若い層でそうした意識が強く、とくに私立大学でその傾向がみられた。

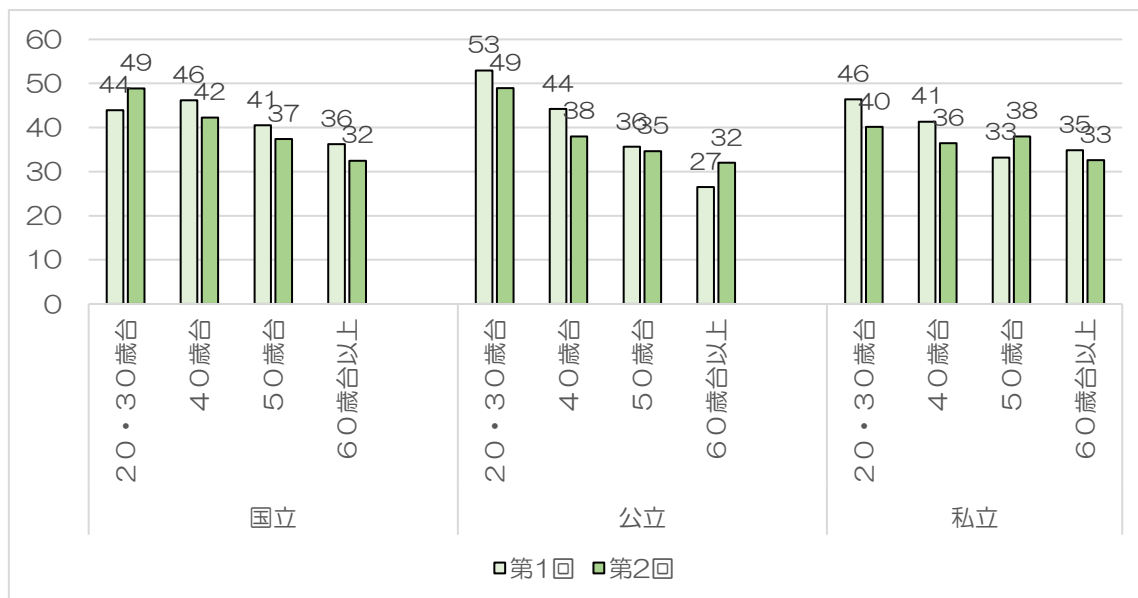
しかし第2回調査では、いずれの設置形態、年齢階層でもその割合が減少している。また特に私立大学の若年層でその落ち込みが大きかった。大学教育の改革にむけての世論や政策がすすめられる中で、一種の【改革疲れ】が生じていると解釈することもできる。

図表 2.4.4 大学の課題 — 教育改善 ＜きわめて重要＞の割合（%）



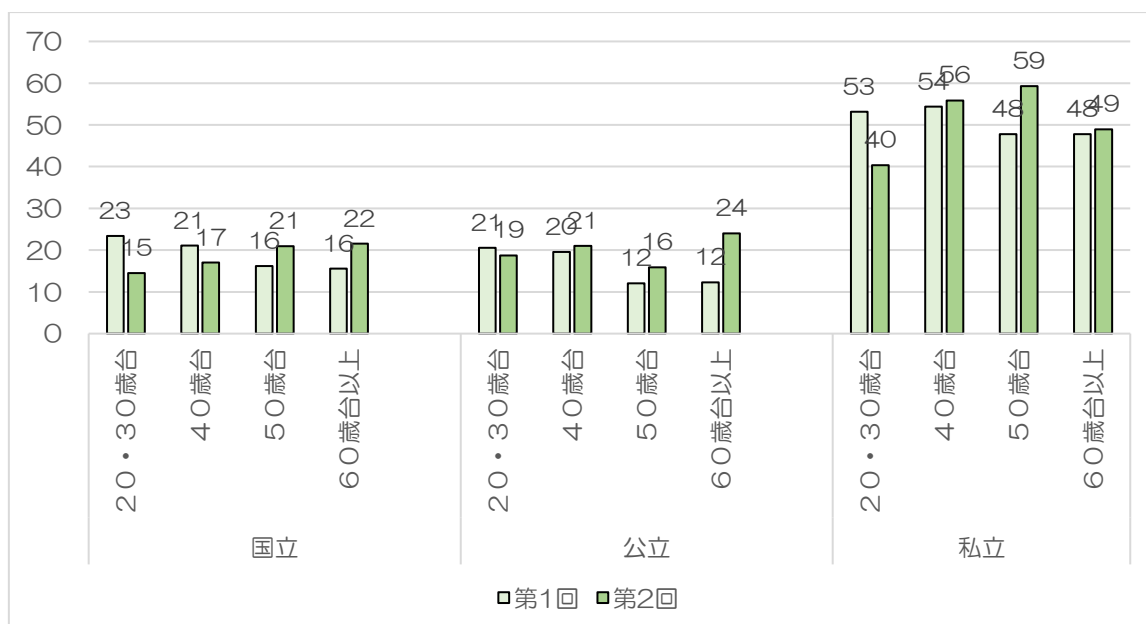
【研究水準の向上】については（図表 2.4.5）、＜きわめて重要＞とする割合が、年齢がわかいいほど高く、中高年層で低くなっていく傾向が明確である。他方で設置形態による相違は明確でない。また第 1 回と第 2 回との変化も大きくない。

図表 2.4.5 大学の課題 — 研究 — ＜きわめて重要＞の割合（％）



【学生の確保】については予測のとおり、設置形態による相違が大きい（図表 2.4.6）。＜きわめて重要＞な課題と答えた教員は国公立大学では 1~2 割程度であったが、私立大学では 5 割前後となる。年齢との関係は一貫していない。ただし第 1 回と第 2 回とを比較すると、全体では大きな変化はない。しかし仔細にみると、国公立のいずれでも 50 歳台以上で危機感が上昇しているのに対して、若年層ではむしろ減少する傾向がみられる。

図表 2.4.6 大学の課題— 学生の確保 — ＜きわめて重要＞%



学長の選任

日本の国立大学および伝統のある大学では一般に、学長の選任に教員が参加することが一般化してきた。ただしこれは法制上に規定されてきたことではなく、むしろ教員の間にそれを当然とする合意が歴史的に形成されてきたことによる。しかしこれを法制上の権限を持つ機関（国立大学法人にあっては学長選考委員会、私立大学にあっては理事会、公立大学ではそのいずれかに類似する機関）の権限を強化するべきだという動きが強くなってきた。これについて教員はどのように考えているのか。

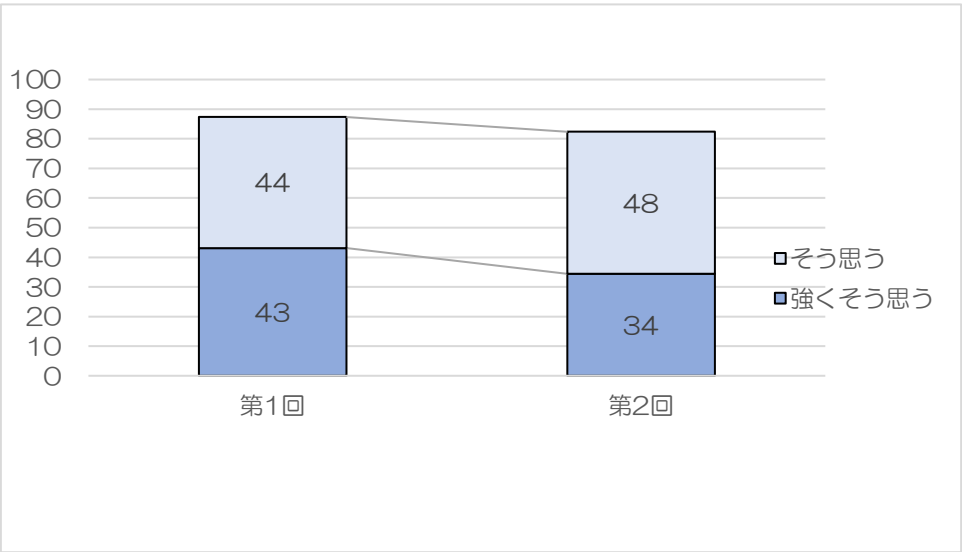
調査票は【 a. 学長の選任に、教員は投票で参加すべきだ】という項目についての意見を聞いている（図表 2.4.7, 図表 2.4.8）。回答をみると、肯定（＜強くそう思う＞と＜そう思う＞）が圧倒的である。ただし第 1 回では肯定が 9 割であったのが、第 2 回では 8 割と、ほぼ 1 割減少した。しかも＜強くそう思う＞が第 1 回の 43 パーセントから、第 2 回には 34 パーセントと、10%ポイント減少した。否定的な回答はあまり多くなっていないものの、趨勢としては、学長選考に関する教員の合意が弱体化する兆しがみえる。

図表 2.4.7 学長の選任への教員参加

	第2回				第1回からの増減				肯定的な回答の増減
	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない	強くそう思う	そう思う	そう思わない	全くそう思わない	
a.学長の選任に、教員は投票で参加すべきだ	34.4	48.0	15.3	2.3	-8.7	3.7	4.4	0.6	-5.0

注： 網掛けは【第1回からの増減】は±5%ポイント以上の変化、【肯定的増減】は±10%ポイント以上の変化
出所： 第1回の問24、第2回の問14。

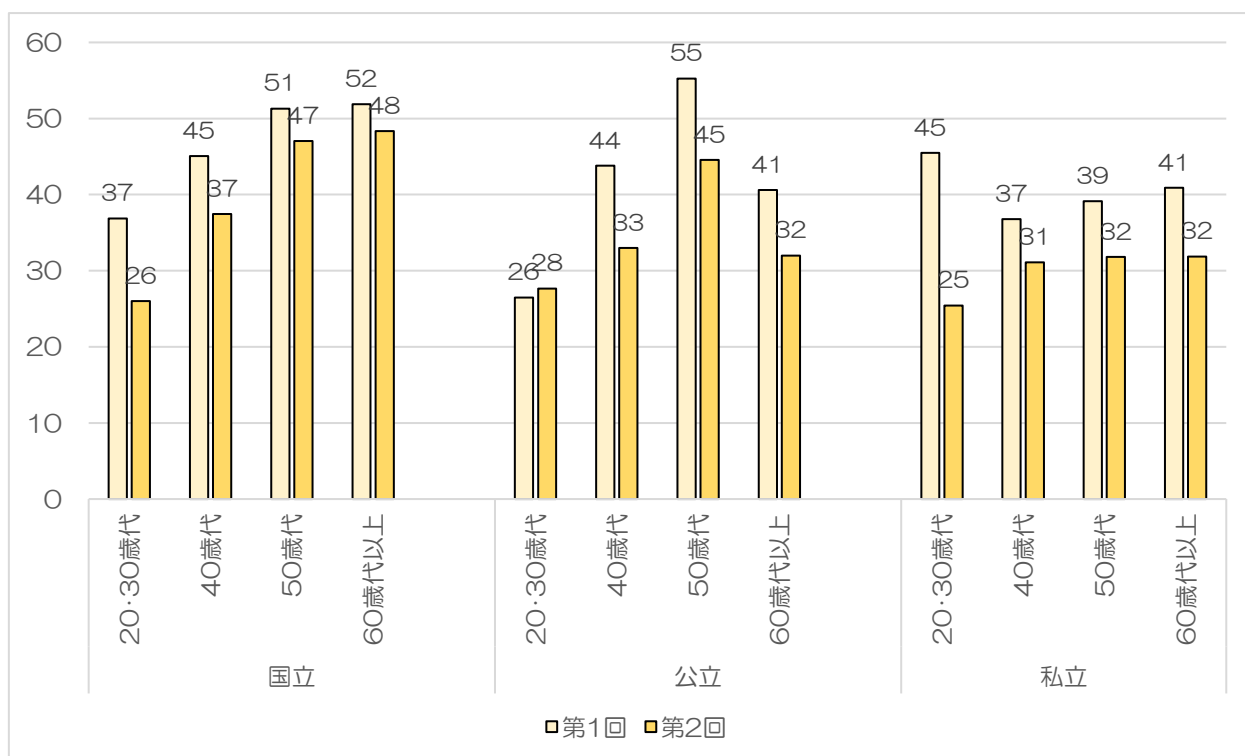
図表 2.4.8 学長の選任への教員参加



出所： 前図表に同じ

これを設置者、年齢層別にみると（図表 2.4.9）、学長選任への教員参加は国立大学で高い傾向があった。とくに国立大学の 50 歳台以上の教員は半数が＜きわめて重要＞と考えていた。しかし第 1 回から第 2 回を比べて、支持の減少が、ほぼ国公立、年齢層を通じて起こっている。減少はとくに国立、私立大学の 20 歳台、30 歳台においてもっとも顕著である。他方で、とくに国立大学の 50 歳台以上では減少の幅は限られている。結果として国立大学では、年齢による差が多くなっている。

図表 2.4.9 学長選任への教員参加 ＜きわめて重要＞% —設置者別、年齢層別



出所： 前図表に同じ

2.5 分析のまとめ

教員の変化についての分析の主な論点は以下のようにまとめることができる。

変化した点

改革に一応、少なくとも表面上は改革に前向きの変化とみられる兆候と、後退のそれとに二分して整理してみた（図表 2.5.1）。

図表 2.5.1 変化した点

		プラス	マイナス
授業方法	授業方法	・【グループワーク】が増加	・【興味がわく工夫】は最も力を入れている>が多いが、第1回調査と比べれば減少
	効果の評価	・【グループワーク】の評価が上昇	・【興味がわく工夫】の評価が最も高いが、第1回からは減少
教育体制・目的	教育体制	・【修得内容の標準化】が増加 ・【授業・教材の標準化】が増加 ・【週2回授業】少し増加	・【ゼミ・研究室】志向への肯定がもっとも高いが、第1回からは減少
	体制のあり方	・【授業・教材】標準化への疑念が低下	【ゼミ・研究室】<非常に重要>が減少
	目的	・【学問の基礎を教える】への支持が最も高い。 ・【特定の知識・技能】修得への抵抗が減少 ・【学生の成長の契機】が増加	【学実に学問の基礎を教える】<きわめて重要>減少 ・【誰にとっても意味がある大学教育】への支持が減少 ・
大学組織	教育改革の位置づけ		・【教育改善】がもっとも重要な問題とみられているが、<きわめて重要>は減少 ・<入学者の確保>について<問題ない>が減少
	FD		・【授業の相互参観】、【教員間の討論】のいずれも<非常に有効>が減少 ・【授業の相互参観】は<有効ではない>が増加
	ガバナンス		・【学長選任への参加】は支持が大きいものの、第1回からは減少。とくに若年層で著しい

授業方法

- 授業方法について最も目立つのは【グループワーク】を行う傾向が強くなった点である。またこれに関しては実施による効果に対する期待が高い。これは前述の学生調査の結果とも一致する。またその有効度に関しても、とくに懐疑的な見方が減少している。またこの傾向は設置形態を問わず、また年齢を問わず見られた。この十年間における授業方法の最大の変化はグループワークの浸透であった。いわば「学生包摂志向」が教員の間に広まっている。
- 【興味がわく工夫】は、依然として教員がもっとも＜力を入れている＞点であり、これは学生調査での結果とも対応している。しかし第1回調査と比べれば、減少の傾向がある。またその効果についても、＜非常に有効＞がもっとも多い。しかし第1回に比べれば顕著に減少している。第1回から比べれば、微妙にその位置が後退する傾向がある。

教育体制・理念

- ゼミ・研究室における教員・学生間の接触を図る【ゼミ志向】はもっとも教員が＜力をいれている＞点である。しかし第1回と比較すれば、その地位は顕著に後退している。またその重要性についても＜非常に重要＞が減少している。
- 教育内容・方法を標準化し、カリキュラムを体系化する【体系化志向】は、＜行っていない＞が顕著に減少した。ただしその重要性の地位は変わっていない。他方で授業内容・教材を標準化し、TAを用いることの効果については肯定的な見方が増えたが、実際には実施されていない。
- 教育の目的については【確実に学問の基礎を教える】への支持が最も多く、これは第1回調査とほとんど変わっていない。ただし＜非常に重要＞は減少した。
- 他方で【学生の成長の契機になる】が＜非常に重要＞とする割合が顕著に増加した。【特定の知識・技能を習得させる】ことへの強い抵抗が減少とした。他方で【職業関連知識・技能】に対する強い反感が減少した。
- 全般的に大学【誰にとっても意味のある教育】の場とすることに対しては肯定する割合が顕著に低下した。この変化は大学の設置形態、年齢を問わず見られた。

大学組織・ガバナンス

- 所属大学の課題としては【教育改善】がもっとも重要とされているが、＜きわめて重要＞とする割合は減少した。【入学者の確保】の重要度が増した。
- FDについては一般的には有効と感じられている。しかし【授業の相互参観】および【教員間の討論】のいずれについても、＜非常に有効＞とする割合は減少し、とくに前者については＜有効ではない＞とする回答が増えた。
- 【学長の選任への教員参加】については依然として8割が支持しているが、第1回に比べれば顕著に減少した。とくに＜強くそう思う＞は、43パーセントから34パーセントへと、1割程度の減少を見せた。この傾向は設置形態を問わずみられ、年齢別には若年層で著しい。

何を示しているか

以上の分析結果は仮説的に以下のように説明することができる。

- 1) 日本の大学教育は、講義を中心とする注入型の教育を、ゼミや研究室の小規模の帰属集団における教員と学生、学生同士の人的な関係で保管する、という教育スタイルをとってきており、こうした意味での【ゼ

ミ・研究室】志向は強い影響力をもっている。しかしそうした志向は、とくに若年の教員を中心として後退しつつある。現代の学生は固定した人間関係の中での拘束は好まれない。また教員の人格的な陶冶も、一面的には人的な拘束であるために好まれない。

代わって、授業で修得すべき知識・技能の標準化、カリキュラムの体系化など、アメリカ型の教育スタイルが影響力を強めている。ただしそのためには週二回の授業、提出物へのコメント、TA の採用などの教育条件、また教員個人としての時間的負担が必要であり、現実の普及の制約となっている。

2) 多くの教員は教育改善の道を【わかりやすい】あるいは【興味をもたせる】授業に求めている。教員の立場からすれば、学術体系を基礎として、そのうえで社会の要求にこたえるという意味でもっとも論理的なものである。

ただしそれは、講義とそれに応じた学生の教室外での学習との組み合わせによってしか十分な効果を上げえない。ところが学生の学習時間は容易に変化しない。高校時代の学習時間は引き続き減少しており、自律的な学習経験が少ないだけでなく、現実には多数の授業を履修するための制約もある。そうした現実が浸透するにしたがって、教員の授業の改善の効果への期待も低下する傾向がみえる。また授業の相互参観や、教育をめぐる討論などの手段の効果にも懐疑的となる傾向が生じている。

3) その中で、学生の学修行動に現実的に対応する授業方法として「グループワーク」を用いる傾向が強まっており、その傾向は大学の設置形態あるいは教員の年齢層を通じてみられる。また教員のグループワークに対する疑念も少なくなっている。その背後には、現在の学生が小中学校の時代からこうした形態になれてきており、授業への参加が学生の達成感を生み、さらにそれが教員の達成感につながる、という構図がある。また大学教育の理念として、学生の人格的成長を重視する傾向が強くなっていることもその要因となっている。

第3章 学部単位でみた変化

この研究の特徴は、第1回調査の協力大学（学部）を対象として第2回調査を行っているために、学生については学部を単位として、第1回と第2回の変化を観察できることである。全部で151の学部について、調査に対する回答の学部平均値を算出し、そこから学部単位でどのような変化があったかを分析した。

3.1 教室外の学習時間

2時点間の相関

まず授業の予習、復習、課題の作業など、教室外でおこなう学習時間について、週に6時間を超える学生の割合を、第1回と第2回データから算出した（それぞれ【第1回高学習時間比率】、【第2回高学習時間比率】と略記）。第2回を従属変数、第1回を独立変数とする回帰分析をした（図表3.1.1）。⁵

図表 3.1.1 教室外学習時間の回帰分析

	N	定数			回帰係数				R	
		定数	標準誤差		係数	標準誤差		β		
総数	151	10.651	2.460	***	0.461	0.058	***	0.544	.544	***
専門分野別										
人社会芸	59	3.752	2.449		0.533	0.070	***	0.709	.709	***
理工農	39	24.685	6.329	***	0.258	0.139	*	0.288	.288	*
保健・家政	31	29.973	5.416	***	0.140	0.108		0.230	.230	
その他	19	1.027	7.460		0.598	0.174	**	0.630	.630	**
選抜性										
低（～45）	26	5.374	3.549		0.482	0.118	***	0.632	.632	***
中（45～55）	55	0.977	3.849		0.666	0.089	***	0.715	.715	***
高（55～）	64	24.397	4.544	***	0.211	0.101	*	0.254	.254	*

注： 従属変数： 第2回高学習時間比率（第2回調査で学修時間6時間以上の学生の割合、1-3学年）

独立変数： 第1回高学習時間比率（第1回調査で学習時間6時間以上が学生の割合、1-3学年）

***99.9パーセントで有意、**99パーセント、*90パーセント

まず明らかなのは、第1回と第2回との結果との間には強い関係がある点である。第1回での学習時間の回帰係数は有意性が高く、相関係数も0.544と高い値を示した。専門分野別におこなった回帰分析をみると、とくに2時点間の関係が強いのは人社会芸（人文、社会、教育、芸術）で相関係数は、0.7に達する。他方で理工農では相関が低く、保健・家政では相関が有意ではなかった。回帰係数をみると、理工農、保健・家政では定数の標準誤差が小さく、有意性も高い。大学をつうじて、学修時間に一定の標準性があることを

⁵ 前述のように第2回調査の質問票では、選択肢＜1-5時間＞を、＜1-2時間＞と＜3-5時間＞に二分したため、回答に微妙な相違がある可能性がある。

示しているのかもしれない。また学部の入学選抜性によって分類して回帰分析をすると、とくに高い選抜性の学部で 2 時点間の相関が低かった。

このように学習時間についての指標が二時点間での相関が高いことは、学修時間は学部の特質の持続性が高いことを示している。これを【レガシー効果】と呼んでおこう。言い換えれば、学修時間については、制度、カリキュラム、教員、学生が共有する価値や行動規範が総体として、一種の学部固有のカルチャーのようなものを作っており、それが、それが少なくとも十年程度のスパンでは大きな規定力をもっていることになる。

授業形態の効果

教室外学習時間の変化に対する、授業方法の影響を知るために、第 2 回高学習時間比率を従属変数とし、第 1 回高学習時間比率と、授業方法とを独立変数とする重回帰分析を行った。授業方法は、第 2 回調査において学生が【理解をさせる工夫】、【提出物に対するコメント】、【グループワーク】の三つの項目について、<よくあった>ないし<ある程度あった>と回答した学生の割合について学部の平均値を出した。その結果（回帰係数については標準化係数）を示している（図表 3.1.2）。

図表 3.1.2 教室外の学習時間の重回帰分析

	定数		独立変数の標準化係数（ベータ）							
			第 1 回 6 時間以上比率		授業方法					
					理解しやすい工夫		コメント		グループワーク	
全サンプル (N=149)	4.878		0.554	***	0.145	*				
	3.265		0.552	***			0.100			
	(0.769)		0.554	***					0.021	
選抜性低 (N=26)	16.299	**	0.629	*	0.097					
	7.846	**	0.538	***			0.221			
	4.842		0.612	**					0.038	
中 (N=55)	(0.717)		0.704	***	0.065					
	21.275	***	0.669	*			0.180	*		
	9.107	***	0.712	***					0.057	
高 (N=64)	5.414		0.242	**	0.306	*				
	0.181		0.252	***			0.199			
	23.954	***	0.253	*					0.032	

従属変数：第 2 回 6 時間以上比率（第 2 回調査で学修時間 6 時間以上の学生の割合、1-3 学年）

独立変数：第 1 回 6 時間以上比率（第 1 回調査で学習時間 6 時間以上のが学生の割合、1-3 学年）

授業方法変数

理解に工夫：経験した授業【理解しやすい工夫】への回答<よくあった>割合

コメント：【提出物へのコメント】への回答<よくあった>割合

グループワーク：グループワーク【グループワーク】への回答<よくあった>わりあい

***99.9 パーセントで有意、**99 パーセント、*90 パーセント

ここからまず明らかなのは、第 2 回での高学習時間比率への影響からみれば、第 1 回での高学習時間比率が圧倒的であるという点である。標準化回帰係数は 0.5 程度で、統計的な有意性も高い。

これに対して、授業方法の影響は一般に低い。一定の影響力を持っているのは【理解を助ける工夫】で、特に選抜性の高い学部でその影響が目立つ。他方で【提出物へのコメントは回帰係数の値が低く、有意性も低い。また【グループワーク】は学習時間にほとんど関係がないことが明らかである。

学習時間に関するかぎり、学部固有のカルチャーに規定力がきわめて高く、授業上の工夫がほとんど変化をもたらしていない、ということになる。ただ【理解させる工夫】は選抜性の高い学部では一定の効果をもつ。

3.2 授業の有効感

質問票はもう一方で、学生自身が、知識・能力（コンピテンス）を形成するうえで有効であったか否かを聞いている。その答えについて＜役にたった＞ないし＜ある程度役にたった＞と答えた学生の割合を（【授業有効感】）、第 1 回第 2 回の調査結果について算出した。

有効感の安定度

まず第 2 回の有効感度を従属変数、第 1 回の有効感度を独立変数とした回帰分析を行った（図表 3.2.1）。これをみて明らかなのは、授業有効感についても、第 1 回の結果と第 2 回の結果との相関が高いという点である。いずれに知識・能力項目についても相関係数は 0.4 以上あり、統計的にも高度に有意であった。とくに職業に関連する知識、外国語については、相関係数が高い。授業有効感についても、学修時間と同様のレガシー効果を認めることができる。

図表 3.2.1 授業の有効感のレガシー効果 — 回帰分析

	定数		独立変数- 第 1 回有効感			R
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	β	
職業関連知識	27.607	3.018 ***	0.700	0.046	0.781 ***	0.781 ***
専門知識	44.921	5.490 ***	0.476	0.072	0.476 ***	0.476 ***
文章力	35.784	2.335 ***	0.557	0.053	0.652 ***	0.652 ***
外国語	21.795	1.788 ***	0.636	0.048	0.736 ***	0.736 ***
考える力	44.611	3.898 ***	0.418	0.069	0.443 ***	0.448 ***
広い視野	52.813	3.417 ***	0.344	0.054	0.463 ***	0.430 ***

従属変数：第 2 回 学部平均値

【授業は役にたった】に対する答え、1（低）から 4（高）のうち、3 と 4 の合計

独立変数：第 1 回 学部平均値 同上

N=151、***99.9 パーセントで有意、**99 パーセント、*90 パーセント

授業方法の影響

では、レガシー効果を前提としたうえで、授業方法はどのような影響を与えているのか。知識技能の項目別に、第 2 回の有効感を従属変数とし、第 1 回の有効感（レガシー効果）と現在の授業方法を独立変数として重回帰分析を行い、その授業方法についての係数を示した（図表 3.2.2）。

図表 3.2.2 授業の有効感の規定要因 — 重回帰分析

従属変数	独立変数								R
	第 1 回結果		教育方法						
			理解させる工夫		コメント		グループワーク		
	β		β		β		β		
職業関連の知識	0.779	***	0.017						.781
	0.736	***			0.130 *				.790
	0.757	***					0.074		.784
専門分野の知識	0.397	***	0.500 ***						.686
	0.440	***			0.229 **				.527
	0.488	***					-0.054		.479
文章力	0.545	***	0.414 ***						.765
	0.633	***			0.131 *				.664
	0.653	***					-0.005		.652
外国語	0.707	***	0.205 ***						.763
	0.725	***			0.070				.739
	0.751	***					-0.056		.738
考える力	0.312	***	0.530 ***						.678
	0.431	***			0.128 *				.461
	0.448	***					-0.014		.443
広い視野	0.432	***	0.131 *						.480
	0.466	***			-0.028				.464
	0.330	***					0.302 ***		.536

従属変数：第 2 回

【授業は役にたった】に対する答え、1（低）から 4（高）のうち、3 と 4 の合計

独立変数：第 1 回 学部平均値

【授業は役にたった】に対する答え、1（低）から 4（高）のうち、3 と 4 の合計

授業方法（よくあった、あったの計）

N=151、***99.9 パーセントで有意、**99 パーセント、*90 パーセント

結果として明らかなのは、授業方法が授業の効果感に一定の効果を持っていることである。とくに注目されるのは【理解しやすい工夫】がある授業多くあったと感じた学生の割合が、授業の効果感に重要な影響を与えている点である。「考える力」、および「専門分野の知識の形成」にたいしては、【理解しやすい工夫】の標準化回帰係数（ベータ）は0.50程度にのぼり、第1回の計測結果の影響（レガシー効果）とほぼ同様か、あるいはそれより高い規定力を示す。

また【提出物へのコメント】も「専門分野の知識」の形成に従業な影響を与え、さらに「文章力」、「考える力」の形成にも有効と考えられている。

他方で【グループワーク】については、ほとんど統計的に有意な影響が認められない。唯一、効果があったのは、「広い視野の獲得」についてであった。

知識能力（自己評価）への影響

では授業の有効感、どの程度、知識能力の水準に対する自己評価に影響しているのか。それをみるために、従属変数を【自分の知識能力の自己評価】、独立変数を第1回調査での【自分の知識能力の自己評価】、および【授業は役にたった】に対する答え、として重回帰分析を行った（図表3.2.3）。

図表 3.2.3 知識能力の自己評価の規定要因 一重回帰分析

従属変数	定数		第1回結果			授業の有効感			R
			係数	β		係数	β		
職業知識	-4.252		0.012	0.008		0.271	0.503	***	0.618
専門分野の知識	26.104	***	0.184	0.133		0.379	0.477		0.133
文章力	11.804	***	0.120	0.136	*	0.423	0.615	***	0.431
外国語	4.346	**	0.256	0.270	***	-0.014	-0.017	***	0.678
考える力	8.127	*	0.169	0.166	*	0.277	0.263	***	0.501
広い視野	16.828	**	0.077	0.082		0.265	0.380	**	0.296

従属変数：第2回 【自分の知識能力の自己評価】に対する答え、1（低）から4（高）のうち、3と4の合計

独立変数：第1回 【自分の知識能力の自己評価】に対する答え、1（低）から4（高）のうち、3と4の合計

第2回 【授業は役にたった】に対する答え、1（低）から4（高）のうち、3と4の合計

N=151、***99.9パーセントで有意、**99パーセント、*90パーセント

結果をみると、レガシー効果はある程度あるものの（とくに【職業に関する知識】）、より規定力が強いのは、授業の有効感であった。とくに「職業に関する知識」および「考える力」については、 β の値が0.5から0.6を示し、レガシー効果よりはるかに大きい。

ただし「専門分野の知識」であり、これはレガシー効果も、授業の有効度も規定力が小さい。いいかえれば、学術的な体系に照らして自分の知識・能力を判断できる点においては、規定力が小さい。「外国語」についてはレガシー効果が最も大きい。授業の有効感はいくつかの効果をもち、それはより有効な授業を受けるほど、自分の学力の限界が認識しやすい、と解釈することができる。

この結果をみると、一般的なコンピテンスについては、授業の有効感が、能力の自己評価に結びついており、それは授業それ自体が、自身の能力の自己評価を生んでいると解することができる。

3.3. 学生の学習実態の教員に対する影響

授業方法が学生の学習行動に影響を与えている、という枠組みで以上の分析を行ってきたが、逆に教員は現実の学生の学習行動をみて、どのような授業をするか、というストラテジーを立てている、と考えることもできる。とくに今回のデータからは第 1 回（10 年前）の学生の学習時間についての情報が得られるわけであるから、それが現在の教員の授業方法の選択をどのように規定しているか、というモデルに基づいた分析も可能である。

従属変数を、第 2 回の調査から教員の授業方法の改善（＜力を入れている＞ないしくおこなっている＞と答えた回答の割合）、独立変数を第 1 回調査で授業外の学習時間が 6 時間以上であった学生の割合として、回帰分析を行った（図表 3.3.1）。

図表 3.3.1 第 1 回学生学習時間の、第 2 回授業プラクティスへの影響

従属変数	独立変数：学習時間 5 時間以下の学生の割合					
	回帰係数					R
	定数		係数	β		
達成目標を明確化	93.446	***	-0.058	-0.176	*	-0.176
興味を持たせる工夫	98.065	***	-0.020	-0.151	*	-0.151
補助的指導	49.011	***	0.305	0.253	**	0.253
出席をとる	81.378	***	-0.014	-0.011		-0.011
小テスト	80.374	***	-0.128	-0.150	*	-0.150
課題へのコメント	50.293	***	-0.271	-0.186	*	-0.186
意見をのべさせる	66.294	***	-0.162	-0.126		-0.126
グループワーク	43.355	***	-0.357	-0.227	**	-0.227

独立変数： 第 1 回調査で、授業外学習時間が 5 時間以上の学生の割合

従属変数： 第 2 回調査で、各授業プラクティスに＜力を入れている＞ないしくおこなっている＞と答えた教員の割合

N=135 学生回答者 5 人以上の学部のみ

この結果をみると、ほとんどの項目について授業方法の改善を目指す教員の割合は、10 年前の学生の学修時間と有意なマイナスの回帰係数をしめしている。言い換えれば、10 年前に学生の学修時間が少なかった学部ほど、様々な授業方法の改善を行っている。

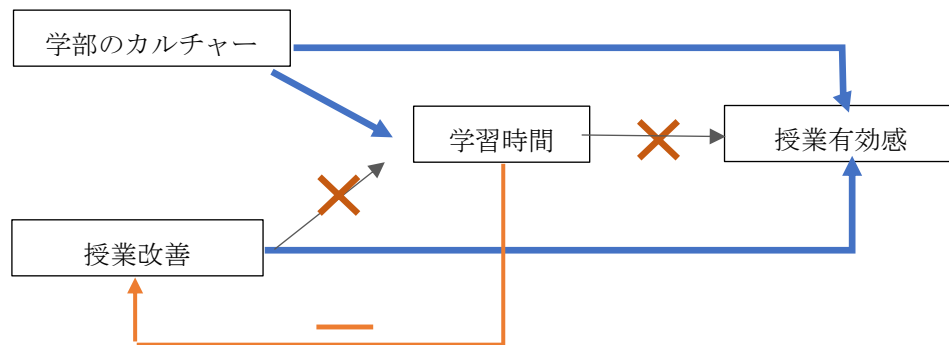
とくにここで注目されるのは、【グループワーク】が、10 年前に授業外学習時間が少ない学部において、より多く採用される傾向が明らかなことである。学習時間の制約が容易に変わらないとすれば、教室の中でいかに学生の学修をひきだすことが重要になり、教員はそうした状況に対応してきたことを示すものと解することができる。

唯一の例外は【補助的指導】で、ここでは重回帰係数は有意のプラスの値を示している。これは補助的指導が本来、学修時間を増加させる機能を果たすのだが、その改編は組織的、財政的な基礎を必要とするために、一人ひとりの教員はその拡大を望んでいるとしても、実行できないことを示しているのであろう。

このように授業方法と授業時間との関係の間には、相反する因果関係が含まれている。

3.4 学部単位の分析のまとめ

以上の分析結果を解釈すると以下になるだろう。



- 1) 学習時間は、学部で形成されてきた学生と教員の相互期待に強く規定されている。そのために、授業の改善は、「理解させる工夫」が弱い効果をもつものの、ほかの方法は学習時間に有効な影響を与えることができない。
- 2) 授業有効感も学部カルチャーに強く依存されているが、それと学習時間との間には明確な関係がない。他方で授業改善、とくに授業内容を理解させる工夫は、学生に授業が知識・能力の形成にもつ効果についての評価を高くしている。
- 3) 学習時間が少ない学部では、教員はそれを克服するために授業改善により力を入れる傾向がある。とくにグループワークはそうした意味で重視される。しかしそれは上述の1)の経路が強力なために、授業時間の増大には有効な力を発揮することができない。

結論

以上の、学生、教員、学部単位の分析の結果をまとめてみれば、ここ十年ほどの間に日本の大学教育には重要な変化が起こっているようにみえる。それを一つのストーリーとして仮説的にまとめてみれば、以下のようになるのではないだろうか。

1. 日本の大学教育は、21 世紀の初頭にかかなり大きな変化を遂げた。上記の社会的、政策的環境の中で、大学は組織として教育機能の強化のために多様な改革を行った。必ずしも本来の姿ではなかったとしても、「シラバス」を作成して授業内容を明示し、「三ポリシー」によって入学、教育、卒業の目標を明文化した。専門分野の知識・技能だけでなく、それで形成される「コンピテンス」を言語化し、授業との関連を示す「カリキュラム・マップ」が作られた。また学習支援組織・施設、インターンシップ、留学機会などによって、広い意味での学習環境も整備された。

大学教員の中にもまたそうした社会的要求の中で教育の改善への努力が拡大した。授業は専門分野の学術的体系性への解説から、より学生が修得しやすい形への授業へと変えていく方向へ変化した。教員調査と学生調査の結果には多少のずれがあるが、それは教員の側からの努力は第 1 回調査より前にすでに起こっており、それが定着したのが 2010 年に入ってからだと解釈される。2010 年台に明確に拡大したのはグループワークであり、これは学生調査と教員調査の結果が一致する。

2. 教育体制・授業の変化は学生の意識と学習行動に大きな影響を与えた。大学全体としての教育改革は学生が接する学習環境や授業に、具体的な変化を生じさせるとともに、そうした変化がどのような意図によって行われているかを認知する枠組みを変化させた。また学生自身も大学生であることに正当性を見出すことが求められる。逆にいえば大学生は大学授業とは別に、自ら学習するべきもの、という古典的な「学習の自由」モデルは後退した。こうした背景から、学生は授業を知識・能力の形成に役立つものと評価し、とくに汎用的な知識能力の自己評価も高くなった。大学全体に対しての評価もより肯定的になった。

しかし、学生の学習時間は 2010 年台を通じてほとんど変わっていない。それは一方で学生が一学期に平均 13 コマを履修し、個々の授業に教室外で学習することを考えないという習慣が一般化していること、他方で教員はそうした学生の行動を感じ取り、通常の授業では教室外での学習を多く期待しない、という、教員と学生の相互の期待が一つの構造的なカルチャーともいえるべきものを作っているからである。そうしたカルチャーが頑健であり、学生本位の授業とすることによっては改編することはできない。

3. 教員はこの中で矛盾に直面している。学生の学習時間が短い大学では特に教員は授業を学生により親和的にする努力を行ってきたが、しかしそれも教員・学生の相互期待の構造の拘束を破ることはできない。したがって教員の間には授業改革の効果については悲観的な見方が広がっている。この中で、一つの可能性は「グループワーク」などの学生参加型の授業であって、こうした授業では学生は従来の学習行動の枠内で、授業の時間においてより充実した経験をし、それが教員にも達成感をもたせるという循環を生じさせた。

これを長期的な視点からみれば、旧来の一方的講義による授業を、ゼミ・研究室での人的接触で補完する、という日本型モデルには教員の支持が少なくなっているとみることができる。ゼミ、研究室は閉鎖的なメンバシップ空間であり、授業のように学生が選択する一時的な空間ではない。現代の学生にとってはそのほうが望ましく、教員もそれを感じているのではないか。他方で教員は、授業の体系化、週 2 回授業などによる授業内容への集中度の強化、などのアメリカ型のモデルへの支持を拡大している。また教員の評価、インセ

ンティブの設定などにも従来のような拒否感が低下している。学内運営についても学長選考への直接の参加については懐疑的な傾向が生じつつある。一定のシフトが起こりつつあるとみるべきであろう。

以上のストーリーにはさらに実証的に詰めて検討すべき点、さらに精緻な分析方法を試みる可能性も少なくない。それは将来の課題である。しかしそれにしても、上述のストーリーを根本的に覆す可能性はあまり大きくないのではないかと考える。

むしろ将来の課題はこうした変化がどのような問題点をはらんでいるかを検討することであろう。ひとつの問題は「グループワーク」など学生参加型の授業の拡大をどのようにとらえるかという点である。上述のように参加型の授業は学生が自分の身の回りの現実や、自分の経験をもとにして、周囲の学生と話しあう、という点において、学生に充実感をもたらす。教員にとってもそのような学生の充実感が教育者としての達成感をもたらすことになる。

しかも現在の学生は、成長過程における社会的な経験が限られる一方で抽象的な情報が飛び交うなかで、自分の考えかたの中軸を求める要求が強い。この意味での人格的成長として、参加型授業が従来な役割を果たしている可能性は少なくない。教員にとっても、そうした意味での学生の成長を実感することができるともいえる。しかしこのような方向は、ともすれば一時の体験におわり、一定の方向へ熟成するとはかぎらない。実際、学生自身の評価をみると、グループワークは「広い知識」を身に着ける以外に、とくに役にたったと評価されていない。

他方で学生の学習時間が停滞している現状の持つ意味は少なくない。分析でみたように、学修時間は大きく学部「カルチャー」に規定されていると考えられる。そこにはこれまでの教育や学生の特性が反映しているのだろうが、重要なのはそれが学生と教員の行動に、一定の相互期待が形成され、それが授業と学習行動を規定して、という点である。それを「教育・学習カルチャー」と呼んでおこう、それは学校教育研究における「スクールエフェクト」とも類似している。上の分析はそれを現代日本の大学の学部間の相違の統計的な分析によって見出したわけだが、日本の大学全体をとってみても、いわば日本的な教育・学習カルチャーの構造があり、それが例えばアメリカの対応する教育・学習カルチャーとは大きく異なる。それが彼我の学習時間の大きな差をもたらしているとみることができる。

このような教育・学習カルチャーはそれが制度化されたものでない。ましてそれは大学内部だけでなく、企業の学卒者採用の慣行などと社会的な要因にも規定されているために、頑健であり、容易に変化させることのできないものである。200 年台から行われてきた、詳細な KPI を用いて財政補助を槓桿とする大学教育改革への政策手段が、この点において明確な効果を上げることができなかったのは、以上の議論の示すところなのではないか。

同時に学術的な専門知識が卒業後には表面的にはほとんど用いられないことがないこと、他方で学生の人格的成長の重要性が認識されてきたこと、が学習時間そのものの重要性を相対的にひくく見せる傾向を生じさせていることにも留意すべきである。たしかに学習時間はそれだけでは教育的にほとんど意味をもたない、一つの指標であるかもしれない。しかしそれは、これからの学生が生きていくうえで、きわめて重要な意味を持っているように思われる。

一般に現代社会は多様で、しかも流動性がますます高くなっていく時代であるといわれる。その中で新しいものや、人間・社会のニーズ、ものの考え方を作り出す能力が求められる。教育そのものは本質的にこれまでの知識にもとづくものであるから、新しいもの、そのものを教えることはできない。しかしそうした力を作ることはできると考えられてきた。教育の個々の過程とは、①一つのテキスト・学術体系をもとにして

教員がその意味を教え、②学生は教室で、それまでの知識や考え方とは異なる新しいものに直面させられ、そして③自分自身で両者を対峙させ、これまでの知識・考え方を拡大、修正することによって新しい知識を内面化させる。ここで重要なのは、新しい知識・考え方を獲得することだけではなくて、それに至る葛藤の過程での経験で得られる、思考習慣の蓄積、飛躍の経験である。そしてそれは、いわゆるフンボルト理念や教養教育の古典から読み取れることでもある。

それは③の教室外の学習が確保されなければ起こりえない。いわば上述の①、②、③がそろふことによって初めて本来の授業となりえるはずである。そうした授業をどのように一般化させていくかが、日本の高等教育にとっての最大の課題として残されているのである。

附 A 学生調査

サンプルの設置者別の構成とそれによる補正

1) 第 1 回調査サンプル

	回答者		母集団 (2008 年)		抽出率 (%)	補正係数
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)		
国立	17,703	36.9	454,653	16.9	3.89	0.45907
公立	5,967	12.4	114,128	5.2	5.23	0.42205
私立	24,365	50.7	1,951,812	77.8	1.25	1.53457
計	48,035	100.0	2,520,593	100.0	1.91	

母集団の出所：学校基本調査 2008 (H20) 高等教育表 4 学部学生数

2) 第 2 回調査サンプル

	回答者		母集団 (2018 年)		抽出率 (%)	補正係数
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)		
国立	14,512	44.1	439,833	18.0	3.30	0.40909
公立	3,799	11.5	136,297	4.5	2.79	0.39227
私立	14,602	44.4	2,023,554	77.4	0.72	1.74538
計	32,913	100.0	2,599,684	100.0	1.27	

母集団の出所：学校基本調査 2018 (H30) 高等教育表 6 学部学生数

第 1 回大学生調査 質問票



授業についてお聞きします

問1 大学に入ってから次のような授業はありますか、またそれは有無でしたか。

	経験した 有 用 で ない				経験して いない
	有	用	で	ない	
フレッシュ・マン・セミナー	1.4	2.2	10.6	5.2	80.6
高校での学習科目を学ぶための特設的な科目	2.5	9.8	14.1	3.3	60.7
大学での独自の方法（スタディ・スタイル）を学ぶ科目	1.9	11.5	19.6	5.2	61.7
就職や将来のキャリアをテーマとした科目	1.4	9.4	20.6	11.8	56.8
インターンシップ（企業研修等）による授業	0.8	3.6	9.7	10.5	75.0
専門分野での研修	1.5	7.2	13.5	5.5	71.6
留学	0.8	2.1	3.1	2.9	89.1

問2 あなたにとって重要だったと感じ授業を思い出してください。

A それぞれこれまで受けた授業の何回くらいですか。必修・共通科目、専門教育の別にお答えください。

必修・共通科目	専門教育
4.29 回	5.85 回

B それらの授業にあてはまる特徴はどんなことですか（○はい/△でも）。

53.3	最先端の研究成果を授業に活用してくれた
55.4	他大学・学部との連携を促してくれた
36.4	企業や研究者との関わりから学問の発展を促してくれた
49.6	将来に役立つ実践的な知識や技能を教えた
49.4	資格の取得に役立つ情報やテクニックを教えた
34.4	教員がうまかった
37.0	自分自身や将来やりたいことを考えるきっかけになった

問3 これまで受けた授業の影響について、全体が 10 割になるようにお答えください。

授業 (10人以上)	授業 (50人以上100人未満)	授業 (100人以上)	演習・ゼミ	実習・実習
2.36 割	2.84 割	3.01 割	1.33 割	1.16 割

第1次～第3次調査 実施期間



2007 年全国大学生調査

全国大学生調査コンソーシアム
東京大学 大学経営・政策研究センター

- この調査は皆さんの大学生活でどのように生活・学習しておられるのかを明らかにし、日本の大学教育のあり方を考える基礎とするとともに、皆さんが在学する大学での教育改善にも役立てることを目的としています。
- いただいた回答はすべて統計的に処理され、あなた個人についての情報は他の目的で使われることは決してありません。この調査は全国で60余の大学で行われています。また一部同じ項目を用いてアメリカと中国でも調査が行われることになっています。
- この調査は各大学のご協力のもとに、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが『文部科学省科学研究費補助金 学校創成研究』を得て行うものです。

● 回答はウェブを通じてください。
別紙（回答のてびき）をご覧ください。● ウェブでない場合には、添付の封筒に入
れて投函してください。

- 回答者数は総数で100人に、5千人の調査結果はあがらず、
- 調査結果の精度は2007年5月以降、調査以下に集約する
予定です。
<http://www.u-tokyo.ac.jp/campus/>

回答者の所属と学年 **〒4-62-333**

大学名	大学
学部名	学部
課程・専攻・コース名	
現在在学中に入学した年（西暦）	2004年 207 2005年 237 2006年 246 2007年 217
現在の学年	1 年次 262 2 年次 253 3 年次 256 4 年次 233 5 年次 04 6 年次 03



大学教育への評価をうかがいます

問8 次の点で大学の授業は、どのくらい満足していると思いますか。また自分の学力はどの程度あると思いますか。

	これまでの授業経験は		自分の学力は					
	満足していない	満足している	并不高	高				
科学の発展に貢献する知識や技能	9.5	29.6	42.4	17.2	30.0	90.6	15.4	1.3
専門分野での知識・理解	4.7	23.9	49.5	20.5	25.1	51.3	19.3	1.4
専門分野の基礎となるような理論的知識・技能	4.5	24.0	48.7	20.6	22.3	49.7	22.6	2.0
専門分野に必要とされる力	16.6	38.9	32.3	10.6	28.3	42.2	23.2	3.3
人におもひやりよく接する力	20.2	40.5	24.2	8.6	28.5	43.1	21.7	3.8
仲間との力	25.7	36.6	26.5	9.7	44.0	35.7	15.0	2.5
ものごとを分析的・批判的に考える力	9.2	35.2	42.0	11.9	16.5	45.6	31.0	5.9
問題をかつけ、解決方法を考える力	9.9	37.7	40.5	10.2	18.1	47.0	27.6	4.4
幅広い知識、ものの見方など	7.6	30.4	44.9	15.6	16.6	44.8	30.3	5.3

問9 あなたの大学について次の点でどのくらい満足していますか。

	不満	ある程度不満	ある程度満足	満足
授業外での授業との連絡	12.0	32.8	46.4	7.6
図書館などの学習施設	8.5	17.0	47.4	26.2
実験・実習などのための施設	9.9	24.2	48.6	15.4
就職指導	13.7	32.8	42.5	7.1
学習生活面でのお問い合わせ	12.6	35.3	43.3	4.1
学習以外の大学での活動	11.3	26.0	41.3	19.7
大学性・資金性	7.6	20.0	52.6	18.7

問10 大学在学中の問題として、どのようなことが重要ですか。

	重要でない	少し重要	ある程度重要	重要	最も重要
将来の仕事に活かせる能力を身につける	2.0	6.2	17.1	41.9	31.8
資格取得・分野別知識などに特化する	4.2	12.6	27.2	30.4	20.6
専門分野の知識・理解を深める	1.1	3.8	17.7	46.4	29.9
広い教養、ものの見方を身につける	1.0	3.5	19.0	43.5	31.9
自分の将来の方向性を身につける	1.5	3.0	15.0	39.6	40.7
社会人になるまでの時間的・金的コスト	3.5	9.3	28.1	33.6	24.4
有意義な人間関係を築く	1.5	4.0	19.3	39.3	35.8

問11 大学の授業とあなたの将来についてどう思いますか。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	よくあてはまる
卒業後にやりたいことは決まっている	12.6	27.5	38.1	20.7
大学での授業はやりたいたい・とて重要に思っている	11.5	33.8	39.1	14.6
授業をうけてやりたいことを実現したい	9.2	25.2	45.5	19.1

問4 これまで受けた授業では、次のようなこととどれくらい関係がありますか。またそれは必要ですか。

	経験したか		必要か				
	ほとんど なかった	あまり なかった	よくあ った	必要に ならない			
授業の前半に課題が与えられよう工夫されている	6.7	33.5	54.2	4.6	1.8	37.0	95.7
理解がしやすいように工夫されている	4.5	30.0	58.6	5.7	1.4	26.1	66.8
TAなどによる補助的な指導がある	30.8	32.0	27.8	6.0	17.0	58.3	17.2
出席が重視される	2.2	10.6	49.8	36.5	13.0	55.0	26.0
最終試験の前に小テストやレポートなどの課題が出される	1.6	9.1	52.7	35.5	9.8	47.1	17.2
適切なコメントが付けられて課題などの提出が催促される	34.3	38.3	21.7	4.2	7.5	47.1	39.4
授業中に自分の意見や考えを述べる	25.7	42.2	26.6	4.2	14.9	59.9	19.2
グループワークなど、学生が参加する機会がある	24.2	36.7	30.3	7.3	12.8	58.6	22.5

問5 あなた自身は、授業に対してどのように関心していますか。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	あてはまる
興味がある授業でもきくと出る	5.6	14.4	36.3	43.0
なるべく良い授業をとるようになっている	3.8	17.3	45.0	33.2
グループワークやディスカッションに積極的に参加している	14.5	38.8	34.8	11.1
先生に質問したり、教員の仕事を補助したりしている	26.9	43.5	21.0	5.8
必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる	26.8	43.4	24.4	4.6

問6 大学での学び方について、あなたの考えに近しいものを選んでください。

	A	←Aに近しい	Bに近しい→	B
授業はとり方があらかじめ決まっているものが多い	7.5	20.1	34.9	36.6
授業の進度や必要科目は自分で選出したい	21.0	40.0	26.1	12.1
授業の中で必要なことは自分で選んで欲しい	28.9	44.4	19.2	6.4
自分のレベルにあつた授業をして欲しい	23.4	41.2	26.5	7.8
専門以外のことも広く学びたい	18.1	30.4	29.0	21.3

問7 あなたの授業について考えてください。

(5分間の授業) (単位は時、分、秒、分、秒) (注: 上記の数字は合計で100%を占めています。)

単位	時	分	秒	合計
4.06	3.32	2.29	2.97	2.97



日常生活について

問16 今学期は、大学にはどの程度きていますか。また授業にはどれくらい出席していますか。

学校中、大浴に集まっている日	4.67	8.74
----------------	------	------

問17 典型的な1週間の平均的な生活時間を、学校中と休校中の別で教えてください。

		総合得点	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～30	31 得点以上
学 期 中	授業・実験への出席	2.8	14.2	13.6	12.4	17.3	15.2	9.3	12.1
	授業・実験の理解、準備・復習	12.9	51.2	17.4	7.0	3.3	1.7	0.9	1.7
	授業研究・実験・早読・読者の会	17.4	10.0	4.8	2.9	2.1	1.4	1.0	4.4
	授業とは何なのか学習	38.1	38.9	8.9	4.0	2.0	1.2	0.5	1.6
	サークル・クラブ活動	44.9	24.4	11.8	6.4	3.3	1.7	0.9	2.0
休 暇	アルバイト・仕事	32.1	15.6	14.0	12.7	10.2	5.3	2.4	3.8
	学習	22.4	42.1	13.2	5.7	3.0	1.4	0.7	2.2
	サークル・クラブ活動	47.5	17.7	9.2	5.5	3.8	1.9	1.1	3.3
	アルバイト・仕事	27.0	12.6	13.5	9.8	9.7	6.7	3.9	8.0

図18 大分県大分市大分中央公園の「大分県大分市大分中央公園」の石碑

290	1歳未満	284	1歳	17.0	2歳	83	3歳	155	4歳以上
-----	------	-----	----	------	----	----	----	-----	------

問19 あなたは、どのような企業とよく商売していますか。

	ほとんどない	あまりない	ときどきある	よくある
クラス、学年などの仲間	6.3	6.9	19.7	65.2
サークルなどの仲間	34.7	7.2	17.6	36.6
上級生などの仲間	10.9	12.6	32.9	43.9

問20 あなたの住居は下のどれにあてはまりますか。

SL5 自記	01.6 質問アンケート・アンケート	53 表	11 その他
--------	--------------------	------	--------

問21 1か月の生活費(娯楽料を除く)をどのようにならなっていますか。

調査年から	調査年	アライスト・総年	その他
42.6 万円	2.28 万円	4.17 万円	0.42 万円

問22 複素数 z の z の共役複素数を $\bar{z}$ とする。複素数全体で10個選ばれるように z をお考えください。

Case	Case	Case	Case
1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100



卒業後の進路

問12 本委員の選任についてどのような希望もっていらっしゃいますか。

大学に入学したとき （いつまで）も	現在の希望 （いつまで）も	加算している （一歩だけ）も
90.9	47.8	14.3
民間企業に就職する		
公務員になる	23.3	2.9
教師、医師、弁護士などの専門職につく	29.2	10.3
自営など上記以外の職で就職する	7.5	1.0
大学院などに進学する（海外含む）	26.4	7.6
その他	11.6	2.7
決めていない	12.8	27.8

図13 計算する上で、次の点ほどの留意が必要と思いますが、

	無理ではない	ある程度無理	きつめて無理
どの大学（大学院）を選んだかということ	30.1	57.0	11.7
どの分野を専攻したかということ	14.2	58.2	26.5
個人としての能力	1.1	18.0	79.8

問14 仕事にどのようなことを望みますか。あなたの考えに近いものを選んでください。

	A	B
チームでは仕事をして成果を分かち合う	19.3	36.9
あらかじめ決められたことを厳に守る	9.9	32.9
得意や不得意を隠したがる	6.2	27.4
得意が多くても、キャリアアップできる	6.6	22.7
一つの仕事で専門家になること	20.4	32.5
いろいろな仕事を幅広く経験できること	32.6	13.0

図15 大学を卒業後のキャリアについてどう考えていますか。

	そう思わない	ある程度思う	そう思う
すぐに就職して勤務から正社員・正社員の職員になる	33.9	40.6	43.9
すぐに就職するが正社員・正社員の職員にはつけない	40.7	34.9	35.7
すぐに大学校などに進学する	52.8	28.8	16.9
就職してから大学校への進学を考える	72.0	22.0	4.3
資格試験・検定試験などにおおむねまで就職しない	66.7	23.0	8.8
卒業後すぐには就職しなくてもよい	67.6	24.6	6.2
最終の就職先にてできるだけ長く働く	45.2	45.7	37.6
何年かして就職先を変える	43.3	44.0	11.1
最終の就職した仕事をやめる（女性のみ）	55.6	29.7	8.4



1234567891011121314151617181920212223242526272829303132333435363738394041424344454647484950515253545556575859606162636465666768697071727374757677787980818283848586878889909192939495969798991001011021031041051061071081091101111121131141151161171181191201211221231241251261271281291301311321331341351361371381391401411421431441451461471481491501511521531541551561571581591601611621631641651661671681691701711721731741751761771781791801811821831841851861871881891901911921931941951961971981992002012022032042052062072082092102112122132142152162172182192202212222232242252262272282292302312322332342352362372382392402412422432442452462472482492502512522532542552562572582592602612622632642652662672682692702712722732742752762772782792802812822832842852862872882892902912922932942952962972982993003013023033043053063073083093103113123133143153163173183193203213223233243253263273283293303313323333343353363373383393403413423433443453463473483493503513523533543553563573583593603613623633643653663673683693703713723733743753763773783793803813823833843853863873883893903913923933943953963973983994004014024034044054064074084094104114124134144154164174184194204214224234244254264274284294304314324334344354364374384394404414424434444454464474484494504514524534544554564574584594604614624634644654664674684694704714724734744754764774784794804814824834844854864874884894904914924934944954964974984995005015025035045055065075085095105115125135145155165175185195205215225235245255265275285295305315325335345355365375385395405415425435445455465475485495505515525535545555565575585595605615625635645655665675685695705715725735745755765775785795805815825835845855865875885895905915925935945955965975985996006016026036046056066076086096106116126136146156166176186196206216226236246256266276286296306316326336346356366376386396406416426436446456466476486496506516526536546556566576586596606616626636646656666676686696706716726736746756766776786796806816826836846856866876886896906916926936946956966976986997007017027037047057067077087097107117127137147157167177187197207217227237247257267277287297307317327337347357367377387397407417427437447457467477487497507517527537547557567577587597607617627637647657667677687697707717727737747757767777787797807817827837847857867877887897907917927937947957967977987998008018028038048058068078088098108118128138148158168178188198208218228238248258268278288298308318328338348358368378388398408418428438448458468478488498508518528538548558568578588598608618628638648658668678688698708718728738748758768778788798808818828838848858868878888898908918928938948958968978988999009019029039049059069079089099109119129139149159169179189199209219229239249259269279289299309319329339349359369379389399409419429439449459469479489499509519529539549559569579589599609619629639649659669679689699709719729739749759769779789799809819829839849859869879889899909919929939949959969979989991000100110021003100410051006100710081009101010111012101310141015101610171018101910201021102210231024102510261027102810291030103110321033103410351036103710381039104010411042104310441045104610471048104910501051105210531054105510561057105810591060106110621063106410651066106710681069107010711072107310741075107610771078107910801081108210831084108510861087108810891090109110921093109410951096109710981099110011011102110311041105110611071108110911101111111211131114111511161117111811191120112111221123112411251126112711281129113011311132113311341135113611371138113911401141114211431144114511461147114811491150115111521153115411551156115711581159116011611162116311641165116611671168116911701171117211731174117511761177117811791180118111821183118411851186118711881189119011911192119311941195119611971198119912001201120212031204120512061207120812091210121112121213121412151216121712181219122012211222122312241225122612271228122912301231123212331234123512361237123812391240124112421243124412451246124712481249125012511252125312541255125612571258125912601261126212631264126512661267126812691270127112721273127412751276127712781279128012811282128312841285128612871288128912901291129212931294129512961297129812991300130

問29 あなたは、これまでで次のようなことを感じたり思ったりしたことほどのくらいありますか。

	ほどとない	あまりない	とどきある	よくある
生活に満足がわかない	14.2	34.0	43.6	12.6
友達のことと嫌がある	21.1	34.7	33.6	40
先生のことで嫌がある	38.8	39.5	13.2	49
授業の内容についていていない	15.1	33.9	37.8	11.6
授業に意味・関心がない	9.3	27.3	44.9	16.9
勉強や授業ができるか心配	21.1	23.9	28.6	23.7
学校の科目・学級・大学や学校に入り直したい	39.9	24.4	22.4	11.7
大学を退校したい	57.2	23.7	12.9	46
勉強に意味を感じることが無い	59.7	25.9	10.0	27
まわりの学生がやる気がない	24.1	34.3	28.1	11.8
やりたくないことが見つからない	34.6	27.2	29.7	16.7
勉強の数が思い通りに行かない	41.4	25.8	15.8	8.5

問30 次のような点であなたの所属する大学は成長していると思いますか。また将来の大学にとって重要だと思いますか。

現在の計画	成功して いるか	成功して いない	成功している か	成功して いない	計画では ない	計画では ある程度 進んでいる	計画の 進捗
専門分野の知識を深く修得する	19.5	60.4	17.7	3.5	47.7	44.7	
職業にすぐ役立つ教育をおこなう	38.3	32.5	9.7	7.4	30.6	37.7	
専門の基礎を学ぶ基本知識や 考え方を教習する	14.9	62.9	19.6	2.4	45.8	47.6	
専門にこたえない、幅広い教習 を行う	23.2	59.7	14.5	5.7	56.2	33.9	

問81 あなたが所属する大学の教育について、ご意見を自由に記入してください。

郵送回答の未は、別紙に記入しても結構です

調査項目はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

2007 年 4 月以降にも見える (あるいは置いている) メーカドレス (なるべく露骨でないもの) を購入してください

4-117 H₂S

私どもは中から！年時に置き人の二重をよみたたびは感動したいと思っています。その際はお上に記入していただくとメンバーアドレシに二重をよみたたびは感動したいと思っていますが、二重をいだけますか。

協力する	1
協力しない	2



あなたの経験、ご家族について

問23 中学・高校での経験について、あてはまるものを選んでください。

中学3年生30.0ころの成績	70 下の方	8.2 中の下	10.1 中の上	38.3 上の方
高校1年生40.0ころの進路希望	3.7 制限する	4.3 専門学校	79.5 大学	1.01 考えていないかつた
高校3年生40.0ころの 進路希望の1目的(勉学)	11.9 していない	12.0 1時間程度	27.1 2時間程度	33.9 4時間以上
大学入学準備校	85.9 受けていない	9.7 受けた		

問24 出身高校についてお聞かせします。

訪問者	64.8	公立	29.2	私立	3.0	国公立	1.1	海外
様別	92.7	3年制	14.6	中高一貫				
学科	94.3	普通科	2.3	総合学科	8.3	専門学科	商業・工業 看護、農林科など	2.9

問23 高卒から現在まで継続したことに○をつけてください(○ははい×はいいえ)。

23.4	高卒後、他の専門学校(国専、専門学校、短大、他の大学など)に入学した
3.3	専門学校、アルバイトで働いた
14.4	専門学校、浪人した
2.0	大学入学後、休学した

問23 独立の大学に合格した藤の入学希望と志望校位を尋ねてください。

人財施策	受けた	受けていない
大学等の一般入試（併入試験）	62.1	23.8
センター入試	59.2	24.4
推薦入試	33.6	44.3
編入入学試験	2.6	65.2
定額入試	57.6	17.7
定額入試以外	1.8	94.9

問27 あなたの年齢、性別、出身地について書いてもらいたい。

年齡	21-34 歲	
性別	45.4 女性	52.9 男性
國籍	93.5 日本	2.8 日裔以外

いんばくくふぞくといふことを、新書に於ては、**826** 頁

	進路まで	進学	専門学校・短大	大学	大学院
父親	32.7	3.8	5.4	46.8	5.0
母親	37.6	3.1	27.5	24.9	1.1

第 2 回大学生調査 質問票



東京大学 大学経営・政策研究センター
2018 年 11 月

●この調査は皆さんが大学でどのような生活・学習しておられるのかを明らかにし、日本の大学教育のあり方を考える基礎とするために、皆さんが在学する大学での教育活動にも役立てることを目的としています。

●いただいた回答はすべて厳密に保護され、あなた個人についての情報が他の目的で使われることは決してありません。この調査は全国で 100 の大学で行われています。

●回答は貴学から指定された印刷用紙に提出をお願いします。
この調査は貴学の協力によって、東京大学大学院政策・経営研究センターが「文部科学省科学研究補助金」を得て行うものです。

●全国大学生調査アンケート事務局 電話: 0120-***-*** (フリーダイヤル)

- 回答者から郵送で 100 人に 3 千円の図書カードをお送りします。
- 回答者から郵送で 100 人に 3 千円の図書カードをお送りします。
- 回答者から郵送で 100 人に 3 千円の図書カードをお送りします。



調査についてお読みください

n=32,913

図 1 今年度は 1 週間あたり、何コマ分の授業を履修していますか。

1 週間あたり	10.8	コマ
---------	------	----

図 2 大学に入ってから次のような経験はありますか、または計画していますか。

経験した	経験した		経験して いない
	有期で はない	有期 あり	
＜a＞それ以外の二つを教えてください＞			
a. フレッシュマンセミナー	1.8	8.8	2.7
b. 進路での実習科目を学んだ経験がある科目	2.4	18.1	23.0
c. 大学での勉強の方法（スタディ・スキ）を学んだ経験がある科目	2.4	18.1	23.0
d. 就職や将来のキャリアをテーマとした科目	2.3	12.7	24.1
e. インターンシップ（教育実習や工場実習を含む）	1.2	8.4	14.6
f. 海外での経験	1.8	8.7	14.0
g. 留学（4か月未満）	1.1	2.1	3.7
h. 留学（4か月以上）	1.0	1.8	2.4

図 3 これまで履修した授業の形態について、全体が 10 単位になるようお答えください。

講義 (100 人以上)	講義 (50 人以上 100 人未満)	演習・ゼミ (50 人未満)	実験・実習
2.47 割	2.89 割	1.04 割	1.12 割

図 4 これまで履修した授業では、次のようなことがどれくらいありますか、またはありませんか。

経験したか	経験したか		経験して いない
	ほとんど なかった	ある程度 あった	
＜a＞それ以外の二つを教えてください＞			
a. 授業内容が面白く、よく学べている	3.9	25.9	69.9
b. 授業内容が難しい、よく学べていない	2.6	18.6	78.6
c. TA などによる補助的な授業がある	18.9	31.6	49.6
d. 授業が難しい	2.7	13.0	84.0
e. 授業内容が面白く、よく学べている	1.2	7.2	91.6
f. 授業内容が難しい、よく学べていない	25.9	28.9	45.9
g. 授業内容が面白く、よく学べている	14.2	28.4	57.0
h. グループワークなど、学生が参加する機会がある	7.8	28.6	63.6
i. 予習・復習が必要とされている	14.6	27.6	57.6

図 5 あなたの成績について教えてください。

(a) 成績評価の方法（例：試験、レポート、発表、など）は、上記のものを組み合わせて行う場合があります。その場合は、必ず教えてください。

科目	単位	成績	GPA
4.47 割	2.88 割	2.18 割	2.18 割

図 6 3 年生以上の科目に履修していますか。（1 年生と 2 年生は次のページに進んでください）

6-1 本学で履修した科目はありますか、または履修していますか。

78.2 割	8.0 割	14.8 割
--------	-------	--------

6-2 あなたはゼミ・研究室に所属していますか。

78.3 割	23.8 割	所屬していない
--------	--------	---------

「1 所属している」を詳しく教えてください。
8-3 所属している理由（1 項目まで）
何もないです。

23.4 割	2.4 割	2.4 割
--------	-------	-------

2.3 割	6.1 割	42.4 割
-------	-------	--------

図 7 これまで履修した授業の形態について、全体が 10 単位になるようお答えください。

2.3 割	6.1 割	42.4 割
-------	-------	--------



日常生活についてうかがいます

図11 学期中の、1週間の生活時間を教えてください。

	0時間	1-2 時間	3-5 時間	6-10 時間	11-15 時間	16-20 時間	21-25 時間	26時間以上
学 校								
a. 授業・実験への出席	4.1	6.3	12.1	12.2	18.9	18.0	13.8	14.2
b. 授業・実験の準備、準備・後片付け	12.6	20.2	26.9	6.1	2.4	1.1	2.2	
c. 卒業研究・実験・実習 (道内のみ)	28.6	6.6	6.6	4.0	2.2	1.6	1.1	4.4
d. 卒業研究・実験・実習 (道外のみ)	28.8	24.6	16.8	6.9	2.8	1.4	0.7	1.6
e. サービス・クラブ活動	44.6	14.6	11.2	6.6	2.7	1.1	2.3	
f. アルバイト・仕事	20.7	4.6	12.2	18.4	17.1	13.9	6.6	6.9

図12 あなたは本(マンガを除く)を1ヶ月に何冊くらい読みますか。(電子書籍を含む)

47.2	読まない	26.2	一番	11.9	二番	6.6	三番	6.6	四番以上
------	------	------	----	------	----	-----	----	-----	------

図13 あなたの住居は下のどれにあてはまりますか。

44.6	戸建	47.6	賃貸アパート・マンション	6.7	借	0.6	その他
------	----	------	--------------	-----	---	-----	-----

図14 1ヶ月の生活費(食料料を除く)をどのように使っていますか。

家族から	奨学金	アルバイト・勤労	その他
2.4万円	2.4万円	4.6万円	0.4万円

図15 あなたはこれまでに次のようなことを感じたり思ったりしたことほどありますか。

	ほとんどない	あまりない	ときどきある	よくある
a. 生活・勉強がむずかしい	14.6	28.6	40.6	16.6
b. 授業の内容についていていない	13.9	34.4	41.1	10.7
c. 他の学科・学部・大学や学校に入り直したい	34.1	27.8	24.0	13.6
d. 経済的に家族を養育することが難しい	36.6	30.9	9.9	2.4
e. 周囲の学生に尊敬されない	13.6	38.6	30.9	16.9
f. 思い通りの就職ができるが不安	10.6	17.7	37.8	33.7

図16 授業に対してどのように取り組んでいますか。

	あてはまらない	あまりあてはまらない	あてはまる
a. グループワークやディスカッションに積極的に参加している	12.6	23.6	63.2
b. 必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる	13.6	41.4	45.0
c. 先生に質問したり、教員の力を頼んだりしている	26.4	46.6	27.0



大学教育への評価をうかがいます

図7 大学の授業とあなたの関係についてどう思いますか。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	あてはまる	よくあてはまる
a. 卒業までにやりがいを感じている	10.4	23.4	46.2	20.0
b. 大学の授業はやりがいを感じている	6.9	28.0	42.4	22.7
c. 授業を通じて学びたいことを見つけたい	7.2	21.4	46.7	24.7

図8 次の点で大学の授業は、どのくらい満足していると思いますか。また自分の実力はどのくらいあると思いますか。

	これまでに授業は満足している	自分の実力は
a. 授業の内容に満足している	6.6 - 31.6 - 46.4 - 16.0	16.9 - 32.1 - 33.0 - 1.9
b. 専門知識の習得	6.1 - 16.0 - 46.7 - 31.2	17.4 - 33.9 - 33.9 - 1.1
c. 知識に活用できる	7.6 - 32.2 - 46.9 - 14.6	16.6 - 47.1 - 36.8 - 2.2
d. 外国語の力	16.2 - 37.0 - 31.6 - 15.1	14.9 - 46.1 - 17.2 - 2.7
e. ものごとを分析・批判的に考える力	4.6 - 27.2 - 48.0 - 19.9	12.6 - 46.0 - 33.4 - 4.9
f. 幅広い知識、ものの見方	4.1 - 23.9 - 41.6 - 30.1	12.1 - 46.2 - 33.6 - 6.0

図9 あなたの大学について次の点でどのくらい満足していますか。

	不満	ある程度不満	満足
a. 授業内容	4.9	22.1	66.0
b. 授業での教員との接触	6.9	27.0	66.1
c. 図書館などの学習施設	4.9	14.1	81.0
d. PCなどの情報設備、サポート	6.6	16.0	77.4
e. 就職支援	7.3	26.6	66.1
f. 学習・その他のサポート	6.7	27.7	65.6
g. 大学経済状況	6.1	18.4	75.5

図10 大卒に入学するまでの経路について。

	受けた	受けていない
a. 大学への一般入試 (学芸学部)	66.9	33.1
b. センター試験	71.2	28.8
c. 推薦入試・AO入試	27.2	72.8
d. 編入試験	2.1	97.9
e. その他	2.1	97.9
f. 大学への一般入試 (学芸学部)	66.9	33.1
g. センター試験	71.2	28.8
h. 推薦入試・AO入試	27.2	72.8
i. 編入試験	2.1	97.9
j. その他	2.1	97.9

図 17 あなたが所属する大学の教育について、ご意見を自由に記入してください。

自由に記入しても結構です

■あなたの所属と学年

大学名	大学				
学部名	学部				
現在の学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生以上	
	24.1	24.4	24.9	25.0	25.4
性別	男性 24.6 女性 24.4				

調査項目はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

2019 年 4 月以降にも使えるメールアドレス (なるべく携帯でないもの) を記入してください。

これは商品を送付するためのものです。記入しなくてはならない場合は、欄外にお書き頂く必要はありません。

メールアドレス

第1回と第2回結果の比較 — 総括表

第2回				第2回 — 第1回			
問2 大学にはいったからの経験							
		経験した		経験した			
Q2_a	a.フレッシュマン・セミナー	32.4		6.3			
Q2_b	b.高校での未修科目を学ぶための補修的な科目	51.4		18.3			
Q2_c	c.大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ	58.5		15.1			
Q2_d	d.就職や将来のキャリアをテーマとした科目	70.8		16.3			
Q2_e	e.インターシップ(教育実習や工場実習を含む)	40.6		15.4			
Q2_f	f.他学部での聴講	31.3		5.9			
留学	g+h	21.6		9.9			
Q2_g	g.留学(4か月未満)	12.4					
Q2_h	h.留学(4か月以上)	9.2					
		有用でない	どちらともいえない	有用	非常に有用	有用でない	どちらともいえない
Q2_a	a.フレッシュマン・セミナー	7.0	34.9	45.8	12.2	1.0	3.8
Q2_b	b.高校での未修科目を学ぶための補修的な科目	5.4	30.0	52.4	12.3	-1.4	-3.5
Q2_c	c.大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ	4.5	29.3	53.0	13.2	0.1	-0.8
Q2_d	d.就職や将来のキャリアをテーマとした科目	3.5	19.2	54.6	22.7	0.7	-0.6
Q2_e	e.インターシップ(教育実習や工場実習を含む)	3.4	15.9	44.8	35.9	-0.3	-1.0
Q2_f	f.他学部での聴講	7.0	30.9	45.4	16.7	0.6	1.5
Q2_g	g+h	13.8	24.2	29.5	32.5	4.3	1.6
Q2_g	g.留学(4か月未満)	12.6	22.4	31.5	33.5		
Q2_h	h.留学(4か月以上)	15.4	26.7	26.9	31.1		
問3. これまで受けた授業の形態①講義							
		数値(割)		数値(割)			
Q3_1	(100人以上)	2.44		0.10			
Q3_2	②講義(50人以上100人未満)	2.65		-0.15			
Q3_3	③講義(50人未満)	2.72		-0.31			
Q3_4	④演習・ゼミ	1.14		-0.30			
Q3_5	⑤実験・実習	1.06		-0.04			
問4. 授業で経験したこと							
		ほとんどなかった	あまりなかった	ある程度あった	よくあった	ほとんどなかった	あまりなかった
1 Q4_1_a	a.授業内容に興味がわくよう工夫されている	4.0	24.8	62.0	9.1	-2.8	-8.2
Q4_1_b	b.理解がしやすいように工夫されている	2.6	19.9	66.3	11.1	-2.0	-10.0
Q4_1_c	c.TAなどによる補助的な指導がある	23.3	33.6	34.0	9.1	-9.5	0.4
Q4_1_d	d.出席が重視される	2.8	12.9	49.0	35.4	0.8	3.6
Q4_1_e	e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題がある	1.2	7.1	49.5	42.2	-0.5	-2.3
Q4_1_f	f.適切なコメントが付されて課題などの提出物が返る	25.6	38.2	28.9	7.3	-7.9	0.2
Q4_1_g	g.授業中に自分の意見や考えを述べる	14.2	39.1	38.3	8.4	-11.5	-2.5
Q4_1_h	h.グループワークなど、学生が参加する機会がある	7.5	29.3	48.8	14.4	-17.0	-7.2
Q4_1_i	i.予習・復習が必ず必要とされている						
問4. 授業で経験したことは必要か							
		必要ではない	ある程度必要	非常に必要		必要ではない	ある程度必要
Q4_2_a	a.授業内容に興味がわくよう工夫されている	1.5	41.2	57.3		-0.3	1.3
Q4_2_b	b.理解がしやすいように工夫されている	1.3	32.2	66.5		-0.3	3.9
Q4_2_c	c.TAなどによる補助的な指導がある	17.4	61.8	20.8		0.2	-1.3
Q4_2_d	d.出席が重視される	16.4	57.7	25.9		4.0	1.0
Q4_2_e	e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題がある	10.1	67.0	22.9		-0.9	-3.6
Q4_2_f	f.適切なコメントが付されて課題などの提出物が返る	11.1	55.1	33.8		2.8	4.7
Q4_2_g	g.授業中に自分の意見や考えを述べる	15.3	62.6	22.1		-1.6	-0.4
Q4_2_h	h.グループワークなど、学生が参加する機会がある	11.0	62.1	26.9		-3.4	0.0
Q4_2_i	i.予習・復習が必ず必要とされている						

(続き)

問7. 大学の授業とあなたとの関係										
			全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	よくあてはまる	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	よくあてはまる
2	Q7_a	a.卒業後にやりたいことは決まっている	11.0	26.3	40.8	21.9	-2.3	-1.2	2.8	0.7
	Q7_b	b.大学での授業はやりたいことに密接にかかわる	9.4	29.9	43.0	17.6	-2.2	-3.8	3.6	2.4
	Q7_c	c.授業を通じてやりたいことを見つけたい	7.8	22.2	47.0	23.1	-1.5	-3.0	1.0	3.5
問8. 大学の授業はどのくらい役立っているか										
			役立っていない	あまり役立っていない	ある程度役立っている	役立っている	役立っていない	あまり役立っていない	ある程度役立っている	役立っている
	Q8_1_a	a.将来の職業に関連する知識や技能	5.4	21.5	48.2	24.9	-3.3	-7.8	4.6	6.5
	Q8_1_b	b.専門分野の知識・理解	3.4	17.5	50.2	28.9	-1.4	-7.4	0.1	8.7
	Q8_1_c	c.論理的に文章を書く力	7.1	31.5	45.6	15.7	-7.8	-7.8	11.4	4.2
	Q8_1_d	d.外国語の力	19.1	36.4	32.4	12.1	-7.0	-0.1	5.5	1.5
	Q8_1_e	e.ものごとを分析的・批判的に考える力	4.7	27.6	51.4	16.3	-4.5	-8.8	8.8	4.5
	Q8_1_f	f.幅広い知識、もののみかた	4.1	22.6	52.7	20.6	-3.6	-8.6	7.5	4.7
問8. 自分の実力										
			不十分	あまり十分でない	ある程度十分	十分	不十分	あまり十分でない	ある程度十分	十分
	Q8_2_a	a.将来の職業に関連する知識や技能	18.4	54.3	25.3	2.0	-10.3	1.1	8.6	0.6
	Q8_2_b	b.専門分野の知識・理解	17.0	53.2	27.5	2.3	-7.3	-0.3	6.9	0.8
	Q8_2_c	c.論理的に文章を書く力	20.0	49.2	27.5	3.3	-9.1	5.6	3.7	-0.2
	Q8_2_d	d.外国語の力	36.6	42.5	18.2	2.7	-9.2	6.0	3.0	0.2
	Q8_2_e	e.ものごとを分析的・批判的に考える力	12.9	46.6	35.2	5.3	-4.3	1.3	3.8	-0.8
	Q8_2_f	f.幅広い知識、もののみかた	12.2	46.1	36.0	5.7	-4.7	0.0	4.9	-0.2
問9. 大学についてどのくらい満足しているか										
			不満	ある程度不満	ある程度満足	満足	不満	ある程度不満	ある程度満足	満足
	Q9_b	b.授業外での教員との接触	6.0	26.5	57.5	10.0	-5.6	-5.4	9.2	1.8
	Q9_c	c.図書館などの学習施設	4.8	14.8	54.0	26.5	-3.6	-1.8	6.3	-0.9
	Q9_d	d.PCなどの情報環境、サポート	6.3	17.9	52.1	23.7	-4.2	-6.7	3.2	7.7
	Q9_e	e.就職指導	7.1	27.4	55.0	10.6	-5.0	-4.1	7.7	1.4
	Q9_f	f.学習・その他のサポート	6.0	27.7	57.3	9.1	-6.1	-7.2	11.2	2.1
	Q9_g	g.大学生活全般	6.1	20.4	57.8	15.6	-2.6	-0.9	5.9	-2.4
問10-1. 大学に入学するまでの経緯(入試形態)										
			受けた	受けていない			受けた	受けていない		
	Q10_1_a (入試形態)a.大学個別の一般入試		55.9	44.1			-8.0	8.0		
	Q10_1_b (入試形態)b. センター試験		60.3	39.7			2.9	-2.9		
	Q10_1_c (入試形態)c.推薦入試・AO入試		50.2	49.8			-2.9	2.9		
	Q10_1_d (入試形態)d.編入学試験		2.5	97.5			-1.3	1.3		
問10-3 (高校3年生のころの家の勉強時間)										
			していない	1時間程度	2時間程度	3時間以上	していない	1時間程度	2時間程度	3時間以上
			16.2	17.8	21.0	45.0	0.3	3.2	2.4	-5.9
問12 本を何冊よむか										
			読まない	1冊	2冊	3冊	読まない	1冊	2冊	3冊
	Q12	問12. 本を(マンガを除く)を一ヶ月に何冊くらい読むか	49.5	25.5	11.7	5.3	17.7	-3.8	-5.0	-2.6
問15. これまでに感じ取ったり思ったこと										
			ほとんどない	あまりない	ときどきある	よくある	ほとんどない	あまりない	ときどきある	よくある
	Q15_a	a.生活に熱意がわかない	14.8	30.8	40.3	14.0	0.3	2.0	-3.3	1.0
	Q15_b	b.授業の内容についていっていない	12.8	35.8	41.3	10.1	-2.6	1.4	2.9	-1.8
	Q15_c	c.他の学科・学部・大学や学校に入り直したい	31.9	28.0	25.6	14.5	-7.4	3.3	2.5	1.6
	Q15_d	d.経済的に勉強を続けることが難しい	50.9	34.3	11.8	3.0	-6.1	5.9	0.4	-0.2

附 B 教員調査の概要

サンプルの設置者別の構成とそれによる補正

第 1 回調査サンプル

	回答者		母集団（2008 年）		抽出率 (%)	補正係数
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)		
国立	1,862	35.4	64,094	34.1	2.91	0.96306
公立	442	8.4	14,083	7.5	3.14	0.89143
私立	2,952	56.2	109,685	58.4	2.69	1.03955
計	5,256	100.0	187,862	100.0	2.80	

母集団の出所：学校基本調査 2008（H20）高等教育表 4 学部学生数

第 2 回調査サンプル

	回答者		母集団（2018 年）		抽出率 (%)	補正係数
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)		
国立	1,766	62.4	61,689	35.4	2.86	0.56663
公立	278	9.8	12,646	7.3	2.20	0.73788
私立	785	27.7	100,068	57.4	0.78	2.06778
計	2,829	100.0	174,403	100.0	1.62	

母集団の出所：学校基本調査 2018（H30）高等教育表 6 学部学生数

第 1 回教員調査質問票



大学教育の現状と将来 —全国大学教員調査

大学経営・政策研究センター (東京大学 大学政策研究センター)
http://um.p.u-tokyo.ac.jp/orap/
2010 年 2 月

- この調査は、大学で教鞭をとっていらっしゃる先生方が、大学教育にどう関わり、どのような考えをもっておられるのか明らかにし、日本の大学教育のあり方を考える基礎とすることを目的としています。
- 調査は 2 月 26 日までにご来返ください。いただいた回答はすべて機密的に扱われ、個人にわたる情報や他の目的で使われることはありません。集計結果は 2010 年 5 月ごろに簡易ウェブサイトに掲載する予定です。
- この調査は、大学経営・政策研究センター (東京大学大学院教育学研究科) が「文部科学省科学研究費補助金 学術研究助成」を得て行うものです。調査の実施にあたっては、社団法人 全国大学教員調査会に委託しています。お問い合わせは下記までお願いします。

フリーダイヤル 0120-279-839 担当 吉村由、田ノ本 平日 1000-1800

図 1. 先生のご担当の専門分野は主に下のどれに区分されますか。(〇は 1 つ)

15.0 人文学	4.1 経済学	11.9 農・食	8.3 建築・工学
4.1 文学・言語学	3.9 法学	6.1 経済・経営学	3.6 医学
7.8 経済学・経営学	13.3 工学	4.1 経営学	0.9 その他(下記に入らない)
5.5 社会・心理	3.6 生物	1.5 生活科学	
4.6 物理学	4.4 化学		

図 2. 先生が 1 学級に担当するコマ(1 科 90 分程度、15 回の数にのぞいて)ですが、

該当するところに記入ください

	講 義				実務・実習	論文・研究指導
	(100 人級)	(50 人以上 100 人未満)	(50 人未満)	演習・ゼミ		
一般教養科目	1.9	1.3	3.5	3.3	3.5	1.9
専門科目	3.1	3.6	3.6	3.0	4.3	3.6
大学院	3.1	3.3	1.9	3.3	3.3	3.3

先生が担当されている代表的な授業についてお聞きます

(せよ、論文指導、実習を簡述します。なるべく学級についてお答えください。)

図 1. その授業は下のどれにおてはありますか。代表的な授業 1 つについてお答えください。(〇は 1 つずつ)

対象	4.3 学部1、2年	4.4 学部3、4年次	3.5 大学院	1.0 専門職大学院
内容	4.3 前期	4.6 後期	3.1 その他(学部3、4年次)	7.7 その他
学生数	4.1 10人以下	3.3 10-49人	3.3 50-99人	3.3 100-149人
				3.3 150人以上

図 1. 授業の力をどのお点におておられますか。(〇は 1 つずつ)

	非常に重要	重要	重要ではない
最先端の研究成果にふれさせる	11.3	54.3	34.1
授業に専門の基礎を教える	73.9	23.6	1.6
特定の知識・技能を習得させる	37.5	49.9	31.9
自然・社会との関わりから専門の意義を教える	20.9	55.9	13.7
学生の成長にきつかけを教える	43.6	48.1	7.0

図 1. 授業の方法として、以下のことを行っておられますか。またそれは有効・必要ですか。(〇は 1 つずつ)

	行っている		行っていない		有効・必要	
	ある程度	行っていない	ある程度	行っていない	ある程度	行っていない
達成目標を明確にする	41.1	54.5	3.5	25.1	66.1	3.5
授業内容に興味をわくような工夫	64.4	34.3	0.5	45.5	45.4	1.5
TA などによる補助的な指導	5.4	13.5	73.3	9.7	41.6	50.6
出書をとる	50.5	31.5	16.5	25.5	31.7	17.1
最新知識の紹介・小テストやレポートなどの課題を出す	45.9	37.9	14.3	26.5	46.9	6.1
コメントをつけて課題などの提出物を返却する	31.9	36.5	40.3	25.1	31.3	13.6
授業中に学生の意見や考えを述べさせる	23.5	40.5	26.5	25.7	35.4	10.5
グループワークなど、学生が参加する機会をつくる	17.5	25.5	54.3	44.5	31.3	11.3



大学教育の現在と改善の方向についてうかがいます

問 13. より良い授業にするためどのような条件が必要ですか。(○は1つずつ)

与えられた条件	重要	重要ではない
TA、技術者など補助人員	14.9	41.6
IT 機器や設備の改善	19.7	53.3
授業前など学生が自主的に学習する環境	26.4	52.8
小規模のクラスにする	48.0	48.9
担当授業数を少なくして、時間をかける	59.1	48.6
授業についての教員間の情報・意見交換	55.0	59.9

他の点があればご記入ください

問 14. 学部・学科として以下のようなことをおこなっていますか。またそれは有効と思われるか。(○は1つずつ)

	実施している している	実施していない しない	検討中 検討中	検討中 検討中
学生による授業評価	97.3	3.5	10.1	96.6
成績評価の配分について、基準を設ける	99.6	99.4	7.1	98.6
成績評価者（教員）について制置をおこなう	94.9	94.4	18.6	95.5

問 15. カリキュラム上で、以下の様なことを実施しておられますか。またそれは有効と思われるか。(○は1つずつ)

	実施している している	実施していない しない	検討中 検討中	検討中 検討中
授業科目の開設順序、履修モデルの作成	77.1	21.6	19.9	94.6
一定のテーマについてのオムニバス講義	64.4	59.9	10.1	99.8
補習（レメディアル）教育	56.9	62.9	13.7	96.7
インターンシップ（教育実習や工場実習を含む）	67.9	81.6	29.4	48.1
学外での授業をとられる	53.6	45.6	27.7	49.6

問 6. 出席している学生の意識などの程度ですか。(○は1つずつ)

	十分	不十分	十分でない
学習時間	26.4	55.4	18.9
授業への積極的参加	40.9	51.9	5.6

問 7. 出席している学生の学力の面などの程度ですか。(○は1つずつ)

	十分	不十分	十分でない
国語の読み書き	19.9	26.9	46.9
英語	49.3	5.1	21.9
数学	46.0	9.3	21.4
高校程度の物理、化学、生物、 地学の基礎理解	41.3	13.7	22.3
専門分野の基礎的理解	7.0	23.6	60.6

問 8. 授業の進捗速度として、下のような点についてどのように考えられますか。(○は1つずつ)

	大進捗速度	適速	遅速
授業中の情報提供・私語	21.9	52.9	24.0
問題意識	19.6	52.9	44.4
アルバイト	14.3	59.6	44.7

問 9. 授業の準備・復習として、学生がどの程度授業を使うことを想定しておられますか。(○は1つ)

	想定する 学習時間	1時間	2時間	3時間	4時間	5時間以上
	13.9	43.9	24.9	7.9	3.1	4.6

問 10. 通常の授業では、最終的に試験をする学生の何割が出席していますか

出席	8.9
----	-----

問 11. 授業中でいる学生の何割が内容を理解することを目標としておられますか。また実際にどの程度の割合が十分に理解できていると考えられますか。

学生の理解 目標	実際
8.9	6.1

問 12. 成績などのような配分で与えておられますか。

優(○)	良(○)	可(○)	不可(○)
2.9	3.7	3.6	1.3



ご所属の大学と先生ご自身について

問 16. FDとして下の様なものを経験されていますか、またそれは有効と思われるですか。(○は1つずつ)

	経験したか		有効か	
	経験して いる	経験して いない	ある程度 有効	有効で はない
外語からの講師による講演	88.4	11.6	17.8	82.2
授業の相互参観	48.0	52.0	11.9	88.1
教員間の助産、研修・研究会	70.6	29.4	21.9	78.1

問 17. 大学として下の様なことを行っていますか、またそれは有効と思われるですか。(○は1つずつ)

	実施しているか		有効か	
	実施して いる	実施して いない	ある程度 有効	有効で はない
新入生のための科目、新入生セミナー	91.4	8.6	88.1	11.9
教員や将来のキャリアをテーマとした科目	71.9	28.1	38.5	61.5
専門スタッフによる学習相談	80.8	19.2	19.8	80.2
短期学生での教員研修の提供	68.7	31.3	16.6	83.4
文科系の大学教育 IP、大学院教育 IP	88.7	11.3	13.1	86.9

問 18. ご所属の大学を以下の点で、どの様に評価されますか。(○は1つずつ)

	非常に よい	よい	普通	悪い	非常に 悪い
学生が授業の準備・学習をするための場所・施設	11.4	48.7	38.0	2.9	0.0
実験・実習などのための施設	9.9	46.9	38.5	6.6	0.0
学生のカウンセリング	7.3	54.9	31.6	4.9	0.0

問 19. ご所属の大学全体の課題についてどの様に考えられますか。(○は1つずつ)

	解決で 特に問題ない	ある程度 重要な課題	極めて 重要な課題
入学率の確保	38.1	36.9	25.0
財務状況の改善	21.8	48.6	29.6
教育改善	9.4	87.0	3.7
学生の国際化	38.8	44.8	16.4
研究水準の高度化	30.8	40.8	28.4
地域社会への貢献	30.8	44.4	24.8
国際化	18.8	54.8	26.4

問 16. 大学教育改善をサポートするのXに、どのようなことが有効ですか。(○は1つずつ)

	非常に有効	有効	有効ではない
学食・学生会館などで、専門領域別に、卒業までに獲得するべき知識や技能の体系的な目標を設定する	18.6	81.8	0.0
専門領域別に、体系的な達成度テストを作る	14.8	85.1	0.0
大学が連携して学生の学習状況を調査して、比較分析し、教員にフィードバックする	14.1	85.7	0.0

問 17. 大学教育の改善の方向として、次のようなことを行われますか、また結果の方向として重要ですか。(○は1つずつ)

	行っているか		将来の方向	
	実施して いる	実施して いない	実施して いる	実施して いない
修得するべき知識を標準化し、それに応じてカリキュラムを体系化する	18.7	81.3	24.4	75.6
海外2国の授業などを通じて、学生が様々な授業科目に集中できるようにする	8.4	91.6	13.4	86.6
少人数の授業を増やすよりも、授業内容、教材などを標準化し、TAなどを積極的に用いる	2.5	97.5	6.5	93.5
コミュニケーション能力など、授業で獲得するべき基礎能力を明確にする	31.8	68.2	34.7	65.3
研究度、ゼミなどを通じて、教員や学生間の接触を強化する	28.1	71.9	6.4	93.6

問 18. 大学院の教育についてどの様にお考えですか。(○は1つずつ)

	強く そう思う	そう 思う	そう 思う	強く そう思う
● 優秀な学生が大学院に来なくなっている	38.4	48.3	38.0	15.3
● 博士課程の定員は過剰すぎる	30.8	38.6	38.3	12.3
● 大学院での体系的なコースワークを強化すべきだ	11.1	48.4	31.8	9.5
● 修士論文は過剰なエネルギーが消費されている	8.7	18.4	58.4	14.5
● 職業人を対象とした大学院教育の方法・内容はまだまだ不十分だ	18.8	58.8	18.4	15.0



	強く そう思う	そう思う	そう思 わない	全く 思わない
● 自分の経験した学校教育より、現在のほうが良いと思っている	33.0	59.4	86.9	31.4
● 理によっても意味がある教育として大学教育の理念を考え直すべきだ	33.9	49.0	80.3	4.8
● 授業料が高くなっても、高質の教育を行うべきだ	30.4	57.3	43.6	6.6
● 就職出資の尊重など、企業にも責任を課たさるべきだ	56.4	47.1	33.3	1.9
● 大学と一般社会の距離をギャップが広がっている	34.3	44.4	55.4	1.9

要紙に印字して、開封して見たらどうも結構です。

[illegible]

調査項目はこれで終わります。ご協力ありがとうございました。

Category	Score	Grade
Mathematics	88.5	A
Science	84	A-
History	86.5	B+

大学男性別の比較をするために用います。先生の個人情報にアクセスすることは全くありません。

また、閣下は大学の成績を提出して分析結果を保護することは求めません。

大学

	強く ぞうぶつ	ややぶつ	ぞうぶつ ない	ぞうぶつ ある
● 本学全体としての教育改善についてのとりくみを強にするべきだ	20.3	60.1	19.8	1.9
● 教員の専門性を高め、教員は教育、研究に専念するべきだ	41.7	48.8	19.8	1.8
● 学長の選任に、教員は投票で参加すべきだ	49.8	49.8	10.8	1.7

教育	研究	社会福祉	管理運営
17.9 億円	34.9 億円	4.4 億円	9.3 億円

年齢	7.5	37.9	80.6	97.9
	20 - 30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上
性別	18.5	82.8	男性	
出身地	97.5	日本	1.6	日本以外

大学教員(講師以上)になった人数	76.6 20・30歳代	17.2 40歳代	6.3 50歳代	1.3 60歳以上
大学以外での 教員経験	48.0 なし	13.0 小学校	17.6 高校、専門学校	18.6 企業・銀行
教員になるまでの 学習経験	72.5 なし	24.6 あり		

第 2 回教員調査質問票



大学教育の現状と将来

— 全国大学教員調査 —

大学調査・調査研究センター（東京大学 大学教員調査研究センター）
http://ump.dai-kyo.ac.jp/cnump/
2019 年 11 月

10分ほど記入でも構いません。最終で回答ください。貴学の学生についての調査（昨年度）と比較してみれば、手頃で済み差し支えています。

- この調査は、大学で授業をとおられる教員が、大学教員としてご回答、どのようなお答えをしておられるのかを明らかにし、日本の大学教育のあり方を考える基礎とすることを目的としています。
- 調査は12月13日（金）までに回答はすべて最終的に集約され、個人についての集約内容の送付が完了いたします。（13日は締め切っております。）
- 集約結果は2020年5月までに調査のウェブサイトにて掲載する予定です。
- この調査は、大学教員・政策研究センター（東京大学大学院教育学研究科）が『文部科学省科学研究費補助金』を助成で行っております。

「全国大学教員調査」アンケート事務局
電話：〇〇〇〇〇〇〇〇

問1. 先生のご担当の専攻分野は下のどれに区分されますか。(〇は1つ)

2.0 人文科学	6.0 初級科学	11.0 医学・歯学	16.0 芸術・体育
2.1 法学・政治学	7.0 工学	12.0 理学・農学	17.0 その他
4.1 経済学・経営学	14.0 工学	2.2 建築・造園	
3.0 社会学・心理学	5.1 生物	1.0 生物・化学	
4.7 教育	5.1 教育		

問2. 先生が今学期に担当されている授業のコマ（1コマ 90 分程度）数はどれくらいですか。

該当するところにご記入ください。

コマ数	所属大学の学部					他大学での授業
	経済学 (HOD 入試)	工学 (HOD 入試)	理学・工学 ・農学	医学・歯学 ・薬学	芸術・体育 ・その他	
	平均 4.8	平均 5.5	平均 5.5	平均 5.0	平均 10.0	平均 2.0
学期別	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0

貴学は何学期ですか。該当するところには〇をつけてください。(〇は1つ)

1学期	2.0	3.0	4.0	5.0	6.0
-----	-----	-----	-----	-----	-----



先生が担当されている授業についてお聞きします。
(学部での代表的な授業についてお答えください)
※ 3. 部外授業、実習等を除く

問3. 1回の授業の準備・復習として、学習が平均何時間を要すると思われていますか。(〇は1つ)

要する 学習時間	1時間	2時間	3時間以上
	28.4	42.1	18.2

問4. 出席している学生について、どのように評価されますか。(〇は1つずつ)

<〇〇〇それぞれ欄にお書きください>

	十分	五分	五分以下
a. 学習時間	28.6	40.6	10.9
b. 授業への積極的参加	45.2	47.5	6.4
c. 課題学力	48.4	47.6	7.2

問5. 授業の方法はどのような点においておられますか。(〇は1つずつ)

	非常に 重要	重要	重要 ではない
a. 最先端の授業法を取り入れる	12.8	57.6	29.3
b. 授業に学生の参加を促す	70.4	28.7	1.5
c. 特定の知識・技能を習得させる	28.0	64.6	18.6
d. 自然、社会との関わりから学習の意義を伝える	51.1	57.9	9.4
e. 学生の成長に必要な力を伝える	47.2	47.6	5.8

問6. 授業の方法として、以下のことを行っておられますか。またそれは有効ですか。(〇は1つずつ)

	行っている		有効か	
	実施 している	実施 していない	有効 である	有効 ではない
a. コーカスやグループワークなどを用いて授業を行う	28.4	57.2	4.7	22.0
b. 授業中に発表やグループワークなどを用いて授業を行う	55.7	41.3	1.1	28.6
c. ITなどによる授業の支援	7.1	54.6	68.6	10.7
d. 出席をとる	42.3	28.6	18.2	23.6
e. 最新の技術の活用や最新のソフトウェアなどを用いて授業を行う	48.3	28.7	18.4	22.6
f. コメントをつけて授業などの進捗を確認する	18.9	28.6	41.9	22.4
g. 授業中に学生の意見を聞き取りを促す	28.8	48.9	27.6	28.5
h. グループワークなど、学生が参加する機会をつくる	28.9	52.3	42.6	27.0



大学教育と大学のあり方についてうかがいます

問12, 大学教育のありかたに、次の題意ほどの程度、影響を与えてきたと考えられますか。(○は「ずっと」)

<○はい それぞれ欄にお答えください>

	大卒の活躍	ある程度	影響は高い
a 19歳入力の減少	61.9	31.6	6.0
b 社会全体の圧力	48.8	44.6	7.4
c 高等教育政策	56.2	39.9	4.2
d 大学としての方針	48.4	51.0	6.0
e 教員の意識変化	22.9	66.6	11.2
f 学生の変化	60.4	42.7	6.9

問13, 大学教育の改善について、以下のような意見についてどう考えられますか。(○は「ずっと」)

	強く そう思う	そう 思う	そう 思う	全く そう 思わない
<○はい それぞれ欄にお答えください>				
a 自分の経験した学校教育より、現在のほうが良くなっている	13.5	41.3	32.3	12.1
b 進んでいっても意味がある教育として大学教育の地位を考えるとすべきだ	8.6	39.9	41.1	10.0
c 授業料が高くなっても、最新の教育を行うべきだ	12.9	39.9	39.4	9.3
d 大学と一般社会の距離が広がっている	17.9	41.1	39.9	1.4
e 学生自身は教育プログラムとして、適度目標を明確にし、教員は所属領域を超えて授業を担当できるようにする	8.6	46.6	39.6	5.0
f 教育と研究の両立は難しい	24.4	37.2	32.5	6.9

問14, 大学の管理運営についてどう考えられますか。(○は「ずっと」)

	強く そう思う	そう 思う	そう 思う	全く そう 思わない
<○はい それぞれ欄にお答えください>				
a 学長の選任に、教員は投票で参加すべきだ	36.6	44.6	13.6	2.2
b 学長・理事会による管理・運営は良くなる	2.6	40.3	39.9	16.7
c 大学内での意思決定のスピードは遅い	18.6	66.7	19.6	4.3
d 教員の管理運営への参加は少くない	17.2	46.6	31.0	5.1
e 学部・学科による競争力は、適切に維持されている	17.2	66.9	20.1	2.7

問17, ご所属の学部での教育のあり方は、以下の点で、ここ数年の間に変わりましたか。(○は「ずっと」)

	強く そう思う	そう 思う	そう 思う	全く そう 思わない
<○はい それぞれ欄にお答えください>				
a 大学の教育方針	18.0	44.6	31.6	6.0
b カリキュラム・授業編成	22.4	48.6	24.1	3.1
c 授業の方法	10.6	44.4	39.0	4.1

問18, ご所属の学部では、教員の授業改善活動(PT)として下のどのものを行ってありますか。またそれは有効ですか。

	行っていない	行っている	有効
<○はい それぞれ欄にお答えください>			
a 学内研修・1日による学生の学修状況などの報告	20.9	60.1	17.2
b 外部専門家による学力・能力テスト	6.6	23.1	66.2
c 授業の相互評価	11.7	38.4	49.9
d 大学教育や授業についての教員間の協議	7.6	55.7	34.6

問19, 大学教育の改善の方向として、次のようなことを行ってありますか。またそれの方向として重要ですか。

	行っていない	行っている	重要ではない	重要
<○はい それぞれ欄にお答えください>				
a 他校と連携して授業を改善し、それによってカリキュラムを体系化する	20.3	61.7	16.0	2.0
b 週2回の授業などを通じて、学生が専攻の授業科目に集中できるようにする	8.3	34.3	64.0	9.0
c 少人数の授業を増やすよりも、授業の質、教材などを改善し、良くなるようにする	3.0	34.6	69.6	9.0
d コミュニケーション能力など、授業で習得するべき基礎能力を育成する	14.8	66.9	23.4	2.0
e 研究室、ゼミなどを通じて、教員や学生の能力を伸ばす	20.8	42.4	10.5	44.4

問20, 先にご自身は教育改善について、どちらに重点を置いて考えておられますか。(○は「ずっと」)

	13.9	48.0	33.4	3.2
	研究	どちらのこい	どちらのこい	研究
	研究	どちらのこい	どちらのこい	研究

問21, 学修中は、一週間あたり、時間をどのように分けておられますか。またそれのどのような配分が望ましいですか。

	研究	社会関係	管理運営
現状	時間	時間	時間
望ましい配分	時間	時間	時間



ご所属の大学と先生ご自身について

問14. ご所属の大学についてお聞かせください。(○はつずす)

a. 所属する大学	62.2	公立	5.6	27.6	私立	62.2
b. 全学部の学生数	11.7	1,000 人以下	21.1	28.7	3,000 人以上	8,000 人以上

問15. 先生の年齢、職階、任用形態についてご記入ください。(○はつずす)

a. 年齢	17.4	20・30歳代	38.3	31.9	50歳代	17.0	60歳代以上
b. 職階	28.2	講師・助教	28.6	42.2	助産	0.6	その他
c. 任期	81.4	任期なし	17.9		任期付		

問16. 大学教員になるまでの経緯、任用形態についてお聞かせください。(○はつずす)

a. 大学教員になるまでの経緯	71.2	20・30歳代	16.9	3.7	50歳代	1.0	60歳代以上
b. 教員になる前の職業	88.9	なし	28.4		専任		
c. 大学以外の職業経験	42.6	なし	18.7	18.5	専任・専任	13.2	その他

大学教員になった。大学教員になった。この調査結果について、ご意見を自由に記入ください。

※印刷用紙に記入し、同封している封筒に入れてください。

調査項目はこれで終わります。ご協力ありがとうございます。

※印刷用紙に記入し、同封している封筒に入れてください。

問17. ご所属の大学全体の課題についてどのように考えられますか。(○はつずす)

<○はつずす。それ以外に記入してください>

	現状で 特に問題ない	ある程度 問題がある	深刻な 問題がある
a. 入学者の増減	38.3	41.2	20.5
b. 教育内容	14.3	60.4	25.3
c. 研究水準の高下	12.8	48.7	38.5
d. 学費の増減	38.4	54.9	11.0

問18. 教員の評価、処遇について以下のようなことを考えていますか。またそれは必要ですか。(○はつずす)

	行っていない	行っている	必要か
a. 大学それぞれに特色を付けること	48.3	51.7	必要
b. 教員の処遇について、給与と福利厚生、その他の待遇の改善	48.3	51.7	必要
c. 一定の範囲内での、学費の増減の調整 (自己評価を除外)	73.8	26.2	必要
d. 教員・学生・教員組合への意見の調査	62.1	37.9	必要
e. 大学教員・教員組合への意見の調査	44.8	55.2	必要
f. 大学教員の教育活動の改善	38.3	61.7	必要

問19. 大学・教員・学生それぞれについて、どのように変化を予想していますか。(○はつずす)

	大きく 減少	やや 減少	ほぼ 不变	やや 増加	大きく 増加
a. 大学の教員・学生・教員組合の人数	10.9	23.6	64.3	10.1	1.1
b. 大学の教員・学生・教員組合の収入	20.8	51.3	28.6	3.2	3.1
c. インセンティブをつけて、学業に励むよう促すこと	8.4	32.3	41.9	14.9	1.1

問20. 大学教育の現状についてどのように考えられますか。(○はつずす)

	大きく 減少	やや 減少	ほぼ 不变	やや 増加	大きく 増加
a. 大学教育の現状	28.6	48.0	20.7	3.1	1.1
b. 大学教育の現状は、大学教育にそれなりの役割を果たしている	2.6	37.6	41.1	16.1	1.1
c. 大学教育の現状は、大学教育にそれなりの役割を果たしているため、大学に必要ない	37.0	44.3	14.6	1.1	1.1

第1調査と第2回調査の結果の比較 - 総括表

第2回				第1回				第2回—第1回			
質問項目				質問							
問4	学生への評価	十分		十分		十分		十分		十分	
		きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて
問4.出席している学生への評価a.授業への積極的参加		23.5	63.9	12.6	25.8	59.8	14.4	-2.3	4.1	-1.8	
問4.出席している学生への評価b.基礎学力		43.4	50.7	5.9	41.4	52.8	5.8	1.9	-2.0	0.1	
問5	授業の力点	非常に		重要		重要		重要		重要	
		きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて	きわめて
問5.授業の力点a.最先端の研究成果にふれさせる		11.2	56.9	31.9	11.3	54.9	33.8	-0.1	2.0	-1.9	
問5.授業の力点b.確実な学問の基礎を教える		70.3	28.3	1.4	74.6	23.7	1.7	-4.3	4.6	-0.2	
問5.授業の力点c.特定の知識・技能を習得させる		31.3	54.9	13.9	28.1	50.7	21.2	3.1	4.1	-7.3	
問5.授業の力点d.自然・社会との関わりから学問の意義を教える		31.1	58.8	10.1	30.4	56.7	12.9	0.7	2.1	-2.8	
問5.授業の力点e.学生の成長にきっかけを与える		49.7	46.8	3.5	44.2	48.7	7.0	5.5	-1.9	-3.6	
問6	授業方法 行っているか	力を入		行っていない		行っていない		行っていない		行っていない	
		れている	れている	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない
問6.授業の方法a.達成目標を明確にする * 行っているか		39.7	56.3	4.0	41.6	54.9	3.5	-1.9	1.4	0.5	
問6.授業の方法b.授業内容に興味をわくような工夫 * 行っているか		58.6	40.3	1.0	65.1	34.4	0.5	-6.4	5.9	0.5	
問6.授業の方法c.TAなどによる補助的な指導 * 行っているか		6.8	23.0	70.2	5.6	20.0	74.5	1.3	3.0	-4.3	
問6.授業の方法d.出席をとる * 行っているか		49.7	37.3	12.9	51.4	31.9	16.7	-1.7	5.4	-3.7	
問6.授業の方法e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す * 行っているか		46.5	38.0	15.5	47.3	38.3	14.3	-0.9	-0.3	1.2	
問6.授業の方法f.コメントをつけて課題などの提出物を返却する * 行っているか		21.2	39.3	39.5	22.2	37.2	40.7	-0.9	2.1	-1.2	
問6.授業の方法g.授業中に学生の意見や考えを述べさせる * 行っているか		24.9	46.9	28.2	24.0	50.3	25.7	0.8	-3.4	2.6	
問6.授業の方法h.グループワークなど、学生が参加する機会をつくる * 行っているか		24.8	34.7	40.5	18.1	27.1	54.8	6.7	7.5	-14.3	
問8	FD 有効か	非常に		有効ではない		有効ではない		有効ではない		有効ではない	
		有効	有効	有効ではない	有効ではない	有効ではない	有効ではない	有効ではない	有効ではない	有効ではない	有効ではない
問8.授業の方法a.達成目標を明確にする * 有効か		24.5	68.9	6.7	26.0	68.3	5.6	-1.6	0.6	1.0	
問8.授業の方法b.授業内容に興味をわくような工夫 * 有効か		38.9	59.0	2.1	48.4	50.0	1.6	-9.6	9.0	0.5	
問8.授業の方法c.TAなどによる補助的な指導 * 有効か		13.2	53.0	33.8	11.9	50.8	37.3	1.4	2.2	-3.5	
問8.授業の方法d.出席をとる * 有効か		25.9	55.1	18.9	27.1	54.9	18.0	-1.2	0.2	0.9	
問8.授業の方法e.最終試験の他に小テストやレポートなどの課題を出す * 有効か		35.3	58.8	5.9	40.7	52.9	6.4	-5.4	5.9	-0.5	
問8.授業の方法f.コメントをつけて課題などの提出物を返却する * 有効か		25.9	60.3	13.8	28.9	56.9	14.1	-3.1	3.4	-0.3	
問8.授業の方法g.授業中に学生の意見や考えを述べさせる * 有効か		28.9	59.1	12.0	31.0	57.6	11.5	-2.1	1.5	0.5	
問8.授業の方法h.グループワークなど、学生が参加する機会をつくる * 有効か		31.6	52.9	15.5	25.8	50.3	23.9	5.7	2.6	-8.4	
問8	FD	力を入		行っていない		行っていない		行っていない		行っていない	
		れている	れている	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない	行っていない
問8.授業改善活動(FD)a.学内調査・IRによる学生の学修状況などの報告 * 行っているか		23.8	60.4	15.9	83.1	16.9		力を入	ある程度	行っていない	
問8.授業改善活動(FD)b.外部業者による学力・能力テスト * 行っているか		9.7	35.0	55.3							
問8.授業改善活動(FD)c.授業の相互参観 * 行っているか		12.2	38.2	49.6	45.4	54.6					
問8.授業改善活動(FD)d.大学教育や授業についての教員間の討論 * 行っているか		7.9	58.2	33.9	71.3	28.7					
問8.授業改善活動(FD)e.学内調査・IRによる学生の学修状況などの報告 * 有効か					18.6	66.7	14.7	非常に有	有効	有効ではない	
問8.授業改善活動(FD)f.外部業者による学力・能力テスト * 有効か											
問8.授業改善活動(FD)g.授業の相互参観 * 有効か		10.1	62.9	27.0	16.6	65.4	18.0	-6.5	-2.5	9.1	
問8.授業改善活動(FD)h.大学教育や授業についての教員間の討論 * 有効か		15.7	68.4	15.9	22.5	65.7	11.8	-6.8	2.7	4.1	

問9 改善の方向(行っているか)		力を入 れている	ある程度 ある程度	行ってい ない	力を入れ ある程度	力を入れ ある程度	行ってい ない	力を入 れている	ある程度 ある程度	行ってい ない
問9. 大学教育の改善の方向a.習得するべき知識を標準化し、そ れに応じてカリキュラムを体系化する * 行っているか		22.1	63.3	14.6	問17	19.1	54.3	26.6	9.0	-12.0
問9. 大学教育の改善の方向b.週2回の授業等を通じて個々の授 業科目に集中できるようにする * 行っているか		8.0	34.1	57.9		8.6	26.6	64.7	7.5	-6.8
問9. 大学教育の改善の方向c.授業内容、教材などを標準化し、 TAなどを組織的に用いる * 行っているか		3.0	35.2	61.9		2.6	32.9	64.5	2.3	-2.6
問9. 大学教育の改善の方向d.コミュニケーション能力など、授業で獲 得するべき基礎能力を明確にする * 行っているか		19.7	58.3	22.0		22.6	52.2	25.2	6.1	-3.2
問9. 大学教育の改善の方向e.研究室、ゼミなどを通じて、教員 や学生間の接触を強化する * 行っているか		39.6	47.9	12.4		53.3	40.3	6.5	7.7	5.9
問9 改善の方向(将来)		非常に重 要	ある程度 重要	重要では ない		非常に重 要	ある程度 重要	重要では ない	非常に重 要	ある程度 重要
問9. 大学教育の改善の方向a.習得するべき知識を標準化し、そ れに応じてカリキュラムを体系化する * 将来の方向として		28.4	62.5	9.1	問17	25.7	63.2	11.1	-0.6	-2.0
問9. 大学教育の改善の方向b.週2回の授業等を通じて個々の授 業科目に集中できるようにする * 将来の方向として		11.5	57.1	31.4		14.8	57.5	27.6	-0.4	3.7
問9. 大学教育の改善の方向c.授業内容、教材などを標準化し、 TAなどを組織的に用いる * 将来の方向として		8.8	58.3	32.9		7.1	53.9	39.0	4.4	-6.1
問9. 大学教育の改善の方向d.コミュニケーション能力など、授業で獲 得するべき基礎能力を明確にする * 将来の方向として		28.8	61.3	9.9		34.8	56.9	8.2	4.4	1.7
問9. 大学教育の改善の方向e.研究室、ゼミなどを通じて、教員 や学生間の接触を強化する * 将来の方向として		46.1	50.1	3.8		60.5	37.1	2.4	13.0	1.4
問10 大学教育についての意見		強くそ う思う	そう思う	そう思 わない		強くそ う思う	そう思 わない	全くそ う思わ ない	強くそ う思う	そう思 わない
問13. 大学教育全般についての意見a.自分の経験した学部教育 より、現在の方が良くなっている		14.2	41.3	33.0	問28	11.4	12.1	39.9	2.1	1.4
問13. 大学教育全般についての意見b.誰にとっても意味がある 教育として大学教育の理念を考え直すべきだ		9.1	44.1	39.2		7.6	14.3	50.7	-5.2	-6.6
問13. 大学教育全般についての意見c.授業料が高くなっても、高 質の教育を行うべきだ		12.0	40.3	40.9		6.8	10.7	38.0	1.3	2.2
問13. 大学教育全般についての意見d.大学と一般社会の認識 ギャップが広がっている		17.3	43.3	36.2		3.2	16.6	45.6	0.7	-2.3
問11 大学の管理運営		強くそ う思う	そう思う	そう思 わない		強くそ う思う	そう思 わない	全くそ う思わ ない	強くそ う思う	そう思 わない
問14. 大学の管理運営についてa.学長の選任に、教員は投票で 参加すべきだ		34.4	48.0	15.3	問24	2.3	43.1	44.2	-8.7	3.7
問12 所属大学の課題		現状で 特に問 題ない	ある程度 重要な課 題	きわめて 重要な課 題		現状で特 に問題な い	ある程度 重要な課 題	きわめて 重要な課 題	現状で特 に問題な い	ある程度 重要な課 題
問15. 大学全体の課題についての考えa.入学者の確保		22.9	38.8	38.3	問22	27.7	35.9	36.4	-4.8	2.9
問15. 大学全体の課題についての考えb.教育改善		13.1	59.9	27.0		9.4	57.2	33.4	3.7	2.7
問15. 大学全体の課題についての考えc.研究水準の高度化		12.3	49.6	38.0		10.7	50.8	38.5	1.6	-1.1

2020 年 10 月 13 日発行

